

2017 年度「フィールドワーク」報告書

札幌学院大学人文学部社会調査室研究基礎資料報告書 39

## 支えあいの心と共に生きる文化

—昭和村における人びとのつながり—

札幌学院大学人文学部社会調査室



目次

|     |                      |    |
|-----|----------------------|----|
| 1   | 2017 年度「フィールドワーク」の概要 | 1  |
| 2   | 昭和村の現状               |    |
| 2-1 | 統計からみる昭和村            | 3  |
| 2-2 | 新聞記事にみる昭和村           | 7  |
| 2-3 | メディアにみる昭和村           | 9  |
| 3   | 調査結果：事例              |    |
| 3-1 | 高齢者を支えるしくみ           | 13 |
| 3-2 | 子どもたちの暮らし            | 18 |
| 3-3 | 若者と移住                | 20 |
| 3-4 | JA 会津よつばのとりにくみ：雪室    | 22 |
| 4   | 考察                   |    |
| 4-1 | 村に住み続けるということ         | 24 |
| 4-2 | 地域活性化の秘訣             | 26 |
| 4-3 | 人口減少社会における子どもたち      | 28 |
| 4-4 | 高齢者を支えるしくみ・文化        | 30 |
| 4-5 | 高齢期を迎えても村に残り続けるためには  | 32 |
| 5   | フィールドノーツ（調査日誌）       | 35 |

# 1 2017 年度「フィールドワーク」の概要

札幌学院大学人文学部人間科学科 木戸功・内田司

## 現地調査実習までの経緯

2017 年度「フィールドワーク」(1) は 8 人の履修者を担当教員である内田と木戸が福島県大沼郡昭和村まで引率し、現地でのフィールドワークを実施した。「フィールドワーク」の授業での引率は 2015 年度からつづき今回が 3 度目となる。特定非営利活動法人苧麻倶楽部の協力とコーディネートののもとで、現地での 3 泊 4 日の実習を実施した。これまでと同様に、内田が苧麻倶楽部の和泉氏とのメールでのやりとりを通じて、現地実習のプログラムを検討しつつ、後期開講科目である「フィールドワーク」が開始された。

授業の進め方には大きな変更点はなく、初回の授業では、過去数年間のフィールドワークの様子を紹介しつつ、現地の写真や、ムービーなどを視聴し、また昨年度の報告書も配布し、対象地となる昭和村について、その概要を説明した。そのうえで、受講学生たちには、次週までに昭和村について、調べてレポートにまとめるという課題にとりくんでもらった。その翌週からは、昭和村の現況を把握するために、e-stat を利用して、統計データの収集と整理にとりくんだ。統計データは、人口と世帯に絞って、とくに本年度になって公開された 2015 年国勢調査のデータを収集し整理した。それらは本報告書に「2 昭和村の現状」にまとめられている。また、本年度は新聞記事およびネットメディアにおいてとりあげられている村のイベントやニュース等の事例をドキュメントとして収集し、村の現状を知るための事前学習の素材として活用した。これらもそこに含まれている。

10 月下旬から、現地調査に向けた準備にとりかかった。昨年度の現地実習では昭和村小野川地区を主たるフィールドとし、そこに暮らす人びとの暮らしぶりを体験的に把握することが中心的な目的であったが、本年度は野尻地区に受け入れていただいた。また現地実習の直前に事前学習の一環として、昭和村を舞台として撮影され 2013 年に公開された映画『ハーメルン』を視聴した。

## 調査の目的、対象、方法

現地調査の主たる目的は、昨年同様に昭和村の人々の暮らしぶりをつながりを体験的に把握することにあつた。現地では、冬期に向けた雪囲いの作業やゲートボール場の整備、さらにゲートボールの体験などの活動を地域の人びととともにし、また、会食の準備をともにし、フォーマルではない聞き取りと、参与観察の方法をもちいて、調査を実施した。参加者全員が野帳を携帯し、フィールド・エントリー以降の筆記による観察記録にもとづいて調査日誌を作成した。それぞれが作成した日誌は、「フィールドノーツ」として整理され、本報告書に収めてある(5 節)。

## 現地調査の行程

現地調査の行程は以下のとおりである。

- |               |   |
|---------------|---|
| 10 月 29 日 (日) | 10:30 新千歳空港集合、飛行機で仙台空港へ                         |
|               | 13:55 仙台空港から高速バスにて会津若松市へ移動                      |
|               | 17:00 すぎに特定非営利活動法人苧麻倶楽部の方々と合流<br>自動車で昭和村野尻集落へ移動 |
| 10 月 30 日 (月) | 午前 JA にて雪室見学ののち村内を散策、その後からむし織りの里へ (織り体験)        |
|               | 午後 すみれ荘 (昭和村保健福祉課) へ移動し、昼食                      |



昼食をとりながら保健福祉課長さんからお話を聞く  
夕方から 野尻地区へ戻り地域の人々と夕食の準備、その後、会食と懇談

10月31日(火) 午前 野尻地区の方々と地域の共同作業(雪囲い、ゲーボール場の整備)に参加  
午後 昼食をとりつつ懇談、夕方から交流会と現地報告会の実施

11月1日(水) 6:30 野尻集落から会津若松市へ自動車にて移動  
8:08 高速バスにて仙台空港へ  
14:45 飛行機にて新千歳空港へ  
16:00 新千歳空港にて解散

### データの整理と考察、報告書の作成

大学に戻り、翌週の授業から記録の整理作業を開始した。現地で作成した手書きの調査日誌を、それぞれが推敲し清書したフィールドノーツを作成した。また、現地での聞き取りと参与観察の結果を、高齢者を支えるしくみ(3-1)、子どもたちの暮らし(3-2)、若者と移住(3-3)、JA会津よつばのとりくみ:雪室(3-4)の4つに区分して事例として整理した。こうした作業をふまえて、履修者たちは個人あるいは関心が重なるものは共同でそれぞれ、テーマを設定し、レポート(4 考察)を作成した。いずれも授業最終日まで、毎回の授業で原稿の読み合わせを行い、推敲を重ねた末に、すべての原稿が提出された。その後は担当教員である木戸が編集にあたった。

## 2 昭和村の現状

### 2-1 統計からみる昭和村

新井緋香利・太田 早紀

昭和村全体と野尻地区の現状を統計に基づき、概観する。以下のデータは昭和村に関する人口等を e-stat というサイトを用いて調査し、表・図にまとめた。又、昭和村野尻地区の人口等を人口統計ラボというサイトを用いて調査し、まとめたものである。前回の 2016 年度フィールドワークの報告書において、昭和村における 1980 年から 2010 年までの統計についてまとめてあるが、ここでは 2000 年から 2015 年の間のデータを取り扱う。

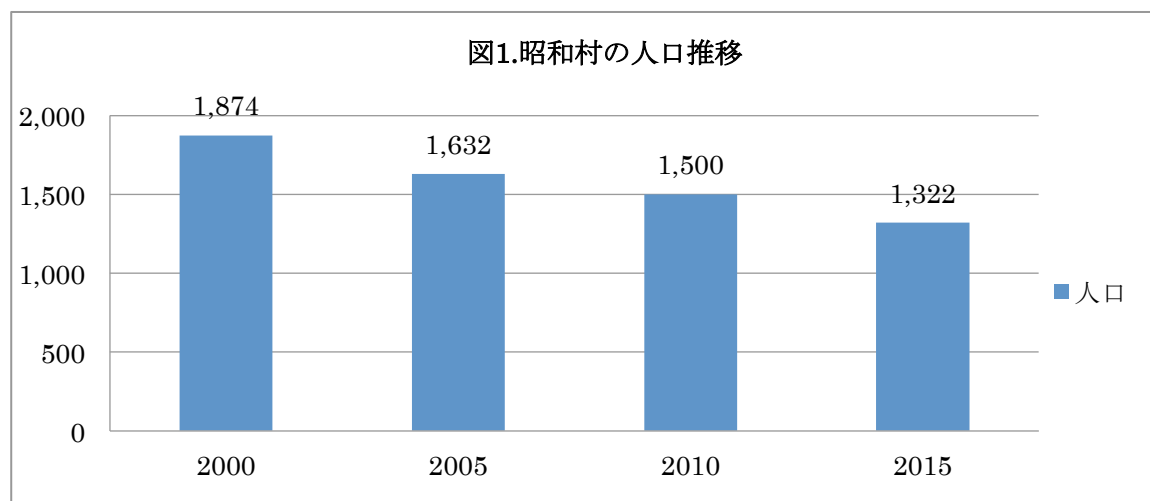
あ

#### 1. 昭和村について

ここでは、福島県昭和村について国勢調査をもとに人口等を表・グラフに整理した。これらを用いながら、昭和村の現状について述べる。

##### 1-1. 人口について

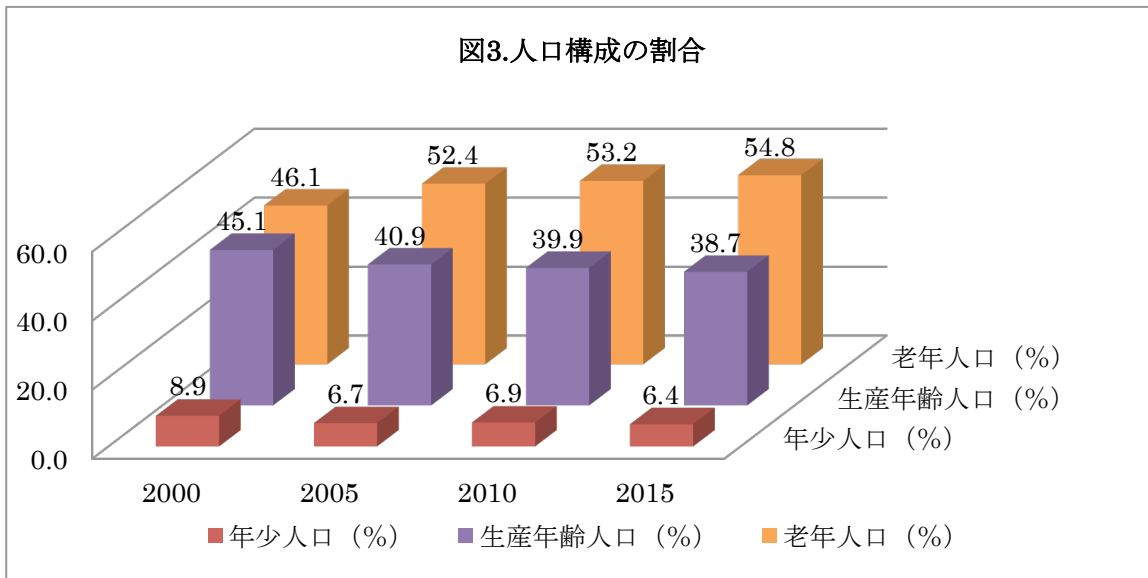
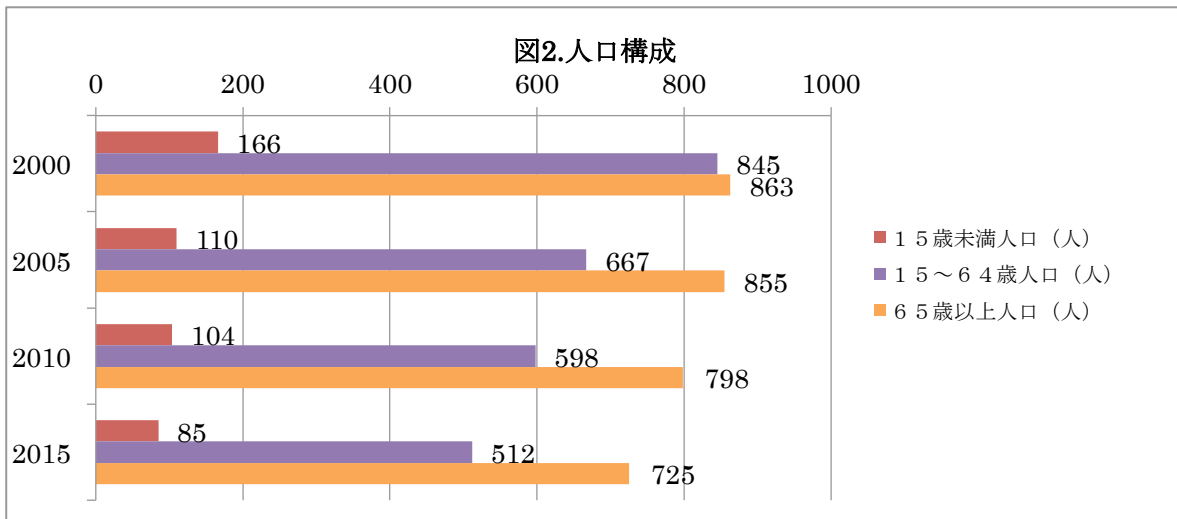
まず、人口の推移について見ていく。図 1 は福島県昭和村の 2000 年から 2015 年までの人口の推移を表したグラフである。昭和村の人口は年々減少傾向にあり、2000 年から 2005 年では 242 人、2005 年から 2010 年では 132 人、2010 年から 2015 年では 178 人減少している。2000 年から 2015 年の人口推移をみると 15 年間で 552 人減少しており、昭和村の人口が大きく減っているのがわかる。



次に、昭和村の人口構成についてだ。図 2 はそれについてグラフ化したものである。15 歳未満人口のことを年少人口、15～64 歳人口を生産年齢人口、65 歳以上人口を老年人口と記す。5 年刻みに 3 区分すべての人口において年々減少していることがわかる。とくに生産年齢人口はおおよそ 100 人ずつ減少しており、人口の減少が顕著に表れている。2000 年の調査では生産年齢人口と老年人口の差は 20 人程度であったが、2005 年のグラフから差が大きく開いている。年少人口を見ると 2005～2015 年の間で 81 人減少しており、2015 年の年少人口は 2005 年の約半数ほどまで減少している。

また、昭和村の人口構成の割合を図 3 に表したが、年少人口は 2005 年から 6%台になり、極めて少数であることがわかる。この 15 年間で老年人口の数が減っているが、人口全体の総数全体が減少しているため、老年人口の割合は多くなっている。そして、老年人口の割合が 2005 年から 50%以上になっており、現在は村の人口の半数

以上がお年寄りであることが読み取れる。



### 1-2. 昭和村における人口動態について

ここでは、2000年から2015年までの昭和村の人口の増減を表1より概観する。出生数を見てみると2002年から一桁になっており、死亡数が多く上回っているため、出生数・死亡数のみで見ると人口の自然減が続いていることがわかる。転入者と転出者については、2014年までは転入者を転出者が上回る人口の社会減が続いてきている。2015年には転入者が転出者を上回ったが全体としては人口が減少傾向であることに変化は見られない。

また、2010年から2015年の間に着目すると、一番マイナスの数値が少ないのは2011年の-26である。2013年、2014年は-60近くの数値であり、一番マイナス数値の少ない2011年と比べると2倍ほどの違いがある。

表 1.人口動態の増減

|      | 2000 | 2001 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 出生数  | 11   | 11   | 8    | 7    | 4    | 5    | 6    | 5    | 6    | 6    | 7    | 5    | 5    | 4    | 4    | 5    |
| 死亡数  | 31   | 33   | 31   | 25   | 39   | 38   | 30   | 41   | 32   | 41   | 36   | 32   | 33   | 47   | 45   | 40   |
| 転入者数 | 37   | 49   | 38   | 49   | 19   | 31   | 31   | 34   | 45   | 35   | 44   | 33   | 35   | 31   | 30   | 52   |
| 転出者数 | 66   | 60   | 62   | 64   | 61   | 45   | 62   | 48   | 48   | 53   | 49   | 32   | 44   | 45   | 47   | 50   |
| 合計   | -49  | -33  | -47  | -33  | -77  | -47  | -55  | -50  | -29  | -53  | -34  | -26  | -37  | -57  | -58  | -33  |

## 2. 野尻地区について

ここでは、国勢調査と地価公示データに基づいた情報を掲載している人口統計ラボを参考に野尻地区の人口等を図・表に整理した。これらを用いて野尻地区の現状を述べていく。

まず、野尻地区の人口総数と世帯数について見ていく。図5は野尻における世代別人口の割合、図6は男女別に見たときの世代別人口の割合をグラフにしたものである。総数人口・男性人口・女性人口全てにおいて、半数以上を65歳以上の割合が占めている。総数は223人であるが、男女比はおぼろ同じで男性の方が1人多い112人となっている。また、15歳未満の割合を見ると4%を切っており、男女別に見ると65歳以上は女性に多く、15歳未満・15～64歳の割合は男性に多いことがわかった。

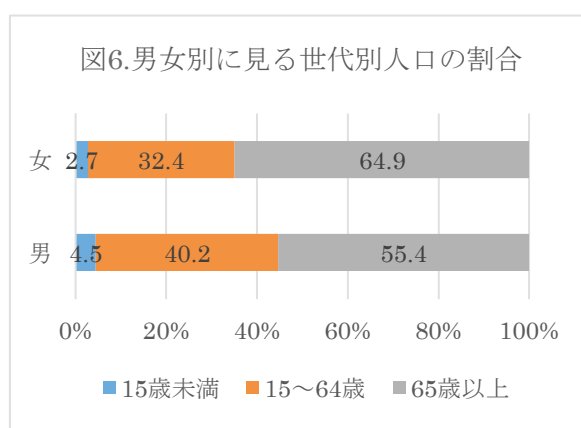
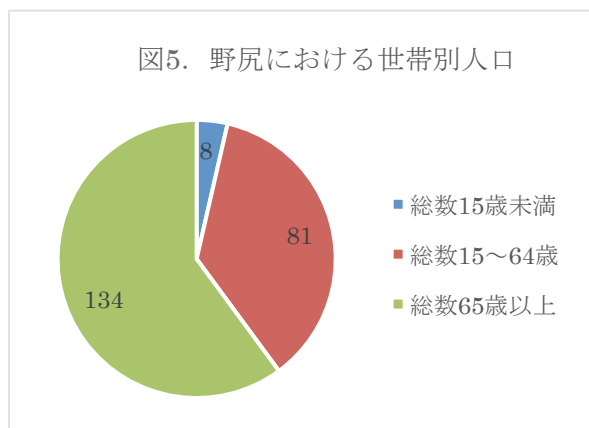


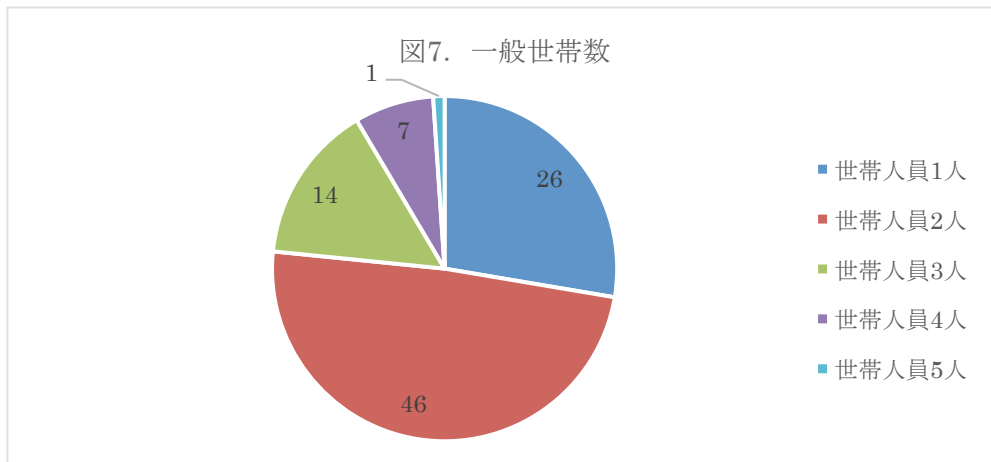
表 2.野尻地区の人口と世帯数

|      |       |
|------|-------|
| 人口総数 | 223 人 |
| 男    | 112 人 |
| 女    | 111 人 |
| 世帯総数 | 99 世帯 |

次に野尻地区の世帯人員別にみた一般世帯数と家族類型別一般世帯数について見ていく。図7は一般世帯について表3は家族類型別一般世帯数について記している。図7を見ると一般世帯数は世帯人員2人の世帯が一番多い。このことや老年人口が多いことから老年夫婦が多いと考えられる。また、世帯人員1人の世帯が26世帯あり、高齢者の一人暮らしや転入者、独身などの単身世帯が野尻では2番目に多く、今後の高齢化・転出者を考えると増加することも推測される。世帯人員3人を超える世帯は27世帯あり、子どもがいる世帯や自分の親を介護する世帯などが多いのではないかと考えられる。

世帯人員2人の世帯は99世帯のうち46世帯で一般世帯総数のうちの約半数を占めている。一般世帯総数が99

世帯であり、そのうち73世帯が親族世帯なので26世帯が世帯人員1人の単独世帯であることがわかる。現在、世帯人員数が3人以上の世帯も全体の25%ほどあるが、今後、子どもの進学や就職・高齢化に伴う死亡率の増加を考えれば世帯人員2人世帯と世帯人員1人世帯の増加が推測される。



(一般世帯数 99世帯、一般世帯人員 223人)

表3 野尻地区の家族類型別一般世帯数について

|          | 世帯 |                   | 世帯 |
|----------|----|-------------------|----|
| 一般世帯総数   | 99 | 6歳未満世帯員のいる一般世帯総数  | 3  |
| 単独世帯     | 26 | 18歳未満世帯員のいる一般世帯総数 | 5  |
| 核家族以外の世帯 | 17 | 65歳以上世帯員のいる一般世帯総数 | 88 |
| 核家族世帯    | 56 |                   |    |

## まとめ

### ○昭和村全体について

昭和村の人口は2000年から2015年の間に552人減少している。どの世代も15年間で減少傾向にあり、特に生産年齢人口は調査のたびに約100人ずつ減少している。世代別の割合を見てみると、2005年から老年人口が50%を越え、同じ年に年少人口が6%台になっている。このことから、村内では半分以上がお年寄りであり、子どもの数は極めて少ないということがわかる。人口動態を見ると、出生数は2002年から一桁になっており、死亡数が多く上回っている。したがって、出生数・死亡数のみで見ると人口の自然減が続いている。転入者と転出者については、2014年までは転入者を転出者が上回る人口の社会減が続いてきており、2015年には転入者が転出者を上回ったが、全体数としての変化はない。

### ○野尻地区について

人口としては村の状況と同じような、少子高齢化が進んでいる。世代別で見た場合、老年人口は女性が多く、年少人口・生産年齢人口は男性が多いことが分かった。

世帯人員が二人で構成されている世帯が最も多く、二番目に多かったのは世帯人員が一人で構成されている世帯である。

## 2-2 新聞記事に見る昭和村

高瀬優太・川村亜季・佐藤楓

新聞班は、新聞記事から昭和村の概況を把握し、興味深いと感じた記事をまとめた。「福島県 昭和村」を共通の検索ワードとし、それに続けて「高齢者」「からむし」「野尻」の3つのワードでヒットしたものを、実際の新聞記事などを引用しながら、以降紹介する。

### 高齢者

まず、「福島県 昭和村」に続けて「高齢者」を含めて検索した結果は、2017年12月6日現在で57件あった。データは朝日新聞記事検索サービス聞蔵ビジュアルIIから収集したもので、この検索語では、1987年6月19日から2017年10月16日までの新聞記事データがある。

高齢者を含めて検索した結果、高齢化についての記事や、自治体のはたらきに関する記事、そして政治関連のものが多く見られた。以降はそれらの記事の中で特筆すべきと感じたものをいくつかピックアップし、紹介する。

高齢化についての記事では、2017年9月17日朝刊（福島中会）の『高齢化率、初の3割超え 100歳以上は1065人、過去最高を更新／福島県』を紹介したい。統計班のデータからも、昭和村の高齢化率の高さは伺うことができる。この新聞記事においても、その高齢化率の高さが伺えた。この記事では、福島県全域で調査された高齢

化率の結果、最も高かった5つの市町村が順に紹介されている。福島県としても高齢化率は高い中、昭和村は紹介された市町村の中で上から2位であり、56.3%という高さである。

次に自治体のはたらきについてだが、これは2007年1月25日朝刊（福島中会）のものを紹介する。『消防団女性とOBが頼り 団員不足で活躍に期待 県、フォーラムで活動PR／福島県』という記事だが、これは県内全体で消防団員が減少しているという内容である。そのような中で、県内の一部地域では女性や、消防団のOBも含めて活動しているという。昭和村は女性やOBも活動しているということである。活動内容は主に避難誘導や災害時の情報発信だが、消防団員の不足を補うため、OBを消防協力団員として迎えている。

最後に政治関係の記事については2017年10月16日朝刊（福島中会）の『(選挙を歩いて) 1300人の村、変わる政治熱 衆議院／福島県』を紹介する。昭和村における政治への関心は、投票率の下がり続ける福島県の中でも強まりを見せる。村民全員が顔見知りであり、選挙に行かないと何を言われるのか分からないとして、東京から移

朝日新聞 2017年9月17日 朝刊 25ページ 福島中会

### 高齢化率 初の3割超え

100歳以上は1065人 過去最高を更新

県人口に占める65歳以上の割合（高齢化率）は30・1%となつて、初めて3割を越えた。18日の「敬老の日」を前に、県が15日、8月1日現在の推計人口をもとに発表した。高齢化率は前年より0・8割増えた。百歳以上の高齢者は9月1日現在で1065人で、前年より19人増え、22年連続で過去最高を更新した。

高齢化率が高い自治体は、①金山町58・2% ②昭和村56・3% ③三崎町52・5% ④只見町45・6% ⑤西会津町45・2%で、上位5位までが、すべて会津地方だった。

一方、低かった自治体の上位5位は中通り地方が占め、①西郷村24・0% ②郡山市26・2% ③大玉村26・5% ④鏡石町26・6% ⑤須賀川市26・9%の順だった。（池田拓哉）

朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。 全ての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年1月25日 朝刊 23ページ 福島中会

### 消防団女性とOBが頼り

#### 団員不足で活躍に期待

消防団の団員不足が深刻化している。消防団の団員不足を補うため、女性やOB（元団員）の活躍に期待している。消防団の活動内容には、避難誘導や災害時の情報発信だけでなく、防火防犯活動や、地域の安全確保なども含まれている。消防団は、地域社会の安全を守る重要な組織である。

#### 県フォーラムで活動PR

県内各地で開催されている消防団フォーラムでは、女性やOBの活躍の場を提供している。消防団の活動内容を広く知らせ、地域の理解を得ることが大切だ。消防団員は、地域社会の安全を守るために日々努力している。彼らの活躍を支援し、消防団の活動を活性化させることが重要だ。

朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。 全ての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。



住してきた40代の男性も選挙へまめに通うようになったという。その男性は、誰に投票しても生活の改善を見込めないと感じ、東京に住んでいたときは、街頭演説に耳を貸すこともなかったという。しかし昭和村では、高齢者は政治に失望していないと、男性は述べている。博士峠のトンネル工事着工について喜ぶ村の高齢者から、生活と政治の結びつきを感じたという。

## からむし

続いて検索ワードを「からむし」とした場合、2017年11月28日現在ヒット件数は75件である。その中で、よく話題に上がるトピックスとして、「からむし工芸博物館について」「織姫制度（織姫体験生の募集記事・現役織姫へのインタビュー）」、「からむし織の個展・展覧会開催のお知らせ」、が挙げられる。以下トピックそれぞれについて新聞を取り上げ紹介する。

まず、からむし工芸博物館に関係するものとして、2014年8月1日朝刊（福島全県）に掲載された『からむし織の里／入場者10万人に』という記事を紹介する。

2001年に昭和村佐倉にて開館した「からむし工芸博物館」の有料入場者数が10万人を突破した。会館満13年目の出来事であった。博物館は「からむしの里」の中にあり、からむし栽培の道具や着物などを展示している。記念すべき10万人目となった女性からは「昭和村は紅葉も素晴らしいとのこと、次回はゆっくりと訪れてみたいと思っています」との礼状が同館へと寄せられている。



続いて、織姫制度に関するものとして2011年1月23日朝刊（福島中会）に掲載された『高品質若者も支え／村外から体験生担い手に』という記事を紹介する。

こちらの記事では、昭和村の特産品「からむし織り」とその生産用具が、国の重要有形民俗文化財に内定したことが伝えられている。からむし織りを高い品質と評価しており、村民と「織姫」と呼ばれる村外から来た若者に支えられ、製品の幅に広がりを見せつつあると紹介されている。記事掲載当時、からむし栽培農家は42軒あり、その平均年齢は72歳と高齢化が進んでいた。そこで村は1994年に村外からからむし織り体験生を受け入れる「織姫制度」を設けた。これまでに織姫制度に88人が参加し、そのうち4人に1人は村にとどまることを選びからむし織りの生産を支えているそうだ。

最後に、個展・展覧会開催について関するものとして2017年3月11日朝刊（香川全県）に掲載された『東北大震災6年／東北応援しよう／現地の「手仕事」展示』という記事を紹介する。

この記事は東日本大震災が発生してから6年が経つ2017年3月11日に掲載されたものである。

東日本大震災の時期に合わせて、香川県内で東北を応援しようという展示会が開かれた。東北地方の「手

仕事」で作られる製品を紹介し、展示販売する企画として開催された。昭和村のからむし織も東北地方の手仕事の1つであると展示販売された。

## 野尻

最後に検索ワードを「野尻」とした場合の新聞記事について紹介する。検索した結果 16 件ヒットした。この結果は 2017 年 12 月 6 日現在のものである。その記事の中で話題によく上がったものが、災害が起こったということ、村人のキツネの伝承、魚釣りについてだった。

2009 年 5 月 27 日の朝刊の記事では「アユ漁あの手この手」というタイトルの記事があった。記事の内容を要約すると、毎年アユの稚魚を川に放流し、アユ漁、釣りをを行っている。その放流する解禁日を今年度は前倒した。前倒しすることで天気や水温の状況がよくなる、ということである。ここから毎年釣りが行われていたことがわかる。

キツネの伝承の記事は、「村にはこんな伝承がある」と新聞筆者が語っているのではなく、村の人が語ったことをコラムとして記事にしている。2012 年 9 月 28 日の朝刊の記事では「櫓の積み荷を、よく取られた」というタイトルの経験談があった。これを語ったのは昭和村の野尻に住む高齢者の方で、以下、内容を要約していく。昔、竹の原の雪道を身欠きニシンを櫓に積んで歩いていた。途中、櫓を押してくれた人がいて、引くのが楽になったと思ったら、いつの間にか荷物が半分ほどなくなっていた。そうやってキツネにニシンを取られた、という内容だった。また、同じ記事の中にもう一つ記事が載っていた。昔はドブロクの「もと」を作るのがとても上手な婆様がいて、「もと」をもらってきた、という記事だった。私達が昭和村を訪れた時も村の方々は懇親会に自作のドブロクを持ってきてくださった。ドブロクを作るという歴史は数十年前から耐えることなく続いているようだ。

災害の記事には水害、雪害がいくつか記述されていた。2015 年 9 月 11 日の朝刊に「ボートで脱出『たまげた』南会津で橋流失、集落孤立も 記録的豪雨／福島県」というタイトルの記事があった。この年の台風 18 号から変わった低気圧の影響により、「50 年に一度」と言われるほどの豪雨になったようだ。この豪雨で周囲の市町村を含め、通信が乱れる、数百人が避難する、浸水するなど多くの混乱をもたらしたようだ。新聞記事を調べていくつかこうして水（雪）害に関する記述があり、山々に囲まれていて自然の影響を受けやすいのだという印象を受けた。そして実際に昭和村で村民の方に話を伺ったとき「水害が怖い」という話をきくことができた。ちなみに日本では全体的に地震を恐れている。しかし昭和村は、東日本大震災の時も震源や原発から距離が離れていたため、大きな被害ではなかったこと、昭和村は地盤が固く、あまり震災を恐怖していないとのことだった。

## 2-3 メディアにみる昭和村

高見知紗・松田みなみ・由良綾音

### 1. はじめに

福島県昭和村に行く前にフィールドワーク内のメンバーでメディア班、新聞班、統計班に分かれ、昭和村についての現状を調べた。我々メディア班は、インターネット上で昭和村がどのように取り上げられているかをブログ、SNS、Web サイトなどを検索した。その中で、昭和村内部から発信されているサイトは以下のものがある。昭和村の公式ホームページ「福島県昭和村」、NPO 法人「苧麻倶楽部」、福島県昭和村民家再生プロジェクトをしている「SATORU」、サイクリングを利用して得点を獲得していくイベントのサイト「Showa Fun Ride 2017」、福島県が運営している「ふくしま新発売。」というサイトがあった。



## 1. 株式会社 SATORU

株式会社 SATORU とは 2016 年 6 月 21 日に設立された会社である。所在地は野尻地区である。『SHAREBASE プロジェクト』（地方創生/復興支援プロジェクト）として、福島県昭和村を拠点とした古民家の改修工事を中心にイベント、カスミソウ、はちみつ、温泉など彼ら目線のおすすめスポットや彼らの村でのライフスタイルを紹介している。「都会には無い、田舎ならではの感動を共有したい！！」という想いから株式会社 SATORU の SHARE BASE プロジェクトを発足。所属メンバーは 3 人と少々小さめの会社ではあるが、活動は活発である印象を受けた。3 人はそれぞれ、大学卒業後 1 度就職し、SATORU へ。メンバーのうち 1 人は福島県会津出身であるが、残りの 2 名は出身が他県である。

### WEB CREATIVE

WEB制作全般を行います。新しいサイトの作成、リニューアルはもちろん、バナーのみでもお気軽にお声がけくださいませ。



『SHAREBASEプロジェクト』（地方創生/復興支援プロジェクト）として、福島県昭和村を拠点とした古民家の改修様子や昭和村を中心に福島県地域の情報、株式会社SATORUメンバーのライフスタイル情報を随時発信しております。



## 我々が住む昭和村野尻地区の菜の花畑

## 2. からむし

閲覧した「灯台もと暮らし」とは地域特集を行っているサイトである。昭和村のからむしについての掲載がある。サイト名は、ことわざの「灯台下暗し」の意味を含む。忙しく生活する中で変化していく世の中をもう一度見直していくためのきっかけ作りをするサイトである。

昭和村のからむしについては、元織姫に対するインタビューを通じてからむしについて記述してある。

## 灯台もと暮らし

これからの暮らしを考えるウェブメディア

ホーム > 営みを知る > 【福島県大沼郡昭和村】

【福島県大沼郡昭和村】だいたいなのは、ここでの「いとなみ」が変わらずに巡っていくこと。からむし布のこれを探りながら。 | 「渡し舟」  
渡辺由子・佐木由貴子



からむし焼きや刈り取り、からむし剥ぎ、からむし引きなどからむし栽培工程が写真とともに掲載されている。元織姫たちは、からむしをとりまく環境がもっとよくなってほしいと考え、村の内と外をからむしを通じてつないで村の人たちに恩返ししたいと考えたという。昭和村の公式ホームページで、今回お邪魔したからむし織工芸館も紹介されている。入り口から展示されているものも掲載されている。

### 3. カスミソウ

「ふくしま新発売」は福島県が運営しているサイトである。カスミソウの産地である昭和村に記者が行って、実際の栽培風景や出荷過程が載っている。JA 会津みどりカスミソウ部会長のインタビューよりも、どのように栽培しているのか、昭和村のカスミソウについてのことを記者側からの視点で書かれていた。また、1で記述した「SATORU」でもカスミソウを使ったドライフラワーの記事があるなど、「SATORU」でも取り上げられていた。



「JA 会津よつば」は今回お邪魔した、カスミソウ発送業者の JA 会津よつば。カスミソウについての詳細や、歴史、花の楽しみ方などが紹介されている。

### 4. 映画「ハーメルン」

昭和村を撮影地とした映画。美しい日本の風景が描かれている。旧喰丸小学校をテーマとした映画である。西島秀俊、倍賞千恵子が出演している。

参照

福島県昭和村古民家再生プロジェクト/シェアベース

<https://web.satoru-co.jp/>

灯 台 も と 暮 ら し

<http://motokurashi.com/feature-fukushima-showamura/20170>



922

福島県昭和村 <http://www.vill.showa.fukushima.jp/kogeikan/01.stm>

ふくしま新発売。 <http://www.new-fukushima.jp/archives/32353.html>

JA 会津よつば <http://aizuyotuba.jp/products/kasumisou/>

映画「ハーメルン」 <http://www.hameln-film.jp>

## 3 調査結果：事例

### 3-1 高齢者を支えるしくみ

新井緋香利・高瀬優太・太田早紀

本項では、昭和村で話をお聞きした中で高齢者に関する話題のもの、または高齢者から話を聞いたものを事例としてまとめ、紹介する。

#### 芋麻倶楽部のスタッフの方から聞いたお話

初日に芋麻倶楽部の方々が会津若松から昭和村へ送迎してくれた。その間に1時間ほど、昭和村についての様々な話をしてくれた。

まず、野尻という地域について話してくれた。昔、横田山内家という家から分家し、野尻山内家になったことが野尻地区の始まりだと言っていた。その時代から、教育に心血を注ぎ、人を助ける精神があったようだ。昔から村の代表者は村出身の者を起用する決まりがあり、現在でも村長は野尻の出身者なのだという。地域での伝統的な慣習、習慣は、戦国時代から行われているものもあるのだとおっしゃっていた。

また、野尻では苗字は8つほどしかなく、多くの住民が個人を下の名前で呼び合う傾向にあるのだそうだ。彼女はの様子を「かわいいよね」と笑っていた。かわいいと言えば、といった感じで、野尻の夫婦は仲が非常に良いということも話してくれた。1つの仕事を夫婦で役割を分担して行うことが多いからではないか、と言っていた。彼女もその夫婦仲の良さが気になったと言い、彼女が集落内のある女性に、どうしてそこまで夫婦の仲が良いのか、と聞くと「私が可愛くて、父ちゃんがかっこいいだけだ」と返されたという。二度とこの話はしないと決めたと言っていた。

車での移動が半ばに差し掛かったあたりで、野尻では他人の概念がない、という話題が出た。例えば、と言って話してくれたのが車のナンバープレートの話である。村内では、住民の多くが車を所持している。そんな生活の必需品とも言える車だが、多くの住民が他の住民の車のナンバープレートまで把握しているらしい。そのため、村外に車で出かけた際、見つけたナンバープレートがあると後日「あそこで何していた」という話につながるという。村の若い男性は、誰かと遊びに行くために車を使用すると、いつ誰とどこに居たかが筒抜けになる、と言っていたという。筒抜けになる、というのも、誰が誰といつどこで何をしていたかも、一瞬で集落に、ひいては村内に広がるという。しかし、本当に話してはいけないことは絶対に口外しない人々だという。また、他人の概念がないと言いつつも、現在では子どもを持つ母親の孤立が問題になっているのだとおっしゃっていた。

外部からの移住者についての話題が出た歳、織姫制度の話になった。織姫制度には昔、年齢制限があったという。申し込みの上限が27歳までとなっており、その理由としては後継者育成の観点があるのだそうである。6～7年前にその上限が解消されてからは、30代くらいの人でも来るようになったという。織姫制度の問題としては、織姫の活動のみでは生活にこまるということと、同年代の相手が見つからないことによる結婚のしづらさがあるという。それらを踏まえて彼女が提案しているのは、織ばあ制度というものだった。道の駅で織姫さんの姿を見て、からむし織りをやってみたいと思う方がいるらしい。そのような方々は「若い人しか採用しないだろう」と自分から諦めてしまうのだという。しかしそれはもったいないと彼女は話していた。織姫ではなくとも、もう少し気軽にからむし織りに触れられる場があればいいとおっしゃっていた。

次に子どもが少ない、という話から、昭和村での子どもの過ごし方についての話題になった。村の子供たちは、基本的には都会の子どもたちと変わらない生活をしているという。これは、家と家との距離が遠く、気軽に遊びに行くことが難しい環境にあることが大きいらしい。そのため、子どもたちは自宅で遊べることからゲームを好んで

いるという。スマートフォンでのアプリゲームも人気で、都会で流行ったものはそのまま村内の子どもの中でも流行っているのだとか。

また、村内における結婚にまつわる話もしてくださった。近年では、昭和村出身者同士での結婚が少ないという。まず、若い世代の結婚相手が居ないということが一番の理由に挙げられるとのことである。そのような中で、織姫制度やカスミソウ従事者など、外部からの移住者が増えたことも大きいという。以前は、同じ仕事を夫婦で分担していたが、織姫とカスミソウ従事者のように、夫婦で別の仕事に就いているケースも多くなってきたのだとおっしゃっていた。

そして、そう言えば、と高齢者の転出について話してくださった。昭和村の高齢者の多くが、自分の子どもを村外に出す傾向にあるという。子どもはそのまま村外で家庭を持ち、親である高齢者は1人暮らしのまま村で生活する。それを案じた子どもが、村を出て一緒に暮らすことを提案し、村外に転出してしまふことが増えてきたらしい。その場合、村を出るのは高齢者本人の意思ではないという。本当は村から出たくないということだが、子どもの意見を尊重して渋々出て行ってしまうケースがほとんどだという。その結果、子ども夫婦に気を使って息苦しい思いをしたり、村で行っている毎日の畑仕事などができなくなる等の影響で、認知症に陥りやすくなるという。この話をしてくれた際、彼女は村の人との関わりもあるし、村での生活こそ本人が満足できる生活の形に適しているのではないかと話してくださった。村から離れない方が、幸せに暮らせると思う、ともおっしゃっていた。

### 保健福祉課で伺ったお話

2日目のお昼、昭和村における保険・医療・福祉総合センター、すみれ荘にお邪魔した。前年度の報告書の中にも出てきた、村でも有名なソースカツ丼を出前していただき、それを食べながら保健福祉課長さんのお話を伺った。

保健福祉課長さんは、まず、昭和村の概況について説明してくれた。昭和村は、村の9割が山林であり、10の集落からなると教えてくださった。子どもは年に片手で数えられるほどしか生まれず、その数は年々減っているという。交通手段は、バスの二線ある路線の中で3往復しかないとのことである。そのため、自家用車の所有率が高く、高齢者でも自家用車に乗ることが多いらしい。車を所有していなくても、生活には事欠かないとのことだが、免許はあった方がいいと言う。高齢者の中には、村民の誰かの車に乗せてもらって移動するという人も多いのだという。そして、そこからお礼に家庭栽培で採れた野菜をあげたり、お茶菓子を用意してお茶をしたり、車で送ってくれたお礼を行うのだと言っていた。助け合いの精神が根付いている、ということらしい。

そして、助け合いの精神について、お葬式を例にして、話してくれた。村ではまず、誰かが亡くなると、親族のうちの男性が葬儀に関する様々な取り決めをする。女性は、来てくれる参列者たちへのまかないを担い、男女で行うべき仕事に分かれている。

そして、高齢者の認知症に関するパンフレットを、全員に配布してくれた。高齢化率の高さが顕著になっている中、村も総力を上げてそれらの対策に臨んでいるという。そのパンフレットには、認知症を発症した場合の高齢者の見守り方が書いてあった。しかし昭和村では、高齢者の徘徊は大きな問題にはなっていないようである。

いただいたパンフレットには、認知症であっても地域で暮らし続けるためには何をすべきかが書かれていた。その中には、認知症患者が買い物に行って家に帰る道が分からなくなった事態を例としているものがあった。その際、昭和村では「ちょうどあなたの家にお茶飲みに行こうと思っていた」という声かけがあり、そのまま一緒に帰宅できたといったことが書かれている。あくまでの例としてだが、昭和村では決して珍しいことではないという。また、物忘れが多くなった高齢者に対し、その方の子どもと連絡をとって見守るというケースも紹介されていた。そして、その高齢者は1日の生活スケジュールにおいて同じ地区の高齢夫婦のもとへ行くと書かれている。その夫



婦は歩行が不自由であり、あまり外出ができないという。普段地域の人々に支えられている高齢者も、他の住民を支えるといったことが村内にはあるようだ。

パンフレットにある通り、周りが見守るということは、認知用を発症した高齢者にとっては非常に重要である。しかしその見守りは、村内において当たり前のこととして行われている。そのため昭和村では、日本各地で話題になっているような孤独死なども、ほとんどないという。もし、仮に孤独死や事故が発生しても、1日程度で見つかるという。その例として、山菜を採りに山へ行った男性が1日見つからないということがあったが、次の日には、山周辺の道路を通行していた男性が、山のわずかな異変を感じ取り、迷い込んだ男性を発見したのだとか。

次に、お茶飲み文化について話してくれた。昭和村では、ごく頻繁にお茶飲みが発生するという。お茶飲みとは、読んで字のごとく近所の住民や客人などと、お茶を飲みかわし会話するというものであるようだ。元々は畑仕事や、普請と呼ばれる地域の共同作業の後に良く行われるものだったらしい。お茶飲みをするきっかけは何でも良いという。例えば、自分の畑で採れた野菜がおいしくできたから、としてお裾分けに来たとき。その場合、その野菜を調理してお茶請けにすることがあるという。しかし、村の若い住民たちの間では無くなってきた文化だとも言っていた。このお茶飲みも、認知症のところでも話してくれたような、見守り合いの役割を担っているのだとか。

いま村の高齢者の間で問題になっているのは、介護に関する問題だという。これは、高齢者の子どもが、親を心配して自分たちのもとへ呼ぶという動きらしい。他にも、介護施設への入所などが、本人の望まない形で話が進むという。その多くの場合で、子どもが心配するから、という理由での入所やサービスの利用が多いと話してくれた。

### 野尻地区で暮らす一人暮らしの高齢女性から伺ったお話

私たちはフィールドワークの日程の中に野尻地区のどなたかのお宅に行くことになっていたが、直前まで行くかどうかが決まっていなかった。そこで、村内でも有名な一人暮らしで一軒家に住んでいる高齢女性、Sさんのお宅へお邪魔させていただくことになった。村の方が車で先導してくださり、私たちは早足でその後をついて行った。私たちが泊まったコミュニティセンターからすぐ近くの商店の前で車は止まり、中へ入るように促された。店内には生活雑貨や菓子などが陳列されており、その奥に部屋があった。中へお邪魔すると、Sさんがこたつに座りっていた。私たちがぞろぞろと中へ入っていくと、座布団を用意してくださり、みかんやお茶を出していただいて客人としてもてなしていただいた。

どうやら私たちがお邪魔した日は、年に一度、一人暮らしの高齢者が集って温泉に行く日だったらしい。「急だったから何の用意もできてなくて」とおっしゃっていた。しかし、こんなにタイミングの悪い状況でも決して嫌な顔一つせず、お話してくれた。

案内してくれた男性も一緒に家へ上がった。Sさんが私たちに飲み物などを用意してくださっている間、男性は彼女がどんな人生を送ってきたかの略歴を話してくれた。

彼によると、Sさんの実家は材木屋を営んでおり、住み込みの職人さんが20人ほど居たらしい。母の手伝いや彼らへのもてなしから、料理好きになったと言っていた。とても料理が上手で、色々なレシピを読んで挑戦しているという。

Sさんは昭和村出身の80代で、兄、姉、そして妹がいるという。兄と姉はすぐに結婚し、彼女はそのころ洋裁を習うために若松に行っていたらしい。妹は教師になり、両親をサポートできる人が居ないと感じて昭和村に戻る。その後、同じく昭和村出身の男性と結婚し、商店を二人で営みはじめたと語ってくれた。商店は夫が、プロパンガスはSさんが担当して販売していたようだ。

子どもは息子が二人いるそうで、長男は東京の出版社に勤務し、次男は千葉県で警察に勤めている。二人とも高

校進学と同時に昭和村を離れ、会津若松へ行ったらしい。現在でも頻繁に子どもと連絡を取り合っているようで、頻度としては2日に1回程度だという。

その後夫が他界し、一人暮らしとなったが、寂しくはないと言っていた。その理由は、毎日入れ替わり立ち替わりで人が来るから、ということらしい。S子さんは「午前の部」「午後の部」と呼んでいたが、どうやら朝の8時半ごろにやってくる人と、昼ごろにやってくる人の2パターンがあるようだ。彼女は「ボケてられない」と笑っていた。

長い間、昭和村で暮らす彼女に、「若い人が来ることをどう思うか」と学生のうちの一人が聞いた。彼女は「勉強になる」といい、村に若い人が居ることで活気がつく、と村の男性とうなずきっていた。そしてこのあたりで男性が諸用で帰られた。

彼女は、自宅に客人を泊めることも少なくないという。鮎釣りが盛んだったとき、最も多くて15人を泊めたと言っていた。そして、一度来た人のことは忘れないとも言っていた。その場限りの関係ではなく、何年も間を空けて訪れても、覚えているらしい。

その少し後に、おすそ分けの話がどういう流れからか出た。おすそ分けは、村内でのコミュニケーションツールとして残っているという。もらったものだけで生活していけるほど、一人一人が多くの野菜や料理、お菓子をおすそ分けし合うのだとか。

そんな昭和村の好きなところは？と聞くと、「みんなが優しいところ」と答えてくれた。実は、彼女はこれまでの話のほぼ全てで「親のおかげで～」と言っていた。親から受け継いだ優しい気持ちや思いやり、もてなしの精神を、優しい村の人たち、自分の元を訪れてくれる人たちに返していきたいと言っていた。元気なうちはずっとそうする、と語ってくれた。

お酒は飲まないのに、客人に出すために果実酒を作ったり、我々がお邪魔した段階でどんどんと料理を出してくれたり、人への気遣いに満ちた優しい方だった。また、口下手だから、と言って恥ずかしがりながらも、全ての質問に答えてくれた。まっすぐで、優しい、村の人々から彼女が愛されている理由を、あの短時間でも非常に強く感じる事ができた。帰りは我々に来てくれてありがとう、また来てね、といった旨の言葉をかけてくださり、お互いに少し涙ぐみながら彼女のお宅を後にした。

### 野尻地区の維持管理に携わる組織の方々から伺った話

私たちはフィールドワークの2日目の午後、3日目の午後、雪囲いの前後、野尻の維持・管理にあたっている自治体的な活動を行う組織に話を聞いた。

**組織について**以前は村の仕事は村民全員でやっていたようだが、人が減って村の仕事がまかないきれなくなったという。その状況を少しでも打破すべく、二つの事業によって得られたお金で団体を作った。普請に参加すると報酬の支払いが発生するところを、この団体を通してその額を増やすなどの取り組みを行っているようである。ここでは、つながり合いを制度化し、大変だが野尻なりにやってきたとおっしゃっていた。私達が行った野尻地区全体の住民がその団体に入っているが、総会は代表を出してやっているという。

彼らが行う村の維持活動として、共有地の整備などをやる「普請」というものが昭和村にはあるという。その内容は季節で変わり、例えば冬だと雪下ろし・雪囲いなどが主な活動となるようである。この「普請」は役場や業者を呼ぶところもあるが、野尻地区では自分たちでやっているという。それは、自分たちの村は自分たちで守るという意識があるからだという。また、「あて普請」というものもあり、普請に出た人と出ていない人との不平等を無くすものらしい。「あて普請」に出ない場合は、お金を払わなければいけないそうである。しかし、村の仕事の形態が変わり、仕事が休みづらくなったことから、参加できる人は多くないという。なかでも村の若者はその影響が顕著

で、現在の生活様式では昔からやってきたことを維持できないという状況になっているらしい。しかしこの団体を通して普請を行えば、普請に参加した人への参加費は、通常よりも多めに支払われる。これは、この団体の事業費として申請できるからであるという。

次に、団体での活動について、話して下さった。団体では「ビオトープ作り」をしているという。「ビオトープ」とはドイツ語で生き物の住み家という意味であり、自然の再生を主軸に、子どもたちの自然学習も兼ねているようだ。昔は今よりも生き物を見ることができたが、有機水銀の農薬や殺虫剤を使っていたために田んぼ等から生き物がいなくなってしまうらしい。そのため、もう一度生き物を呼び戻そうという活動を耕作放棄地で行っているという。このような活動もあり、現在、野尻地区に耕作放棄地はないという。以前、耕作放棄地だった場所では、葉タバコ、ケチャップ用トマト、コンニャク、自給自足用の作物の栽培を行っていたようである。今では草刈りは感謝されるが、以前はヤギや羊などの家畜がいたため、共有地の草刈りは禁止されていて、入札制になっていたという。耕作放棄地の所持者は、団体に自分の放棄地をビオトープとして使ってください、と言える環境だという。しかし畑で何かを作るとしても難しいとおっしゃっていた。過去に菜種でドレッシングを作ってみたこともあったが、消費期限などから、扱いが難しかったらしい。何を作るにしても、他の地域との差別化を図るため、独自性が大事だという。

村での食生活についてだが、畑が多くあるうえ、コンビニも毎週木曜日に移動販売をしているために村で食べ物に困ることは無いという。また、農協でも配食サービスをやっているそうだが、ある程度の人口密度がないと商売は成り立たないとおっしゃっていた。

商売という面では、苧麻倶楽部では1泊1000円でワークショップを行っていて、この団体の男性のお宅に滞在した方のお話が出た。別れ惜しさのあまり8日間も泊まっていたと言い、帰るときにはお互いに涙して別れたという。

村には現在、書類上住民は約1300人登録されている。しかし実際は1100人くらいなのだという。これは、地方税が安価なため、居住地を移してもなお、住民票を残していく人がいるからだそうだ。

また村の子どもの数が少なく、家々の間隔も離れているため、夏休みのラジオ体操は防災無線を使って流しているらしい。公園には大きな遊具はなく、娯楽施設もないため、その点では不便を感じるが、生活に支障はないという。

娯楽施設ではないが、村には現在2つの体育館があるらしい。もともとは小学校に隣接されたもので、小学校が閉校になった今でも体育館は残している。そしてそのうちの1つは野尻地区にあり、その整備を我々が手伝わせていただいた際、体育館についてもお話を伺った。野尻地区にある体育館は、昭和37年に建てられたという。先代の村長の時に体育館の床がぬけてしまい、解体するという案が出ていたようだ。しかし、ある男性のアイデアで床をはがし、土を入れて屋根付きのグラウンド状態に作り替えたという。おかげで、解体費はかからず、天候が悪くても室内で屋外競技を行ったり、バーベキューをすることができるようになったと話していた。この体育館では、我々が雪囲いを体験させていただいた後、ご厚意でゲートボールをさせていただいた。

団体のある男性に、村の好きなところは？と聞くと、災害に強いところ、と答えてくれた。その方によると、昭和村は災害に強いらしい。村の地盤がしっかりしているため、地震などの災害に強いそうだ。東日本大震災の際にも、揺れは小さく、テレビを見て事態の深刻さを知ったほどだそうだ。同じ福島県にありながら、安心につながっているようだ。しかし、川が近くにあるので要注意、とのこと。川の周りの問題としては、井戸が掘れないことが挙げられるが、稲作などに影響があるわけではないらしい。さらに、冬の雪は川に捨てることのできるで大変便利であるとおっしゃっていた。川は新潟まで流れていて、野尻は川の上流であるため、下流のことも考えて水を使わなければならないらしい。



災害には強いが、全く起きないというわけではないので、不足の事態に備えて消防団があるという。消防団では、村の男性の多くが入団するようになっている。消防団の目的は、自分の集落を守ることだと話していた。ある男性は数年前、避難勧告が出た際、消防団の仕事があったために、自分の母を他の村民に託して出動したことがあると言っていた。その男性は、宴会の席においても、何かあったらすぐに対応できるようにと、お酒を一滴も飲むことはなかった。

このように、何か困ったことがあったときに助け合うことが村では最も重要なことだという。お互いに助け合えるような関係作りは、誘いを断らないことが大切だそうだ。これが、中身の濃い近所付き合いに繋がっていくという。断ることが多いと村民との関係が希薄になり、互助が困難になるようだ。助け合いで主だった例として挙げられていたのは、誰かが村外へ行く用事があったとき、車に乗せて一緒に移動する、というのが挙げられていた。病院で相手を降ろした後、自分の用事を済ませ、終わったところに病院へ戻り、そのまま村に帰る。そしてその後、相手の家でお茶飲みを始める、というのがよく行われているようだ。このように助け合って生活しているため、年金暮らしでも困ることが少ないという。また、人間関係の築き方は普請にでる、というのもあるとおっしゃっていた。例えば、我々がお手伝いした雪囲いもその一つであり、これは、例年11月23日に行っているという。年長者が雪囲いを行う姿を、若い村人が見て学習するということもあるようだ。人間関係という話から、住民同士の仲の良さについての話題になった。野尻の住民同士の仲はとにかく良いという。野尻では「土地は未来の人々から預かっているものであり、子ども達のために守るべき」という考えを大切にしているとおっしゃっていた。彼らは次世代のことを考えているため、若い人の意見をすぐ否定して取り下げることはないという。むしろ積極的に取り入れ、運営に活かしていきたいと語ってくれた。

次に組織の会長さんは村づくりについて話してくれた。何かに取り組む際は、自分が先頭に立ち、まず声をあげることが大事だとおっしゃっていた。何よりも村の役に立ちたいという気持ちが大切だという。また、野尻は昭和村の中で若い人が最も多いとのことである。そのため、野尻が一番活気に溢れているのだという。村の運営について組織の方々には、村の議員などを退職した人たちが行政職をすすんで行うことが望ましいとおっしゃっていた。議員を経験したことで行政の仕組みを理解しているのだから、退職後も活動を継続させるべきと考えているという。これらを踏まえて課題となるのが、野尻をどう存続させていけるかだという。田舎を守るのは大変だが、非常に大切なことであるとおっしゃっていた。区長は、今の昭和村のやり方を残し過ぎると生活の質が落ち込んでしまうのではないかと危惧している。そして若い人をこれから増加させていくにあたって、変えていくべきところもあるとおっしゃっていた。

村の方々がいま不満に感じていることは、原発の風評被害であるという。原発事故後、距離としては東京の方が原発には近いものの、福島であるだけで危険に思われているということだ。その実、作物などは綿密に検査され、むしろ非常に厳重な安全管理が行われているという。その認知の低さも不満であるとおっしゃっていた。また、若い人がもっと気軽に宿泊できるような施設があると良いという。今回我々が宿泊した施設をより良いものに改造したり、村内に数多くある温泉施設の入浴価格に学割などの値引きをつけたいと考えているらしい。

### 3-2 子どもたちの暮らし

川村亜季

この節では昭和村に住む子どもたちの暮らしの様子について述べていく。子どもたちの暮らしといっても、昭和村で調査を行ったのが平日の主に日中ということもあり、村の中で子どもたちを見かけることはほぼなかった。そ

の中でも、とある親子と交流する機会があり、その親子とのやり取りで得た情報を紹介する。

## 調査状況説明

フィールドワーク 3 日目の夜に、私たちが滞在していた野尻集落の方々に声をかけて、交流会が開催された。そこに、とあるご家族(お母さん・小学校 3 年生の娘さん)が来てくれてお話をお聞きした。その内容は、娘さんの日々の過ごし方を中心に村の子どもたちの様子をお母さんからお聞きしたものとなった。このご家族は、お母さんは村内にフルタイムで勤めており、お父さんは村外に勤めに出ているという共働き世帯であるため、娘さんは小学校が終わった後の時間を学童保育で過ごしているのだという。

## 娘さんを含む村の子どもたちの日常生活の様子

お話をお聞きした中で分かった娘さんの 1 日の生活の流れは、朝自宅からスクールバスで学校へ行く。授業が終わったらスクールバスで学童保育へ移動する。お母さんが車で学童保育に迎えに行き自宅に帰る。こうした毎日を日々過ごしているということだった。村内は車で移動することがほとんどなので、娘さんが村の方々と関われる機会は、お話をお聞きした私たちが思っているよりも少ないのだよということをお話してくださった。それは他の子どもたちにも言えることで、スクールバスは便利ではあるが、利用することによって村の方々とかかわる機会が失われてしまうとのことである。

また、お母さん曰く昭和村の子どもたちは自転車に乗れる子が少ないのだそう。娘さんの 1 番ご近所に住むお友達の家はどのくらい離れているのですか? と質問した際、話題になったのだが子どもたちが自転車でどこかに出かけるというシチュエーションは村ではないのだそう。娘さんのお友達の家へも自転車に乗れたとして 30 分ほどかかるとおっしゃっていたので、日常的に子どもたちが村で自転車に乗ることはないようだ。

## 子どもたちの遊び

この娘さんが通っている昭和村の学童保育には 20 名ほどの子どもたちが登録しており、常時 15 人ほどの子どもたちが利用しているとのこと。娘さんが学童保育でおにごっこ・なわとび・段ボール遊びをするのだと教えてくれた。娘さんのお話を日頃から聞いているお母さん曰く、あまり遊びの種類がなく同じような遊びにローテーションでハマっているらしい。ちなみにお話を聞いた日は、なわとびをして遊んでいたと娘さんが教えてくれた。

昭和村では遊びの種類だけではなく、遊べる場所がそもそも少ないのだそう。現在昭和村の小学校には 30 名ほどの児童がいるが、住まいが村内の各集落に散ってあるため、子どもたち同士が自由に集まって遊ぶことはできない。遊具が置いてあるような公園があるわけでもなく、子どもたちが集まれる遊びの場は学校か学童保育しかないというのが村の現状であるという。村外から来た私たちからすると、村にはたくさんの自然がありその中で自由に遊ばせられるのではないかと思うものの、子どもを外で 1 人で遊ばせられないと考えるのは都会の人だけでなく昭和村に住む方も一緒に、せつかくの自然に子どもたちが触れることも少ないのだそう。

そのような生活を送る中で、子どもたちは家にこもってスマートフォンで動画を見たりゲームをして過ごす時間も多いのだという。

## 子育てで不安に思うこと

お母さんに村での子育てで不安に思っていることをお聞きしたところ、高校進学時に子どもたちが村を出ていなくてはならないことを挙げてくださった。昭和村には小学校・中学校はあるものの、高校がないため、多くの子どもたちは高校進学のタイミングで家を出ることになる。進学先は昭和村よりは都会であり、村ではみんなが顔見

知りだったのに知らない人ばかりに囲まれる生活環境になる。小学校の時の全校生徒の人数が高校に行くと1クラス分の人数となり、その人の多さにも驚くこともある。自転車や信号がある環境など村との環境の違いに戸惑い、学校に行けなくなる子もいるのだそう。

お話を聞きした娘さんは人見知りな性格だそうで、将来村から出ていくことが話題にのぼると「まだわからないけどね」とおっしゃりながら、村から娘さんを送り出すことに不安な気持ちがあることをお話ししてくださった。

### 3-3 若者と移住

高見知紗

#### 孫ターンに関する事例

##### Gさん

Gさんは苧麻倶楽部のスタッフで、私たちが村に行った際、送り迎えや、様々なお手伝いをしていただいた。私たちが村に来た日、村のバレーボール大会があり、Gさんのチームが優勝したという話をしてくださった。泊まる予定のコミュニティーセンターで打ち上げをしていたということで、焼き肉臭くなかった？と気さくに話しかけてくださった。コミュニティーセンターで人が集まる際、お茶を入れるために動いたり、飲み物がなくなるとすぐ取りに行ったり等、常に周りを見て気配りを欠かしていなかった。村内にある学童保育に遊びに行っても、子どもたちの人気者だという。

2日目の夜の交流会で村民の方々がご飯を食べたり、お酒を飲んだりしている中、Gさんにお話を聞いた。

この村では、村の住人の孫が、村に入ってくることを村内では孫ターンと呼んでいる。この孫ターンはGさんも含めて4ケースあるのだそう。Gさんは、幼い頃、昭和村出身の母の実家に夏休みなどの長期休暇に遊びに来ていた。18歳のころから昭和村がいいなあと思っていたのだという。ある日、このままだと昭和村がなくなってしまうのではという話を耳にし、自分になにかできることはないかと考えているときに、地域おこし協力隊のことを知り、詳細をまったく見ずに早速応募したそう。そして、昨年4月に地域おこし協力隊として村に入ってきた。ここで初めて、苧麻倶楽部に配属されることを知ったという。

孫ターンで村に入ってきたとはいえ、村で生活をするうえでどうしたら受け入れられるのかGさんは考えたそう。そのため普請には積極的に出たという。そうしているうちに村の人々に消防団に入ることを勧められ、入団した。消防団の規律がいかに厳しいかを少し笑いながら話してくださった。村の好きなところはどこか人がいいところで、それは実際に村に来て触れ合わなければわからないという。そのため、村に人が来てもらうにはどうすべきかが課題であると語ってくれた。また、もう一つ課題として、村の中に仕事が少ないことが挙げていた。選ばなければあることはあるのだが、パートタイム制の仕事があればよいのではないかと考えていると話していただいた。

##### Hさん

もう一つ、村内の孫ターンのHさんのケースを紹介する。

私たちが寝泊まりしていたコミュニティーセンターの近くの民家に、事業をしている人たちがいた。その中の一人であるリーダーのHさんはおじいさんが村でお医者さんをしていた人で、孫ターンで村に入ってきた。

2日目の交流会でHさんにお話を聞くことができた。Hさんは、大学生のころから村へ何かしたいという希望を持っていたという。とにかく自分でスキルを身につけなければと考え、ベンチャー企業に就職したとおっしゃっ

ていた。その会社でたくさんのことを学び、本当に自分がやりたいこと、村に対してしたいことを見つけ、退職したと語ってくれた。もともと、仕事上の付き合いをしていた企業がHさんを気に入り、退職してからも付き合いを継続してくれているようで、今の仕事でも関わりがあるそうだ。今の会社を立ち上げる際、大学の友人に声をかけ、3人で会社を立ち上げたという。この友人二人はIターンである。この会社でやりたいことや展望を話して下さった。

この会社でやりたいことは、村のシステムを発信・残していくこと。三人は村のことが好きで、この村には変わらないでほしいと考えているようだ。現代の生き方と昔の生き方・知恵を合わせることで面白さが生まれるのではないかと考えており、村の様子を動画サイトに投稿して、外部にも村の様子を発信している。また、若者を応援する活動をしていきたいと考えているという。自分自身も村でやりたいこと、夢があり入ってきた経験を活かしたいと言っていた。村に来る若者は夢や目標をもって入ってくる。その夢を温めるところにしてほしい、働く時間よりも自分の時間を大切にできる空間があってほしいという。それを形にするために、実際に事業としては、シェアハウスやグランピングを提案し、村に遊びに来やすい環境づくりを行っているそうだ。ただし、村での生活は楽なものではないので、移住したい目的をしっかりと決めないと村での生活は難しいかもしれないとも言っていた。

## I ターンに関する事例

### 織姫さん

私たちは、昭和村にきて2日目、からむし織の里に訪れ、からむし織の体験をさせていただいた。そこには、織り方を指導して下さった方と、隣の部屋でからむしを紡いでいた方の、2人の元織姫さんがおり、2人からお話を聞くことができた。

私たち全員がからむし織の体験を終え、何名かの学生が、私たちに指導して下さった方にお話を伺った。

この方は、関東地方から織姫体験で昭和村に来た方である。同期の織姫は4人おり、その全員が村に残ったそうだ。現在、昭和村に住んで8年目で、村の人と結婚をして生活をしている。テレビ番組で村が紹介されているのを見て、テレビに映っている織姫さんたちに惹かれ、昭和村に来たそうだ。

村の人や、先輩織姫さんなどの年上の人たちの生きざまがかっこよいたと言っていた。そして、この方は食べ物に胃袋をつかまれたそうだ。村の人たちが野菜などをお裾分けしてくれるため、移住者などは食べ物に困らないというのも昭和村の魅力であるとおっしゃっていた。

昭和村に残った理由は、1年ではからむしのことを知り切れない、住み心地も良いし、もう1年ここにしようという思いが、結婚するまでずっと続いたという。

村には、選ばなければ仕事はあるが、からむしの仕事だけでは食べていくことは難しいという。この方も現在の職場に来る前は、カスミソウのアルバイトなどをしていたそうだ。織姫さんは、からむしのことを大好きになるが、仕事のことや将来のことを考えて昭和村を出て行ってしまう人もいるそうだ。村から出て行っても、からむしに関わっている先輩織姫さんもいるようである。

村で生活をするにあたり、独身の女性が一人で暮らせるような家が少ないため、移住した初めのころは家探しが大変で、もっと借りやすい家があるといいとおっしゃっていた。また、村には移動手段がバスしかなく、しかも1日3本ずつしかないため、車があったほうが良いという。日々の生活は、個人商店や電気屋などもあり、食材なども曜日ごとに移動販売が来るため村でまかなうことができるそうだ。インターネットでもほしいものが手に入るため、現在困ってはいないという。

もう一人の織姫さんについてのケースを紹介する。私たちは、からむし織の体験を終え、隣の部屋に移動をした。

するとそこには、<sup>草</sup>うみの作業を行っていた元織姫さんがいた。草うみの作業とは、からむしを一つの繊維にする作業とのことである。私たちは、この方にもお話をお伺いすることができた。

この方は、2年前関東地方から織姫の体験生で昭和村にきたそうだ。この方は布が好きで、原料にも興味があり、テキスタイルの勉強をしていたそうだ。からむしについては自分で調べて織姫の制度を知ったという。

からむしは1日に5グラム程度しかつむぐことができない。からむしはすべての作業が人の手であるためその力強さが好きだそうだ。からむしひとつひとつに個性がありそれらがからむしの魅力であるそうだ。また、からむしに関わっている人たちには向上心があり、その気持ちに惹かれたという。

今後、年齢層が高くなり、畑を守る人がいなくなるかもしれないため、すべてを守りたいと考えており、からむしの畑もやってみたいと思っているそうだ。

## Uさん

彼女とは3日目の交流会の時にお話しをした。私と松田さん、由良さん、Uさんでほろ酔いになりながらお話をした。話し方からも明るい人柄が感じられた。

彼女は現在、カスミソウ栽培の仕事をしていて、冬はスキーの教習をしている。村に住み始めてまだ1か月半ほどであり、懇親会の時に副村長さんから「あなたは何年生なんですか？」ときかれて「いや、ここに住んでいます！」と答えていたことが印象に残っている。住んでいる場所はコミュニティーセンターの向かいにある家で、同じくカスミソウ栽培をしている男性と同居している。村にきたきっかけを聞いたところ、自分を変えたくて来たと言っていた。この村では人の目があるから自分をしっかりと見つめなおし、生活スタイルの改善をすることができるからと教えてくれた。高校を辞め、通信の高校へ通いながらアルバイトをし、収入は今よりも多くあったが、そうした生活に不安を感じていた。たまたま長期の休暇が取れた際に、現在一緒に住んでいる男性に誘われて昭和村に遊びに来た事が昭和村関わるきっかけになった。村に来た当初は、寮に住み込みでカスミソウ栽培の仕事をしていたという。そこでは地元の人たちから野菜などのおすそ分けをもらい仲良しになったという。近所の家に挨拶をしに行くと「大変だったね」とそこでも野菜のおすそ分けをしてもらい、村の人たちとの関係に不安を持っていたが安心したと言っていた。しかし、まだ村の中ではお客様扱いなところがあるように感じているようで今後しっかり村になじんでいけるかの不安はあるようだ。

関東出身のUさんは、今でも月に一回は地元に戻っているそうだ。村での暮らしに大きな不便はないが流行りがわからなくなる。毎回地元に戻るたびに驚くそうだ。若松に遊びに行ったときでさえ飲食チェーン店の新作メニューを知り、驚くという。また、地元にいる時に普通にあったコンビニエンスストアがないことが少しだけ不便だと言っていた。今はネットが発達しているから買い物には困らないようだが、村の中で金遣いが荒いと思われたいとのことで実家のほうに届くようにしているそうだ。そのことに周りの目を考えての生活を常に意識していることが伝わった。

### 3-4 JA 会津よつばのとりのくみ：雪室

佐藤楓

昭和村にきて二日目の午前、私たちはカスミソウを出荷している予冷室や雪室を見学させていただいた。その際に、農協に勤めている方に話をお聞きした。この施設は平成17年に建設され、現在は仙台から、沖縄まで27市場に出荷している。この施設はよつばかすみ草部会が管理しており、今はカスミソウの生産者67人が使用している

という。この施設の建設費は村の生産者が出し合った。昭和村のカスミソウは品質が良く、花卉が大きい。またカスミソウにも種類があり、昭和村で栽培している種類も他と比べて多い。そんな昭和村のカスミソウはブランドものとして扱われており、値段は1本300円から、高いときは700円ほどにもなる。収穫したカスミソウは予冷室に保管する。予冷室というのは収穫したカスミソウを保管する場所だ。中はカスミソウの保管に適した、温度8度、湿度75%に保たれている。予冷室の温度と湿度は、後述する雪室から送られている冷気によって保たれている。その際、予冷室へ送られてくる冷気がカスミソウに直接当たってしまうと、しおれるのが早くなってしまう。そのため、チューブ状にした布を冷気の出口にかぶせる。そうすることで布から染み出した冷気が少しずつカスミソウを冷やし、長持ちにつながる。そんな予冷室のうち、1号室は開花のための温度調整機能を持ち、電気をつけると28度程に温度が上がる。ピーク時は4つある予冷室が全部埋まるほど、カスミソウが収穫・出荷されるのだそうだ。出荷される日は基本的に月曜日・水曜日・金曜日である。出荷するときは100本で1ケースにして管理しており、予冷室が全部埋まれば大体2000ケースになる。それをトラックに乗せれば10台分にもなる。

村では標高差を利用して栽培している。そうすることで開花の時期が少しずつずれ、出荷時期が長くなる。それでも収穫量が少ない時期は70本を1ケースにして出荷しているのだ。ちなみに、カスミソウを入れるケースは繰り返し利用しており、壊れても溶かして作り直すのだ。この施設で扱われているのは95%がカスミソウである。残りの5%はマリーゴールドなどを扱っている。また、昭和村の生産者の中には昭和村内だけでなく、柳津、矢の原、美里、三島に行き来して生産している方もいる。

収穫したカスミソウはそのまま花として出荷するものもあれば、加工するものもある。その一つが「染めカスミ」という、花卉を着色したカスミソウだ。染めカスミをつくる時は温度をあげた1号室に一度カスミソウを入れる。時間を置き、花がしなびてきたら染粉をいれた水を吸わせることで花卉を着色させる。その際、湿度に注意して作業する必要があるようで、湿度が高いとあまり染まらない。染めカスミの代表的な色はピンク、ラベンダー、青で、それ以外にも染められる色は30色ほどある。また、染めカスミの中には一色ではなく、一本をいくつかの色に染めた染めカスミを作ることもできる。作る時は一つ目の染粉を入れた水を吸わせ、染まりきる前に別の色の染粉を入れた水につける。そうすることで複数の色に染まった染めカスミを作ることができる。その際は、生産者側も着色を完全に予測することはできないのだそうだ。

その後、施設の奥にある雪室を見学させていただいた。雪室というのは雪を保管しておく部屋で、雪の冷気でカスミソウを冷やす役割を持っている。雪は2月ごろに集め、1年間かけて使用していく。雪室に保管する雪の量は大型ダンプ300台分にもなるが、雪を集め、雪室に移す作業も自分達で行っている。雪室の壁には30cmくらいの断熱材を入れているだけで、温度調節はしていない。だが、それでも雪室の中の温度は2度、湿度は25%ほどに保たれている。この雪室から、予冷室と雪室の間に設けた空間に空気を送る。そこで雪室の冷気と外気を混ぜて、温度と湿度をカスミソウの保存に適した状態に調整する。この後に、先述した予冷室に冷気を流している。この雪室の構造は、北海道にある建物を参考にして作ったという。

昭和村のカスミソウ生産者は少しずつ新規就農募集で若い生産者が増えている。しかし、担い手の中心は60代以上の地元出身の方々である。後継者を育てる必要はあるが、まだまだ元気で働けるとのこと。村一番の生産者の方はカスミソウの栽培、収穫、出荷がなくなってしまう冬場はスキー教室をひらいているのだそうだ。3-3に取り上げるUさんはその人のもとで働いている。Uさんのような新規でやってきた人が栽培できるカスミソウは大体4000本程度で、それに対し、村一番の人は1年間に5万5千本生産している。この差で、どれだけすごいかが分かる。

## 4 考察

### 4-1 村に住み続けるということ

新井緋香利

昭和村では高齢化が進むものの、いくつか若者を受け入れる事業が存在する。その中で本稿では、移住してきた人は全員村に残るのではないかというリサーチクエスチョンを設定し、移住してきた人が村に住み続けるということはどういうことかを考察する。

#### 1. 移住するということ

ここでは「からむし織体験生・織姫彗星制度」を挙げる。改めて制度の内容をまとめると、昭和村の特産物であるからむしの織り手を募り、約1年を通してからむし織体験をしてもらうというものである。活動時間は原則としては平日に設定されており、体験にはお金はかからない。ただ、体験する際に住民票を昭和村に移さなければいけない。また、宿泊施設の生活費は自分持ちである。このからむし織体験を修了した後、まだからむしに触れたいと継続を希望する人は「からむし織研修生制度」を受けることになる。こちらは最長3年で、村からの手当でも出るという。現在では約30名のからむし織体験修了生が村に残っている。実際に研修を受けていた元織姫の方になぜ村に残ったのか話を聞くと、1年ではからむしのことを知りきれないからだと言っていた。この方は村内の人と結婚し、昭和村に住んで8年になるという。

2-2の新聞記事にみる昭和村にはないのだが、事前調査の段階で織姫に関する記事を見つけた。2011年7月7日の朝日新聞の朝刊、福島県の地方版の新聞に「昭和の「からむし織り」体験生4人今年も/制度16年4分の1村に根付く」という記事である。内容は、村に織姫体験制度ができて16年(当時)が経過し、織姫として入ってきた人を平均して、4人に1人は村に残ることを選んだというものだ。この時点で移住してきた人は全員村に住み続けているのではないかというリサーチクエスチョンが崩れたのだが、なぜ村に入ってきた織姫さんたち全員が村に住み続けることを選ばないのだろうか。

上記の元織姫さんに話を伺った際に、村には選ばなければ仕事はあるが、からむしの仕事だけでは食べていくことは難しいとおっしゃっていた。この方は現在道の駅で行われている、からむし織体験の先生をしている。この方は以前カスミソウ関係のアルバイトなどをしていたそうだ。また、この方は結婚しているものの、織姫として入ってきた人と同年代の男性が村から出ていることが多い。そのため、結婚の機会も少ないそうだ。からむしに惹かれて村に入ってきて、からむしを仕事にできる人は少なく、仕事や将来のことを考えて村に残らない選択をする人がいるという。個人それぞれに決定権があるために、村単位ではどうすることもできないのが現状である。

#### 2. 村に住むということ

2-1の統計からみる昭和村でも触れているように、昭和村では近年村内の高齢化が進んでおり、村の半数が65歳以上の高齢者である。そんな昭和村で生活する若者の中には、Iターンで入ってくる人もいれば、親が昭和村出身で小さいころに遊びに来ていた人が入ってくる通称孫ターンの人もある。もともと村に住んでいた人にとって、Iターンで入ってきた人よりも孫ターンで入ってきたの方が素性が知れているので安心らしい。若者側は村に認められるために普請に出たり、周りの人たちとお茶のみなどを通してコミュニケーションをとったり、消防団に入ったりしているという。地域おこし協力隊の方から、織姫やカスミソウの新規就農者募集で入ってくる若者は、学びたいという気持ちで入ってきているのでおじいちゃん・おばあちゃんも関わりやすいという話を伺った。カスミソウ新規就農者募集のサイトにも、農業を始める際には地域との話し合いや交流が大切であると記載している。実

習の最後の夜の交流会に来てくださった、Uさんという方は村に住んで間もないカスミソウ新規就農者の一人だった。この方がおっしゃっていたのは、地域に溶け込むのが難しいということだった。住んで間もないとはいえ、まだ「お客様扱い」であると話してくださった。昭和村で起業している方や地域おこし協力隊の方は、村に認められるには消防団に入ることだと村の人に誘われ、消防団に入ったという。村には他人という概念がないというが、逆になじめなければそのコミュニティから浮いてしまうのだ。村の人は新しく村に入ってきた人について、本人から根掘り葉掘り聞く情報を元に1,2年は村で話題に上がるという。新しく入ってきた人がどんな人か、色々な人が話を聞きにくるそうだ。3年目ほどになると自然と話をしなくなるという。3年目になれば村の人たちに自分の情報が広まっているからだそうだ。村内の人たちが自分はこの誰かを知ること、村に溶け込むことにつながるという。

### 3. 村に住み続けるということ

インタビューしたおばあちゃんに、若い人が入ってくる現状をどう思うか聞いてみると「新しい事が増えて勉強になる」と話してくれた。このおばあちゃんは生まれたころから昭和村生まれで、昭和村出身者と結婚をしてそのまま村に住み続けている。子どもたちは村から出て、仕事をしている。決して関係が疎遠であるわけではなく、一定の間隔で電話をしたり、子どもたちが遊びに来るようだ。子どもが自分の親を呼び寄せ、二世帯で暮らすことを呼び寄せ同居という。昭和村の中でも呼び寄せ同居のために、高齢で村を離れて子どもと暮らす人がちらほらいるようだ。しかし、このおばあちゃんは自分の家を守り続けている。このおばあちゃんの家で、毎日お茶を飲みにご近所さんが遊びに来るからだ。毎日人が遊びに来るので、そのために畑で野菜を育てておすそ分けしたり、その野菜を料理にしてお茶と一緒に出したりするようだ。みんなが来るのでぼけてらんないと笑顔で話してくれ、みんなが遊びに来る状況を楽しんでいるように見えた。

村には高校が無く、中学校を卒業すると自動的に村外に出なければならぬ。他の若者は、自ら学びたいという気持ちを持って村に入ってくる。元々村に住んでいる人は、若者が入ってきて勉強になると考えている。かつて昭和村人口は転出者が多かったが、近年転入者が増えてきている。この村外から人が入ってくるにもかかわらず「これをやりたいけど仕事がない」等の理由で手放さなければいけないという現状がある。これは村にとっても、入ってくる人にとってもマイナスである。移住してきて住み続けている人は、上記のおばあちゃんのように人と人の直接的な関わりあいだったり、村の根っこになるものが本当に好きで残っているのだろう。仕事や将来を考えて村を出ていく人のために、新しい働き方や制度を考えなければいけないと考えた。しかし、村にとっては織姫・彦星やカスミソウについての仕事を提案したり、管理したりでそこまで手が回らないのが現状であろう。そのため、村外から入ってきた人達で話し合っ、そういった人が生活がもっとしやすくなるような公式のコミュニティや支援があるといいのではないだろうか考える。

実際に昭和村に行ってみて、画面越しには伝わらないような素敵なお人や場所が多いと感じた。地域おこし協力隊の方が、村に来てみないとわからない魅力があるとおっしゃっていた通りだ。話を聞いた元織姫さんは二人とも、偶然からむし織のことを知って応募したという。もちろんそういった運命的な出会いは必要であるが、もっと村のことを外部の人に知ってもらいたいと感じた。村に住み続けるということは、村に入る前と後のギャップを埋めることが大切なかもしれない。

#### 参考文献

『朝日新聞』2011年7月7日朝刊 地方版

「昭和の「からむし織り」体験生4人今年も/制度16年4分の1村に根づく」



『織姫・彦星・文化庁』[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/supporter/pdf/katsudo\\_dento\\_02.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/supporter/pdf/katsudo_dento_02.pdf) (2018/01/06 閲覧)

『からむしの里 福島県昭和村ホームページ』<http://www.vill.showa.fukushima.jp/> (2018/01/06 閲覧)

## 4-2 地域活性化の秘訣

川村亜季・佐藤楓

昭和村にはカスミソウ、からむし織、織姫制度など村の特産物、それを活かす制度がある。そんな魅力ある昭和村に移住してきたIターン、Uターン、孫ターンの人も増えてきている。そんな中、日本には昭和村のような人口減少が課題の村がいくつも存在している。そんな村はどうしたら活性化していけるのか、昭和村の人々の意識や態勢から探っていく。

### 1. 昭和村の人口動態

まず、昭和村はどのくらいの人口の村で、どのような年代が多い村だったか確認していく。以下の段落では本報告書の2-1から昭和村を述べていく。

昭和村の人口総数はどのように変化してきたのか。1980年では2629人だった人口が2015年現在では1980年のほぼ半分の1322人となっている。しかし、その一方で高齢化率は上がり続けている。1980年では昭和村の人口に対する高齢化率は3%だった。しかし、年少人口・生産年齢人口が減少し高齢化率は高くなっていった。2005年には高齢化率が50%を超え、いわゆる限界集落と呼ばれる状況になった。では高齢化率は上昇する一方だが、その実態はどのようなものなのだろうか。人口動態をもう少し詳しく見ていく。出生数は、2000年代からほぼ一桁で、2005年以降は5人前後である。死亡者数は大体毎年30~40人ほどである。転出者数は2005年以降は毎年50人前後転出している。一方、転入者は2005年以降、毎年30人以上、年によっては40人台、2015年には50人を超える人数となった。このようになるのはなぜだろうか。本報告書の3-1の高齢者を支える仕組みと照らし合わせて、人口の増減の理由を見ていく。

昭和村は高齢者が多い。年月が経つとともにどうしても高齢者は亡くなってしまうため、人口は減り気味である。それに対し、出生は多くない。村は高齢者が多い村なので、結婚・出産適齢期の人が少ない。また、結婚相手になるような人も少ないため、出生数は伸び悩んでいるのだ。では、転出はなぜ多いのか。現在、昭和村の高齢者の多くが1人暮らしをしている。そんな高齢者の子どもは進学や就職の際に村外へ行き、そのまま村外で家庭を持って暮らしているのだ。医療機関や公共交通機関の少ない昭和村で暮らす親を心配に思い、親に村を出てきてもらい、一緒に暮らすことを子どもは提案する。村で暮らす高齢者としては知らない街で知らない人が周りにたくさんいる村外に転出するよりも村人同士で仲良く生活でき、助け合いのある村にいたいと思う人が多い。だが、息子・娘が心配するので、という理由で転出してしまうことも最近が増えてきたらしい。

しかし、そんな中でも転入してくる者が毎年いる。3-3の若者と移住の事例で取り上げたUさんやGさん、Hさん、元織姫さんもIターンや孫ターンで転入してきた人たちだった。Uさんはカスミソウの新規就農者として昭和村にやってきて、元織姫さんもからむし織の織姫として昭和村にやってきた。そんな転入者を呼ぶ事業を紹介していく。

## 2. 昭和村での事業

昭和村にはどのような事業があり、それがどのような影響を与えてきたのかを確認していく。まずは織姫制度について説明する。昭和村にはからむしという植物がある。そのからむしを決められた手順によって加工していくことで繊維ができる。このようにからむしの繊維をつくり、織る作業をするのが織姫である。からむしの繊維をつくるのは昭和村の特有の技術であり、これを絶えさせたくない、という思いもあって織姫制度はできた。2-2の新聞記事に見る昭和村からわかるように1994年に始まった織姫制度は今も続いており、2011年時点では88人、現在ではもっと多くの人がこの制度で村にやってきた。そうしてやってきた人の一部は昭和村に定住して今も織姫として活躍している人もいる。

からむしの他にも昭和村ならではの特産物のカスミソウがある。こちらも新規で就農してくれる人を募集し、実際に外部から人が移住してきている。3-3で取り上げたUさんもこの1人である。この新規就農の募集は2003年から始めており、2016年までで13人が研修にやってきて、そのうち9人が就農した。このように、昭和村では昭和村特有の資源を利用して活性化してきた。しかし、他の村が昭和村と同じように何か特有の資源を持ち活用できる状況下にあるとは限らない。ではそういった村はどうすれば地域の活性化につながるのだろうか。

## 3. 昭和村の受け入れ態勢

昭和村では高齢化が増えつつも昭和村ならではの資源をアピールすることで地域の活性化を図ってきた。しかし、こういった事業や特産物はあるが、住民が居心地の良さを感じる、移住をしてくるのはそのような物的資源ではないように思える。住民の居心地の良さにつながるのは、昭和村の人から何度も耳にした移住者を受け入れる意識、助け合いの精神であると考えた。

昭和村の人々に、移住してくる人についてどう思っているか聞いたところ「移住者が来ることは喜ばしい」「移住者が来ることに抵抗はない」など、肯定的な言葉だった。「若者の意見を取り入れたい」「若者が来ると勉強になる」「若者が来ると村が活気づく」ということを話している人も多く、村全体が移住者に対して好印象であった。また、村民同士で自分の家ですとれた野菜をおすそ分けするようで、保健福祉課で話を伺った際、農作物がご近所付き合いのツールになっている、とも話していた。実際に移住してきた織姫の人からも話を聞いた。彼女は村に気にかけてもらえる生活である、お米もおすそ分けしてもらい、村の人に助けられる、とも聞いた。このことから昭和村出身の人だけでなく移住者も同様に村の一員として受け入れられているということがわかる。

また、昭和村には地域課題の問題の解決を図る目的でNPO法人がある。それが、3-1で紹介した苧麻倶楽部である。苧麻倶楽部は人と人、都市と村を結びつける事業を展開している。私たちのこのフィールドワークも苧麻倶楽部の「ムラ・キャンパス」という事業の一環で参加させていただいた。この他にも、昭和村を他者にアピールしたり、訪問者の仲介を行ってくれたりしている。実際に村に入った後は村民の受け入れる意識や行動、村に入るまでの過程は苧麻倶楽部が支えてくれる。そういった村民、団体の支えが外部から人が来ることを可能にしている。また、移住者希望者だけでなく、大学のフィールドワークや、観光など移住希望者以外にも村民の意識や団体の支えがあるため、訪問した人は「また来たい」「心地よい村だ」と思えるのである。

## 4. 活性化に重要なもの

昭和村は都市部から離れており、公共交通機関も少ない。また、村民も村内に散らばって生活しており、高齢化率もとても高い。地理としては不便な場所にあると感じやすいだろう。そのため良い印象を持ちづらいかもしれない

い。しかし、そんな昭和村は独自の物資だけでなく移住してくる人に対する人々の意識が受容的であることで村に移住した人が村の中に溶け込む手伝いができる。また、苧麻倶楽部という団体の活動が村の良さを教えることができる。そういった人々の意識と仲介する団体等の活動が大きく活性化につながっている。

若い人が移住してくる魅力がない、そんな人材はいない、と思う村もあるかも知れない。しかし、昭和村も始めから若い人が自主的に入ってきたのではなく、住んでいる高齢者の人が先頭に立ち活動してきたのだ。一般的には「不便」といわれてしまう村に、たくましく暮らし続けている高齢者の働きが村を活性化していくのである。

#### 参考

福島県昭和村. <http://www.vill.showa.fukushima.jp/kasumiso.stm> (2018年1月25日閲覧)

NPO 法人苧麻倶楽部. <http://www.chomaclub.jp/> (2018年1月25日閲覧)

### 4-3 人口減少社会における子どもたち

高見知紗

私たちは昭和村に4日間お世話になった。私は、昭和村に行く前から子どもたちの暮らしなどにも興味があり、私たちは昭和村滞在中に、ある家族からお話を伺うことができた。調査結果 3-2 を参照しつつ、昭和村の子どもたちの暮らし方や感じたこと考えたことなどを述べていく。

#### 1. 子どもたちの暮らし

昭和村には現在、小学校と中学校が一枚ずつ存在している。最新の平成29年5月のデータでは、昭和村の小学校の児童数は、1年生が7人、2年生が5人、3年生が3人、4年生が6人、5年生が4人、6年生が6人の合計31人となっている。また、昭和村の中学校の生徒数は、1年生が4人、2年生が7人、3年生が4人の合計15人となっている。2015年度の国勢調査の結果15歳未満の人口は85人となっている。

子どもたちは、スクールバスか車で学校や学童保育に行くという事がわかった。村での移動手段は主に車であるため、村の方々と関われる機会が少ないらしく、スクールバスの利用は便利ではあるが、利用することにより、村の方々と関わる機会が失われてしまうとおっしゃっていた。

昭和村の学童保育では、20人ほどの子どもたちが登録をしており、15人ほどの子どもたちが利用している。学童保育では主にものを使わないような遊びが行われている。遊びの種類がとても少ないため、同じような遊びをローテーションで遊んでいるということがわかった。また、昭和村では遊びの種類だけではなく、遊べる場所が少ないという。遊具がある公園はないので、子どもたちが簡単に集まって遊べる場所は、学校か学童保育しかないというのが昭和村の現状であるという。昭和村の子どもたちの家は離れており、子どもたち同士で簡単に自由に集まって遊ぶことができないそうだ。違う集落のお友達だと、何十分もかかってしまい、遊び場所も上で述べた通り、学校か学童保育しかないため、昭和村の子どもたちは自転車に乗る機会が少なく、乗れない子が多いということがわかった。また、子どもの親は、子どもを一人で外で遊ばせられないと考えている。そのため、子どもたちは家の中でスマートフォンのゲームをしたり動画を見たりして過ごすことも少なくないそうだ。このような過ごし方は、都会の子どもたちも村の子どもたちも変わらないと感じた。昭和村は、見守りなど近所の付き合いが他の地域よりも濃く強いため、子どもたちが外で自然に触れながら遊ぶのも、都会よりは安全にできるのではないかと考える。お年寄りの方々が無理のない程度で見守るなどを行えば、子どもたちは様々な遊びができ、さらには近所の方と触れ

合える機会が増えるのではないかと考える。

## 2. 親元を離れる子どもたち

昭和村には、小学校と中学校は存在するが、高校がないため中学校を卒業したら、村外の高校に進学しなければならない。バスで通学できる範囲に高校もあるが、多くの子どもたちが、高校への進学タイミングで家を出て生活をしなければならない。昭和村から進学する高校は、会津若松などの大きな高校である。そのため村出身者は馴染めないこともあるという。村ではみんなが顔見知りだったのが、高校では知らない人に囲まれたり、人数が増えたりなど、生活環境の変化が大きくなる。また、村との環境の違いに戸惑ってしまう子どもも多いという。私の地元も昭和村ほどではないが人口が少ない。私の出身小学校は人数が多い方だったが、中学校で人数が倍になり、高校では8倍近くの人数だった。昭和村の子どもたちも人数の多さに適応することが大変だと考える。また、高校までクラス替えなどは経験したことがなく、クラス替えの時の新しい環境への変化はストレスが多いと考える。そのような環境の変化に適応できず、学校に行けなくなってしまう子もいるのだそうだ。親元を離れていない私自身も大変だったので、昭和村の子どもたちは親元を離れているというのもあり、さらに大変だと感じた。昭和村の子どもたちは、村の人とも関わるのがあまりなく、多くの知らない人と触れ合うことがないのではないかと感じた。そのため、村外の人でも参加できる子どもから大人まで楽しめるようなイベントを開催することで、子どもたちの知らない人への関わり方などが変わってくるのではないかと考える。

## 3. まとめ

人口減少地域における子どもたちと都会の子どもたちでは、差があるように感じていたが、話を聞いてみると外で遊ばなかったり、スマートフォンで遊んだりとあまり遊び方に違いはないと感じた。都会の方では、遊びの種類や、遊ぶ場所も必然と多くなっているが、少ない遊びをローテーションで楽しんでいるという点も、少人数だからできることなのだと感じた。都会ではあまり良いと思われていない、人付き合いや干渉、見守りなどが昭和村では当たり前のように存在している。このように昭和村の人々は住民同士のつながりが強いいため、難しいことではあると思うが、それを活かして子どもたちが自然に触れて遊べる機会を増やしても良いのではないかと考える。せっかく都会にはあまりない自然に囲まれて育っているのに少しもったいないと感じた。子どもたちという視点から見て、昭和村の課題は遊ぶ場所が少ない、家族以外の人と関わる機会が少ないことである。昭和村は農業が盛んなので、子どもたちの農業体験や収穫作業などをイベント化させ、近所の大人と一緒にすることで、大人との関わりが増え、遊び場所の一つにでもなるのではないかと考える。

昭和村は想像以上にイベントが多く、地域のつながりが濃いため、子どもたちも当然大人と同じように、村の方々と密に関わっているのかと思っていた。しかし、そうではないことを知り、いつごろから関わるようになるのかをまとめている中で聞いてみたいと感じた。また、これらをまとめている中で、子どもたちの生活はほぼ都会の子どもたちと変わらないとわかり、教育についてはどうなのかということにも興味が出てきて、機会があればお伺いしてみたいと感じた。

### 参考文献

からむし織の里 福島県昭和村ホームページ <http://www.vill.showa.fukushima.jp/> (最終閲覧日：2018年1月20日)

## 4-4 高齢者を支えるしくみ・文化

太田 早紀・松田みなみ・由良 綾音

私たちは、3泊4日で福島県大沼郡昭和村野尻地区を調査した。現地調査するにあたって、事前に村の現状について調べた。事前の調査を通じて、昭和村は人口減少や転出者の多さなどから、「村において家々がまばらにあり少し寂しい印象を受けるような村である」「家々の感覚が広いことにより、安否確認もしにくいのではないか」という感想を持った。それと同時に、ホームページに掲載されているイベント情報より、思った以上に村でのイベントが多く、人々が集まる機会を大切にしているように感じられた。

実際に昭和村に行ってみると、事前調査を通じて感じていた家々のまばらさはあまり感じられなかった。確かに離れた場所にある家もあったが、生活の中での人々の触れ合いが多く、村での人々の協力体制が充実しているような印象を受けた。村の人たちに話を聞くと、大半の人が「村の良いところは人だ」といっており、私たちも村での生活で「村の良いところは人だ」と言っていた言葉を実感することができた。以下では、昭和村野尻地区で感じた人々の繋がりはどのような仕組み・文化で形成されているのか、村での生活でわかったこと・考えたことをもとに述べていく。

### 1. 高齢者の暮らし

事前調査の統計から高齢者の割合の高さは目立っていたが、昭和村を実際に訪れてみると想像以上に高齢の方が多く感じられた。ここでは村に高齢者が多いことから高齢者の暮らしが日々、どのように行われているのかについて、村で聞いた話をふまえ、事例等を挙げて述べていく。

まず、フィールドワーク3日目に3-1で触れた女性のお宅を訪問したときに聞いた話から取り上げる。女性は突然の訪問であったが、快く私たちを受け入れてくださり、ここでも人の暖かさを直に感じた。女性は多くのことを話してくださったが、ここではその中から4つの事例を挙げていく。1つ目は「お茶飲み」について、2つ目は村での新聞受け取りの仕方について、3つ目は普請について、4つ目は買い物事情についてである。

最初に「お茶飲み」について述べる。女性は一人暮らしであるが寂しさはないと言っていた。それは、毎日家に来て話をする人がいるからだそうだ。村には近所の家で何人か集まってお茶を飲みながら他愛もない話をするという文化がある。その文化が村では「お茶飲み」として認識されているようだ。「お茶飲み」を行うことによって、住民同士のコミュニケーションを取ることができ、周辺住民の変化にも気づくことができる。これは個々人の関係が希薄になりがちな都市部では見られない。「お茶飲み」は人口が少ない地域だからこそ形成され、持続できる文化なのである。

次に、新聞の受け取りの仕方について説明する。この周辺区域では新聞配達を行わず、特定の場所に置かれた新聞を住民が自ら取りに行くといった仕組みが成り立っているようだ。配達ではないことは住民の負担にはならないのかと考えたがそれにも理由があるという。配達では配達員がポストに新聞を入れるだけでコミュニケーションを取る機会がない。一方、特定の場所に新聞を取りに行けば、その場所に住民が集まり、日常生活などの会話がある。

「特定の場所にいつもの人たちが集まり会話をする」この習慣が村で違和感を感じたときに役立つそうだ。過去に、いつも新聞を取りに来る人がこなかったため自宅まで確認しに行くと、その人が倒れていたという事態があったという。「今日はあの人がいらないだね」で済ませるのではなく、普段と違う状況に違和感を持ち、それを確認しに来てくれる。このような関係を新聞受け取りの際に形成できるということが配達にはない利点である。

3つ目は普請についてである。普請とは、村の維持活動として共有地の整備などを行うことをいう。地域によっては、この普請を役場や業者に依頼することも多いそうだが、この村では住民同士が協力し合い作業を行っている

という。住民同士が同時に集まり、会話をしながら住み続けるために共同作業をする。普請に参加することは村の住民たちとの関係づくりの場ともなっている。これが普請に参加する大きな意味だ。普請を役場や業者に委託すると、住民たちは楽をすることができる。しかし、コミュニケーションの場は失われる。住民にとって普請とは、共有地の整備だけが目的ではないことがわかった。関係を継続するために欠かせない行事なのだ。

最後に、村の買い物事情について述べる。村にはコンビニエンスストアはもちろん、スーパーや大き目の商店などはない。物資を調達するには、住民は買い物に行くために隣町まで行かなければならないのである。公共の交通手段は、1日に3本のバスのみだ。そのため、自家用車で片道1時間以上かけて隣町まで行くのだそうだ。ここで車を所有していない人や、免許を所持していない人はどのように買い物をしているのか、という疑問が浮かんだ。尋ねてみると、週に1回移動販売が村に来ているらしい。そのときに足りないものを購入しているのだそうだ。しかし、週1回の移動販売だけでは買い物しきれないことも当然ある。そういう時は、村人同士で助け合うという。車を所持している住民が買い物に行く際、ほかに行きたい人がいれば、一緒に行くのだそうだ。連れて行ってもらった人は、後日自分の家の畑でとれた野菜や、自分が作ったおかずなどをおすそ分けする形でお礼をするという。一見、家の近くにスーパーや商店がない環境は都会では考えられないほど不便だ。しかし、この村ではコミュニケーションの取り方の形として活かされている。

4つの事例からわかるように、都会では不便だと思われるような生活や環境が、昭和村では関係づくりの材料として欠かせない。人口が減少し、少子高齢化が進んだ地域では協力して、見守り合って生活する必要がある。昭和村はそれを実行している地域の1例だ。住民同士が互いに支えあって生活を送っている。村の保健福祉課の方の話にもあったが、不便だからこそ人々の関係が切れず、支えあっていくことができる。私たちが滞在期間中感じることができた人々の支えあいには昭和村の大きな特徴である。

## 2. 高齢者を取り巻く諸問題

フィールドワーク2日目に保健福祉課を訪ね、昭和村での高齢者についての話を聞いた。昭和村では、高齢の方がとても多く、統計を見ると単独で暮らしている方もいた。そのため、話を聞く前は「高齢の方が孤独死することはないのだろうか」「近年問題になっている高齢者の徘徊も多くあるのではないだろうか」と考えていた。実際に話を聞いてみると、お茶飲み・新聞の事例などのように、日頃のコミュニケーションの機会が多くあることで、何か異変があればすぐに村の人が気づくため孤独死はめったに起こらないという。発生しても遺体は死後2日以内に発見されるそうだ。徘徊については、保健福祉課が作成したパンフレットに紹介されている事例を挙げる。昭和村に住む高齢のある夫妻の話だ。夫は元郵便局員で、退職後も村の様々な役職に就いていたが、高齢を理由にすべての役を辞めている。夫は趣味にも興味を示さなくなり寝てばかりいたが、夫を毎日のように訪ねてきて2、3時間茶飲みばなしをしていく友人がいた。ある日、夫が辞めたはずの仕事へ行く、と言い出し認知症であることがわかったが、友人は男性と一緒についていくことにした。また、村の人にも協力してもらい、何か困っていたら手助けもらうようにした。

上記の事例では男性の行動は「徘徊」として扱われていない。それは、男性と村の住人たちの見守る目があったからである。この見守る目は、普段の住民同士の関係が密接であったからできたのだろう。関係が薄ければ、どこを歩いていようと気に留めることもあまりないだろう。この村では、誰かに小さな変化があればすぐに気づき、困っていたら放置するのではなく手助けする関係が確立されている。

都会では高齢者の徘徊や孤独死など高齢社会の問題が山積みとなっている。高齢者の徘徊・単身世帯の孤独死は近年増加している。孤独死において、遺体が発見されるまでに時間が経過してしまうケースが多く、徘徊では行方不明と言った自体になる場合がある。しかし、村では上記の事例のように相互に見守りあっ

ているため、孤独死の割合は非常に低く、徘徊においての行方不明といった現象が起こることはないそうだ。深い関係性を築き、互いをよく理解し合うことで、都会で起こっている問題を未然に防ぐことが可能となっている。このような関係性を形成することは容易ではない。この村独自の仕組みだ。都会でも村のような深い関係性までは難しくても、挨拶を交わしたり、近所に住む人に関心を持つことで異変に気づくことができるのではないかと考えた。

### 3. まとめ・考察

以上の事例から、昭和村では日常적으로お互いに支え合いながら生活していることがわかった。このような仕組みは人口が少ない地域であるからこそ維持できる。そして、村の存続のためには維持しなければならないのだと感じた。この仕組みを他の地域で取り込み、実現させることは困難である。しかし、状況によっては不可能ではないだろう。確かに、人口の多い都市部ではこれらの仕組みは実現できないだろう。それは最初に述べたように近年、都市部での人間関係が希薄になっているからである。対して、日本に存在する人口の少ない地域には、この仕組みを実現できるところもある。この仕組みを活用できれば、人口の少ない地域でも暮らしが豊かになり、暮らしやすくなるのではないかと私たちは考える。そして、地域の存続につながるだろう。

人口が少ないことは不便を作り出し、不利な状態になると考えていたが、そのようなことはこの村ではなかった。少ない人口が住民同士の深いつながりや支え合い、助け合う心と文化を生んでいた。昭和村の住民は、住民同士が村の存続を望み、自主的に文化を確立させた。このような仕組みは村の存続につながるのだと私たちは感じた。

### 参考文献

- ・『昭和村認知症ケアパス 認知症があっても地域で暮らし続けられるために』昭和村保健福祉課(平成29年2月)

## 4-5 高齢期を迎えても村に残り続けるためには

高瀬優太

昭和村の高齢者の中で話題になっている、子どもからの勧めで村を出て子どもと一緒に暮らすという問題について考えた。高齢期を迎えても村に残り続けるのであれば、高齢者とその子どもにとって何が必要かを考え、考察としてまとめた。

### 1. 住民が村に求めること

事前調査として調べた、本報告書2-2の資料を見ると、村内の医師が一人しか居ないということや、消防団員が不足しているという話題が見られた。郵政民営化を受け、福祉的な役割を担っていた郵便局員が動きづらくなるなど、村の福祉の話題もあった。また2-1、2-2のどちらの資料においても、人口が年々減少傾向にあることが記述されていた。それらの資料からは、村における不便さや大変さなどが予想されたため、私は住民が村に何を求めているかを調査しようと考えた。

しかし実際に現地で聞き込みを進めると、今回私がお話を聞いた方々からは、村に求めていることはないという方がほとんどだった。コンビニエンスストアがあるといい、という意見もあったが、極めて少数であった。どちらかというと、今ある村の資源や、まだ発見できていない村の新たな資源を用いて更なる発展を目指していく、というスタンスであるように感じた。では、村の住民が不安に思うこと、心配なことは何か、と考えた。話を聞いていくうち、高齢者の村外への転出についての話題が出た。

## 2. 高齢者の転出問題

本報告書4-2の、昭和村から見る地域活性化のひけつでも触れられていたように、近年、村外に住む自分の子どもから、同居を勧められて高齢者が村を出ることが増えている。いわゆる呼び寄せ同居というものである。昭和村の保健福祉課でも、この話題が出た。高齢者にとっては、慣れ親しんだ土地を離れることは辛いものであるということが話題の中心となった。しかし、高齢期の生活を成り立たせる1つの手段として、呼び寄せ同居は重要な役割を担っていることも事実である。

## 3. そこで問題なのは何か

呼び寄せ同居は高齢者の生活を支えるためには優れた手段と言える。しかし、その全てを手放しに良いとは言いきり難い。その理由として、苧麻倶楽部のスタッフの方から伺った話がある。その方によると、昭和村の高齢者の多くは、子どもがある程度成長した段階で、村外に出す傾向にあるという。進学や就職を機に子どもたちは村から離れ、そのまま村外で家庭を持つ。親である高齢者はそのまま村で一人暮らしを続け、それを案じた子どもが、自分たちと一緒に暮らすことを提案するという。ここで呼び寄せ同居の1つめの問題が多くの場合で発生する。子どもからの提案を受け、そのまま村外へ転出してしまうことが増えたというが、そのほとんどが高齢者本人の意思ではないという。子どもの意見を尊重し、渋々村から離れていってしまうのだとか。これが呼び寄せ同居の1つめの問題である。

次に挙げられる呼び寄せ同居の問題点は、村からの転出後についてである。子ども夫婦に気を使い、村では毎日行っていた畑仕事ができなくなるなど、今までの生活環境からは全く異なった過ごし方を余儀なくされる。その結果として、認知症になってしまうケースが多くなっているという。また、子どもとしても介護など負担も増えることもあり、どちらも納得いく形で収まることは難しい。

## 4. 考察

呼び寄せ同居は子どもや子どもの家族からの善意であり、無下にはし難い。また、そのシステムで豊かに生活できている高齢者がいることも事実である。しかし、この場合に限って言えば、高齢者の意見が尊重されないという問題点がある。どちらが良いかというわけではなく、高齢者が村に残り続けるとして、何が必要になるのだろうか。

私が考えたのは、4-4でも取り上げられていた『昭和村認知症ケアパス』の中にある、チヨ子さんの例を広めていくことである。チヨ子さんは村外に息子がいる87歳の高齢女性である。10年前に夫を亡くし、それ以来一人暮らしをしている。チヨ子さんは物忘れがひどくなり、同じ物を1日に何度も買い、昨日自宅を訪ねてきた友人に「最近来ないな」と電話をかけるなどしていた。そこで近所の人たちは、村外に住むチヨ子さんの息子にその旨を伝える。息子はチヨ子さんに今までと変わらない生活を歩んでほしいとして、近所の人に見守りを頼んだ。近所の人たちはそれを快諾し、地域単位での見守りが行われたという内容である。さらにこの例題において重要なのは息子の存在で、この息子は呼び寄せ同居をしない代わりに、頻繁にチヨ子さんのもとを訪れている。家事や畑仕事を手伝うため、月に2~3度村に帰ってきてチヨ子さんの一人暮らしを支えているのだ。畑仕事を手伝うとなると、おそらく近隣の人たちとも交流ができるはずである。そう考えるとこの例では、地域と高齢者の結びつきだけでなく、地域と高齢者の家族(子ども)との結びつきも達成されていると考えられる。このように、ケアを受ける側の人間が地域と強く結びつけば、高齢期を迎えても村に残ることができるようになるはずだと考えた。では、その実現には何が必要となるのか。

私は、高齢者へのケアに対する資源として地域社会があるということ、高齢者の子ども世代に広く知ってもら



うことが必要であると考え。村内の高齢者が、資源としての地域社会に頼ることができるのは、住民が多くの場合でそれぞれ役割を持っているからである。例えば『昭和村認知症ケアパス』のチヨ子さんの1日のスケジュールには、次のようなことが書かれている。「昼ご飯を食べ、あと片付けをしたら、チヨ子さんは1時間ほど昼寝をします。その後、同じ地区に住む高齢の夫婦二人暮らしのお宅へ向かいます。この夫婦は、ともに歩行が不自由であまり外出できず、近所の友だちがお茶飲みに来るのを歓迎しています。」

このように、チヨ子さんは近所の人たちから支えられながら、自分自身もケアをする側の役割を担っている。自身もケアの資源になることで、地域社会の構成員としての役割を果たし、地域との強い結びつきが生まれるのである。その結果として、チヨ子さん親子は親子関係の良好な連携という点でも、地域によるサポートの恩恵を受けることができたのである。

この事例において、息子はケアの間接的なサポートを担い、地域が直接的なサポートの実戦を行っている。これらの話題は家族個人単位の問題と捉えられがちだが、昭和村では行政が高齢者をケアしてくれる姿勢がある。同パンフレットには、「介護サービスに頼り過ぎない！」として、「できることを取り上げないよう上手にサービスを使って、近所の人たちとのつながりを生かしながら、ぎりぎりまで今の暮らしを続けられるようにしましょう」という保健師とケアマネージャーによる言葉が書かれている。昭和村では、それと全く同じ姿勢で高齢者へのケアを実施している。また、地域の直接的なサポートの一例も紹介されていた。チヨ子さんが近所の商店へお茶飲みに行った際、同じものを買わないようにお茶飲み仲間が注意してくれているとある。何を買ったか、何が家にあるか、というのはお互いに家を行き来しないと分からないことだ。地域の直接的なサポートは、こういった細かい部分にまで行き届いている場合があるようだ。このようなサポート・見守りは、昭和村でも感じられた。住民の車のナンバーを覚えている、という話題が本報告書3-Iにもあるが、それほど密接な繋がりがあれば、これは既に達成されているはずである。

『昭和村認知症ケアパス 認知症があっても地域で暮らし続けるために』による例は、すべて会津地方および全国の認知症高齢者に関する話を統合して作られたものであるという。あくまでも事実即したフィクションではあるが、パンフレット内で紹介された事例が成り立つ仕組みには、前述の地域との強い結びつきが下地にないと成り立たない。しかし昭和村には、地域と高齢者との結びつきが既に存在している。つまり残された課題は、高齢期に入った親を持つ子どもが、村外からの間接的なサポートをどこまで実施できるかにあると考える。

そしてこのことを知ってもらうには、引き続きパンフレットや広報誌などを送付するなどして発信し続け、呼びかけることも必要であろう。しかし、実際にできるだけ村を訪れてもらい、自分の親がどのように生活しているかをしっかり見てもらうことが重要なのではないかと考えた。その中で、お茶飲み文化に代表されるような、昭和村独自の互助の方法を見てもらうべきだろう。地域単位での見守りが常に身近に存在する環境であれば、地域に親を任せることができるという安心感を持ってもらうことが必要であると考えた。

## 5. まとめ

高齢期を迎え、村から離れることも残ることも、どちらにも良い点はある、どちらも否定することはできない。しかし、仮に村に残ることを選ぶのであれば、安心や安全が確保された環境であるということを高齢者の家族に深く理解してもらうことも必要だろう。そのためにはやはり村を訪れ、村のやり方を理解することが重要になるのではないかと考えた。

## 参考資料

昭和村保健福祉課『昭和村認知症ケアパス 認知症があっても地域で暮らし続けるために』（平成29年2月）

## 5 フィールドノーツ（調査日誌）

新井緋香利

10月29日（日）

朝7時ごろに起床。今日から昭和村へ行くという実感がまったくわかなかった。前日に荷物をまとめていたので、すぐ家を出ることができた。父が車で送ってくれるということで車に乗り込み、車で少し行ったところで高瀬君と合流。全然実感わかないよね～と言い合いながら、車内で改めて昭和村について調べていた。当初の予定では新札幌駅まで送ってもらうはずだったが、父の厚意で新千歳空港まで送ってくれることになった。普段と変わらない調子で話していると、気づけば新千歳空港に到着していた。10時20分頃、事前に知らされていた待ち合わせ場所に向かうと、私たちと木戸先生以外全員揃っていた。内田先生からチェックインをするためのチケットをもらい、持ち物検査を通った。そのあと12時のフライトまで自由時間になった。私と高瀬君で売店のお菓子を買い、搭乗口付近のイスに座った。やっぱり実感ないねと話しながらお菓子をほおぼる。11時40分頃になり、飛行機に乗り込んだ。私は窓際だったのだが、隣の席が木戸先生で少し緊張した。

一時間もしないうちに仙台空港に到着。会津若松までの高速バスまでの少しの時間を使って、空港内のコンビニで軽食を買う。買い物を済ませ、高速バスに乗り込んだ。一時間ほどしてから国見SAに到着。再出発し、再び一時間ほどすると福島駅に着き、そこでたくさん人が乗ってきた。17時頃ようやく苧麻倶楽部の皆さんとの待ち合わせ場所である会津アビオに到着。乗車時間4時間である。数人は車酔いでへろへろになっていた。今回は学生8人と先生2人という大所帯のため、夕食はラーメン屋さんでとった。学生は学生でテーブルを囲んだため、先生側のテーブルから「去年はまだ今頃船の中ですね」と話していて、バスに時間がかかっても飛行機でよかったと思った。その後、Iさんという苧麻倶楽部の方の車に太田・高瀬・新井のB班で乗り込んだ。今回泊まらせていただける場所が野尻コミュニティーセンターで、お風呂がないため、毎回お風呂は近くの温泉に行くことになった。温泉は非常に気持ちよかったが、温泉から野尻のコミセンまでの距離が結構あった。途中高瀬くんの車酔いがピークをむかえてしまい、私たちの車だけトイレ休憩をはさんだ。21時前にコミセンに到着。就寝前に、みんなで明日に向けての作戦会議を談話室で行った。そうして移動を含めた初日が終了。広間に布団を敷いて寝た。

10月30日（月）

私が起きるころには、みんなせかせか朝の準備をしていた。朝食には会津の牛乳を飲み、北海道では味わえない味を堪能した。ご飯を食べ終わり、しばらくしてGさんとIさんが到着。相変わらずIさんの車にはB班の三人で乗車した。

ついたのは春日神社。Iさんのお話によると、この春日神社からのろしを上げれば70分程度で会津若松まで届くという。神社は高いところにあり、周りは木に囲まれている。木の隙間から村中を見渡すことができ、村に異変があればすぐ気付けるらしい。そんなお話を急な神社の階段に息を切らしながら聞いた。

再び車に乗り込み、次は農協に向かった。カスミソウの集荷場を担っており、出荷前のカスミソウを見せていただいた。普段花を見るにしても、脇役として見ていたカスミソウ。いざ単



体で見ると、お花の粒も大きくてすごく綺麗だった。染色液を使ったカラーカスミソウもあり、カスミソウをいい状態に保つための予冷库や、冷たい空気を作るために雪をためる雪室も見せていただいた。

その次は道の駅であるからむし織の里に立ち寄った。こちらではからむし織体験をした。みんなで一斉に織り始めたが、誰よりも先に降り終わった。みんなの織りを待っている間、奥の広間に行くと、実際にからむしを撚っていた。動画では見ていたが、生で見るとなんだか感動した。お土産を買おうと思い、試食が出ていたこでらんに漬けを食べた。とても美味しくて衝撃を受けた。最後まで悩んで1パック買った。道の駅では栃木県から来た人と東京から来た人にお会いした。他県からの人気もあるのだと感じた。

次に行ったのは村の保健福祉課。保健福祉課が入っている建物には、老人ホームのようなお年寄りが集まる場所もあった。お年寄りが集まっているフロアの中は、思ったより広く、天井も高かった。保健福祉課長に昭和村の現状や村内の人同士の付き合い方のお話など、たくさんのお話をお聞きした。お昼にはやまか食堂さんのカツ丼を頂き、お腹がいっぱいになった。

コミセンに帰ってきてから、Yクラブの方々をお迎えするための準備をした。四人のYクラブの方をお迎えして、結の精神について、活動内容などをお話ししていただいた。助け合いの心が結であり、野尻地区の人たちは生まれた瞬間からYクラブの一員であるというお話があり、助け合う関係性が当たり前にあることに感動した。また、自然の食物連鎖を崩さないためや、子どもたちがもっと自然に触れることができるように、虫たちが集まるためのピオトープを作成したという。お話をお聞きした後、一旦晩御飯の準備のために帰っていただいた。

晩御飯はそれぞれ担当分けをし、もう一度Yクラブのみなさんをお迎えした。S社のお二人も来てくださり、わいわいとした交流会となった。

## 10月31日(火)

朝食をとり、片づけをしていると昨日お話をしてくださったYクラブのみなさんが来てくださった。この日の作業はコミセン周辺の雪囲いとコミセンの隣にある特殊な体育館の整備だ。村内にある体育館は2つだけらしい。また、今回整備する体育館は床がなく、地面・土になっている。そのため、ゲートボールができたり、雨の日でもBBQができるのだ。話を聞いただけでは、イメージが湧きにくい。実際に体育館の中に入ってみると、本当に一般的な体育館の壁や天井で、床だけ外されて土が出ていて驚いた。B班は体育館内の土を平らにしたり、貼ってある紐を直したり等を行った。整備が終わり、実際にゲートボールをするため、Yクラブのリーダーさんにルールや遊び方説明をしていただいた。何回か試し打ちをしてみるものの、みんなあまり入らない。チーム分けをしていざ本戦になった途端、ちよろちよろボールを打てるようになり、最後には激戦を繰り広げた(佐藤さんと高瀬くんが)。試合が終わり、和んだ雰囲気のままコミセンに戻った。今回のお昼は、昨日のお昼に頂いたカツどんを作ってくださっている、やまか食堂さんのお弁当が出された。Iさんの話によると、お弁当をどんな人が食べるのかで内容が変わるらしい。あの人が食べるなら、あの食材は入れないでこう・・・が実際にあるようだ。それだけ村の人たち同士が知り合いで、むしろ自分より周りの方が自分のことを知っているのではないかと思った。

食事が終わり、スケジュール的には実際にどなたかのお宅にお邪魔してインタビューする形になっていた。しかし、当日まで誰にインタビューするか決まっておらず、その場でYクラブの方が電話でアポを取ってくださった。先導



してくださるということで、外に出て車の後を追いかけた。今回インタビューさせていただいたSさんの家は、我々が泊まっているコミセンから数分の場所である小さな商店だ。お宅にお邪魔すると、暖かくお出迎えしてくれた。前もって連絡してくれたらもっともてなしたのに！と少し不満げにいらしたが、テーブルにある蜜柑を薦められたのでみんなで食べた。それからキッチンの方へ行ったかと思うと、お赤飯とから揚げとゼンマイの煮付け、ご自分で付けたかりん酒を出してくださった。そのあとも体調を悪くした川村さんに薬を持たせてくれたり、帰りに息子の奥さんが作った梅酒を持たせてくださった。お話は、村での生活やあり方についてしていただいた。

Sさんの家に行っている間、先生方やIさんたちが宴会の準備をしてくれていた。木戸先生に「この後班ごとに発表をしてもらおう」という話をされ、B班で急いで準備した。宴会が始まり、宴会には副村長さんも来ていた。少ししてから発表の時間になった。先にA班の発表があり、次にB班の発表になる。私が織姫体験よりもラフな、からむし織のワークショップをやってみたらどうかという発表をした。席に戻るとこれまで来た大学さんの中で一番の発表だったと褒めてくださった。特に、からむし織のワークショップについて、からむしにこんなに言及してくれたのは初めてだとまた褒めてくださった。村の方が「今回指摘してくれたことが活かされてるかどうか、また来年確認しに来てくれ」と話してくださった。みなさんが帰り始めると、若い女性と男性が残った。このお二人はコミセンの斜め前の家に住んでいる方で、二次会もきっちり参加してくれた。「明日は何時に出るの？お見送りしてあげるよ」と言ってくださり、朝早いのでといったん断ると「カスミソウやってるから早起きなめんな」と言われた。

## 11月1日(水)

朝起きると毎回のごとくもうみんなが準備を終えていた。様々な片付けを終えて、コミセンの扉を開けると本当に昨晩の女性が見送りに来てくれた。私たちの車が見えなくなるまで手を振ってくれた。心があたたかくなり、Iさんの車で会津若松まで送ってくださった。バス内は寝る気満々だったが、高瀬君と話していたら気づいたら仙台空港についていた。仙台空港では自由時間があったので、カレーを食べた。お土産とずんだもちを買って、高瀬くんと屋上の展望台に上った。案外あっという間で、内容も濃いフィールドワークだったねと話した。それから新千歳空港行きの飛行機に乗り、お気に入りの音楽を聴きながら眠りについた。新千歳で解散となり、私と高瀬君でスターバックスに行き、今回のフィールドワークの思い出を話し合った。

## フィールドワークを受けて

昭和村に行く前は全然イメージがわからなかったし、どのような要領で動くのかわからずビビりまくっていた。だが、村の人や苧麻倶楽部のお二人・先生方も優しく、のびのびとお話を聞くことができた。また学生同士も仲良くなり、講義でも笑顔が増えた。この報告書をまとめることで村でお世話になった人たちへの感謝の気持ちになるのではないかと思い、一生懸命書いている。また、このような貴重な体験を講義として取り扱うことのできる先生方に感謝したい。本当にありがとうございました。

**太田早紀**

## 10月29日(日)

9:00に自宅を出発し、北翔大学前・札学院大前(バス停)で高見さんと合流。9:12にバスが到着し、新札幌に向かう。20分ほどで新札幌に到着。9:48発の新札幌駅から新千歳空港行きのJRに乗り込み、また30分ほど乗り物に揺られた。新千歳空港には10:00過ぎについた。修学旅行生が多く、集合場所のローソン前で他のメンバーを探すことに苦労したが、何とか合流した。その時点で、木戸先生・高瀬君・新井さん以外のメンバーがもう集まって



いた。少しすると高瀬君・新井さん・木戸先生が到着し、全員がそろったところで搭乗手続きを行った。搭乗手続きの後、12:00 発の飛行機まで時間が有り余っていたので近くを徘徊しながら時間までを過ごした。12:00 前に飛行機に乗り込み、12:00 に空へ旅立った。飛行機酔いが心配だった私は離陸と同時に睡眠の体制をとり、気付いた時には眠っていたようだ。13:12 に仙台空港に到着し、各自必要なものなどを買い足しながらバスの到着を待った。13:55 にバスに乗り込み会津までの道のりを走り出した。ここでも車酔いが心配だったため、私は光の速さで眠りについた。途中、国見サービスエリアで10分休憩をはさみ、10分後出発。またも光の速さで眠りにつき、気付いた時には外は暗くなっていた。

17:15 頃バス停に到着し、そこには昭和村の方（Iさん・Gさん・IGさん）が迎えにきていてくれた。その後、近くにあったラーメン屋さんに入って晩御飯を食べ、18:20 頃そこを出発。車で1時間ほど揺られたのち、温泉に到着。30分ほどの入浴を終え、そこから公民館へ、また1時間ほど車に揺られる。道中、高瀬君の体調が悪くなり、お手洗いに立ち寄りながら21:00前にはコミュニティセンターに到着。各自、バスで聞いた話や明日のことを話し合い、この日は就寝した。

## 10月30日(月)

6:30に起床。6:00に時間を知らせるチャイムが鳴ったらしいが私には聞こえなかった。そこから準備を始め、7:00前には準備は終わった。その後、起きていないメンバーを起こし、7:30にはご飯をみんなで食べた。朝ごはんはランチパックとブルーベリー&アサイーミックスのジュースであった。8:00には食べ終わりお片付けをした後、各自鞆の整理などをし、9:00頃に迎えに来てくれたIさんとGさんと共に行動を始めた。車二台で来てくれたのでA班（川村さん・佐藤さん・高見さん・松田さん・由良さん）+内田先生とB班（新井さん・高瀬君・私）+木戸先生で別れて乗り込んだ。



春日神社に到着し、Iさんがこの神社についての話をしてくださった。一通り見たのち今度はカスミソウの集出荷貯蔵施設に到着し、カスミソウについての話を聞き、倉庫内や雪蔵を見せていただいた。その後、からむし織の里に移動し、そこでからむし織体験をした。各自、体験し終えたら織姫さんに話を聞いたり、お土産を買うなど自由な時間を過ごした。12:00にはすみれ荘に移動。そこでは保健福祉課の方にお話を聞きながらかつ丼を食べた。かつ丼は想像よりも量が多くなく、丁度いい量であった。いろんな話を聞き終えて、各自車に乗り込み公民館へ帰宅。

14:30から「Yクラブ」の方々がきてお話をしてくれる予定だったのでお茶やお菓子の準備を始める。思ったよりも早めに「Yクラブ」の方々が到着し早めにお話を始める。そこではYクラブの活動や現状を教えていただいた。私たちが質問をするというよりも内田先生がたくさん質問をしていて、私たちはいかにお茶を注ぎに行こうかとタイミングを考えだしていた。話が盛り上がり気が付けば17:00になっていた。時間に気付いたYクラブの方々は早々に話を切り上げ、私たちは温泉に向かった。そこで45分ほど入浴をしたのち公民館に帰り、夕ご飯の準備にかかると。この日の夕ご飯はたこ焼き・ミルフィーユ鍋・炊き込みご飯・頂いた煮物・漬物・切り干し大根であった。鍋隊・炊き込みご飯隊・たこ焼き隊に分かれてご飯を作り、その後、第一回懇談会が開催された。

そこには Y クラブの方々や様々な方が来てくれた。各自聞きたいことを村の方々に聞きながらご飯を楽しんだ。川村さんがたこ焼きのプロ（バイトのため）で、とてもきれいなたこ焼きを焼いてくれた。お酒も少々たしなみ、ふわふわしてきたところで懇談会はお開きとなった。集まってくれた方々にお礼を言いながらお別れをし、その後、IさんとGさんたちに手伝って貰いながらお片付けを始めた。一通り片付けが終わったところでIさん・Gさんは帰宅した。その後、各自就寝の準備をして、今日あったことを報告した。報告が終わった後、何人かでお菓子を食べながらお話をし、眠くなったところで各々眠りにつき、2日目を終えた。

## 10月31日(火)

この日も私の耳にはチャイムの音が届くことはなく6:30前に目覚ましで起床した。その時点で高瀬君は起きていたがほかのメンバーは眠りについていて、準備を始め7:00前には終わり、まだ寝ているメンバーを起こしにいった。みんなが準備をしている間、私と高瀬君で前日のまとめなどをして、7:30過ぎに全員で朝食をとった。この日の朝食は前日の残りのおかず・炊き込みご飯・お味噌汁・納豆などであった。食べ終えた後、各自荷物の片付けなどを行い、IさんとGさんの到着を待った。IさんとGさんが到着し、少しお茶を飲みながらまったりしているところで集落の方々が到着。

集落の方々にもお茶を出し、飲み終えたところで公民館の隣にある体育館の冬の準備を始める。その体育館の床が砂地であったことに驚きながら、A班とB班に分かれて仕事を始める。A班は外での作業でB班の中の砂地の整備を行った。メジャーなどで線を作り、その上からそのメジャーを固定して、砂を均等に均し、重りを引いて地面を固めるといったことを行った。普段触る機会のあまりない金槌に苦戦しながらもなかなか上手に打てたと勝手に満足をし、その後、重しを引いていた新井さんに代わってもらい、重しを引く体験をさせてもらった。集落の方にも引くの上手よといってもらい、楽しみながら作業を終えた。その後、その整備した砂地でゲートボールを始めた。ゲートボールのルールは思っていたよりも複雑で、頭にはなを浮かべながら行ったが、何よりもコースにボールを入れることに苦戦をしいられた。近所のおじさん方は毎日こんなに複雑なルールを理解し、素敵なコントロール力でゲートボールをしていたのか...などと考えながら集落の方に教えてもらった場所に狙いを定めボールを打つことを繰り返すこと30分。競技が終わり、楽しかったという感想と村の人から見るとみんなへたくそだったんだろうなという感想を持ちながらゲートボール大会は閉幕した。その後、公民館に戻り「やまか食堂」のお弁当をみんなで食べた。ここのお弁当は食べる人の好みに合わせておかずを変えているようで、この日は学生が多いこともあり揚げ物を多めに入れていてくれた。どのおかずもおいしく、また食べたいと思いつつ食べ終えた。食後にお茶を飲みながら、集落の方々とお話が盛り上がり、気付けば予定していたお宅訪問の時間になっていた。

来ていただいた集落の人たちの中の誰かのお宅にお邪魔させていただき予定だったのだが、急遽、近くで商店を営んでいるおばあさんの家に行くことになった。集落の方に案内してもらい、商店にたどり着くとおばあさんが快く迎えてくれた。おばあさんの家に入ると座布団を引いていただいたり、こたつに入るように促されたり、ストーブを出してくれたりと至れり尽くせりで感謝と申し訳なさに苛まれながらお話を聞き始めた。とても親しみやすいおばあさんで、おばあちゃんちに遊びに来た気持ちになりながらのインタビューとなった。インタビュー調査を開始してからもおばあさんはミカンをくれたり、ゼンマイの煮物・唐揚げ・お赤飯のおにぎり・お酒をご馳走していただいたりと様々なおもてなしをしてくださった。ただただ感動と申し訳なさとおいしさで感情がごちゃごちゃになりながらも北海道にかえったらお返しの商品を送ろうと心に決め、時間までのインタビューをおこなった。そしていざ帰る時間だ！となり、お礼をたくさん言っておばあさんの家を出発した。おばあさんは私たちが見えなくなるまで手を振ってくれて、そのやさしさに全員が感動の涙に目を潤ませながら手を振り返し、公民館へ帰宅した。

公民館につくと晩御飯の準備が終わっており、とてもおいしい匂いがしていた。木戸先生に呼び出され、学校に

帰ってからの予定と今日の懇親会で村についての発表をすることを聞き、お風呂までの時間で班ごとに分かれて発表について話し合いをした。その後、温泉に行き、温泉の中でも発表についての相談をしながらまったりとお湯を楽しんだ。温泉から公民館に戻ると集落の方々が数名来てくださっていた。各々準備をしたのち、第二回懇親会が開催された。この日の晩御飯はお鍋・ささみときゅうりのサラダ・お稲荷さんなどであった。各自近くに座った方々とお話を楽しみ、懇親会の途中で私たちの発表をさせていただいた。村の方々の前で村のことを発表することに緊張を感じながら班ごとの発表を行った。発表を受けて村の方々の意見を聞きながらまた懇親会はスタートした。私たちの発表についての感想を言っていただきながら、村の中でも意見の違いが思っていたよりも多くあることに衝撃を受けた。その後、村の若い女性とお話をする機会があり、その時には私はほろ酔い状態で、女性は出来上がっていた。お互い楽しい気分になりながらお話を続け、気付くとお開きの時間になっていた。お礼を言いながら集落の方々とお別れをし、片付けを開始した。私とお開きの時間までお話していた女性と一緒に来てくれた男性は片付けを手伝ってくれた。片付けのあと、担当者さんにモーニングコールを頼まれ、しっかりと心に刻み付けた後、お礼を言ってお別れをした。女性と男性にもお礼を言ってお別れをしようとしたが、女性と男性は2次会まで参加していった。2次会途中、私はお酒による睡魔に襲われ、早々と新井さんと高瀬君にお布団に連行され、寝かせる気のない子守唄を聞かされながら横になった。わたしは日本酒に弱いのかしらと思いながら、私が横になっている部屋に来てくれた人たちと会話をし、気付いた時には半分夢の世界にいた。女性と男性が帰るというのでお見送りをしに行き、その後お布団に戻り、即座に眠りについた。

## 11月1日(水)

この日は5:00前に起床し、その時点で高瀬君は起きていたが他のメンバーはまだ寝ていた。準備を始め、終わ次第片付けを始めた。5:30になり頼まれていたモーニングコールをかけ、その後片付けの続きを始めた。6:00頃に担当者さんがお迎えに来てくださった。お見送りに前日懇親会に出席してくれた女性が来てくれていて村の温かさを感じた。3日間過ごした公民館に別れを告げ、寂しい気持ちになりながらバス停までの道のりを車で揺られた。車酔いをする気しなく、申し訳なく思いながらも夢の世界へ旅立った。途中、各自の朝ごはんを買うためコンビニエンスストアに立ち寄り、また車に揺られた。その後、バス停に到着し、バスを待った。バスが到着し、お世話になった担当者さんと別れ、バスに乗り込んだ。またも、車酔いをする気しなかったので数分も立たないうちに夢の世界へ旅立った。来たとき同様、国見サービスエリアで10分間の休憩があり、各自お手洗いや買い物をし、バスに戻った。気付けば仙台空港についており、自分は寝てばかりだなと思いながらバスを降りた。空港に到着した時間は11:40頃で飛行機の搭乗手続きが14:00過ぎだったので各々お土産を買うなどといった自由行動の時間となった。ご飯を食べながら村のことを振り返り話し合い、その後お土産を買いに行ったりと各々自由な時間を過ごした。14:00になり全員が集合し搭乗手続きを行った。14:25に飛行機に乗り込み14:45に仙台の地を飛び立った。飛行機酔いをしそうだったのですぐに眠りにつき16:00に新千歳空港に到着。とうとう帰って来てしまったんだと寂しく思いながら、ここで解散となった。木戸先生の「家につくまでが遠足ですよ」の言葉を胸にJRに乗り込み新さっぽろ駅まで行き、そこからバスで北翔大学前・札学院大前のバス停まで高見さんと共に帰った。自分の家が近づくにつれ、終わってしまうと思いながら、17:30頃とうとう自宅に到着した。こうしてフィールドワーク実習が終わった。

川村亜季

札幌を出発し昭和村へ（1日目）

10月29日、8時50分に自宅付近で空港直通の連絡バスに乗り、新千歳空港には集合時間より早めの9時50分ごろ到着。私は新千歳空港で売っているカルビーのポテリコというお菓子が大好きなので、集合時間まで余裕をかまして買って食べていた。ポテリコを食べながら集合場所でみんなを待つが全然来ない。佐藤さんに電話したら「あきがいるのは2Fのローソンだ」と言われ自分が集合場所を間違えていたことを知る。びっくりだよ。みんな遅いなくらいに考えていたよ。

みんなと集合してからは大きなトラブルを起こすことはなく、11時40分に仙台行きの飛行機に乗り込み、爆睡しているうちに人生初の仙台についた。

私の地獄はここからで、会津若松行のバスに乗っている間、この世の終わりではないかというほどの車酔いと戦った。こんなにつらい思いをするくらいならいっそフィールドワークの単位はいらないと思いつつ、ひたすら耐えに耐え気付いたらバスを降り昭和村の方々と合流していた。夕飯にラーメン屋さんでチャーハンを食べ、苧麻倶楽部のGさんの車で宿泊場所の野尻コミュニティーセンターと送っていただき、その後は死んだように寝た。(コミュセンまでの道中にあった温泉は最高だった) Gさんの車の中は絶好のインタビュー機会であったのに、ほとんどお話を聞くことができなかったのが初日の反省点である。

### 昭和村での1日目 (10月30日)

朝から佐藤さんがカメムシを捕まえた。はあ、ほんとにカメムシいるんだなと思いつつ身支度を済ませた。昨日の夜にはわからなかった村の景色を見て、きれいだなと思った。午前中は、Gさんがまた車を出してくださり昭和村の中を見学した。春日神社とカスミソウ関連の施設である雪室見学をし、その後、からむし織の里で織体験をした。織体験を指導して下さった女性は実際に織姫制度を利用し、昭和村に移住してきたそうで、村での暮らしや移住の際の思いをお聞きすることができた。

からむし織の里にあったお土産コーナーはどれも目を惹くものばかりで、「ここからここまで全部ください」と言いたいほどだった。からむしは素敵な作品を生み出す素晴らしいものなのだと感じ、買い占められなくて残念だけど1つだけからむしのヘアゴムを買った。

お昼ごはんは「すみれ荘」で名物のソースかつ丼を食べながら、保健福祉課の方からお話をお聞きした。美味しかった以外の感想も言いたいのだが、美味しかった以外言葉が出てこないほどに美味しかった。そしてお話しして下さった内容もとても味深いものだった。

14時からコミュセンにて「Yクラブ」の方からお話をお聞きした。3時間近くたっぷりとお話を聞いた後、夕飯前に温泉に行った。ご飯前に温泉なんて、なんて優雅な生活なのだろうと余韻に浸りながらコミュニティーセンターに戻り夕飯の支度をした。

夕飯ではYクラブの方や孫ターンで昭和村に来た方からお話をお聞きし、お酒も飲み、たこ焼きのプロの技を見せつけ、気が付いたら夜も23時近くになっていた。眠かったので頑張つて後片付けをし、片付けが終わり次第、即寝た。みんなは片付けのあとに、さらに飲み会をしていた。タフすごい。



### 昭和村での2日目 (10月31日)



ひんやりとした寒さに驚き目が覚める。昨日も朝目覚めたとき寒かったので、夜のうちに勝手に毛布をもう1枚増やして寝たにも関わらず、すっごく寒かった。福島県恐るべし。今日は村の方との共同作業だ、と身支度を整え張り切っていたのだが、作業の前にまずはお茶飲みタイムがあった。ほっこりした気分の中、お茶飲み文化の大切さを知った。昭和村での人のつながりの暖かさと、物理的にお茶の温かさが体に染みだ。

## 共同作業とゲートボール



9時半ごろから「共同作業」として、コミュニティーセンターの雪囲いを行った。雪囲いは初めての経験だったけれど、やってみると作業自体は簡単にできた。窓の枠組みと木の板はすっごく計算されて作られているのだと感動した。私の住む札幌ではあまりなじみのない雪囲いは、知恵と精密さにあふれていた。

雪囲いの作業が終わったら、ゲートボールをすることになり、人生初挑戦をした。結果から言うとボロボロで、自分の球技のセンスのなさに落胆した。第1ゲートを通れない限り、なんにも楽しくないゲームで、実力主義ってこういうことかなと慄きながら、佐藤さんの運動神経に嫉妬し、人生初のゲートボールは終わった。いつかリベンジしてみせる。

## お宅訪問

お昼ごはんのお弁当を食べた後は、コミュセン近くにお住いの高齢女性の方のお宅にお邪魔した。当初何う予定がなく、急な訪問にもかかわらずお話をしてくれ、ミカンや山菜までごちそうになってしまった。あとお酒も。そして、またもや私は体調不良でみんなに迷惑をかけてしまい反省。訪問してしばらくはガチガチに緊張していたのだが、時間がたつにつれて、居心地が良さを感じた。お宅をおいとまする頃には、すっかり離れがたくなってしまって、この方のおうちに自然と人が集まるのがわかるなど思いながらコミュセンまでの道のりをしみじみと歩いた。といっても3分もかからない程度の距離。

## 昭和村での最後のご飯

本日の夜はコミュニティーセンターで地域の方々をお招きして晩餐会。本当は晩餐会の準備をしなくてはならなかったのだが、お宅訪問でのんびりまったりしているうちに先生方が全てしてしまったとのこと。晩餐会ではA班B班ともに、昭和村の方々の前で発表をした。人前に立つことに緊張しなくなりたいなと落ち込みながらも、村の方々と話しているうちに楽しくなり、気付けば解散の時間になっていた。お酒とご飯とお話とメモの全てをこなすには手が足りないなと思った。あと2本くらい手があったらうまくいっていたかもしれない、と自分の調査能力のなさを生えてもいない手のせいにながら後片付けを行った。

本日もみんなのタフさに憧れながらも、誰よりも早く布団にダイブした。明日からもうご飯前に温泉に入る優雅な生活は送れないのか、残念、と思いながら爆睡した。

## 札幌へ帰る（11月1日）

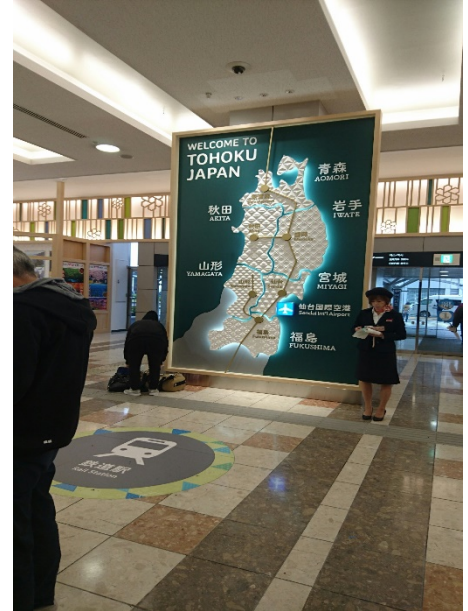
朝の6時に野尻のコミュニティーセンターを出発し、自宅に帰ったら夕方18時だった。半日かけて移動しとても疲れたが、去年のメンバーはもっと過酷だったのだと自分に言い聞かせて11月1日と言う日を過ごしていた。

家に帰ると玄関先に飼い猫がすっ飛んできて、可愛さに全ての疲れが癒された。なんだかんだ自分の家の布団の安心感はなにものにも代えられないと思いながら本日も爆睡した。昭和村の方々とゲートボールをしている夢を見た。夢の中でもやっぱり私は下手だった。大変なこともあったけれど、昭和村に行けて本当によかった。

佐藤楓

10月29日(日)

朝、家を出発して、家から50メートルほどにある、近くのバス停へ行った。空港連絡バスに乗り、新千歳空港へ行った。集合場所は一階のローソンの前。一階は基本的に到着口なので、本当にここでいいのかと少し不安だったが、みんなそこに来たため安心した。格安航空は初めてだったが、そんなにANAやJALと変わらなかったという印象を受けた。1時間のフライトをして、仙台に降り立ち、バスに乗って会津若松へ向かった。バスはなんと3時間も乗っていた。やっと会津若松について思ったことが2つ。雨がすごい降っている、ということと、ここって福島県だろうか、ということ。この日はとても雨が強く、傘を持ってきていなかった私はだいぶぬれてしまった。また、大体北海道を出れば気候の違いから「東京に着いた」「京都に着いた」と思うのだが、空港やバスから降りた時はあまり北海道と変化がなく、そこが福島だということを忘れかけていた。



Gさん、Iさん、Igさんと合流し、ラーメンを食べた。その後、分かれて車に乗り、温泉へ向かった。道中、車の中では右に左にグネグネ曲がり、街頭一つない道を走っていた。Gさんの車に乗ったのだが、昭和村のことをうまく聞き出すことができず、ポツリポツリとゴキブリの話などをしていった。短時間で温泉に入り、野尻のコミュニティセンターについた。去年のフィールドワークの話から相当なカメムシの数を覚悟していたのだが、全然カメムシはいなかった。この日みたカメムシは一匹だった。カメムシ対策として洗濯ネットを持ってきていて、数が多い場合は被って寝ようと思っていたが、その出番はなかった。

10月30日(月)

この日の予定的に朝は7時に起きればいいな、と思っていたのだが、野尻全体を流れる6時の鐘の音で目が覚めた。なかなか大きい音なため、慣れない私たちはほとんどの人が反応していた。朝食を食べ、昭和村の調査が始まった。初めは神社へ行った。階段が多くから一段も高いため、少々恐怖心があったが上りきると昭和村のきれいな山々が見れた。そこで、Iさんからこのあたりの歴史等を教えていただいた。Iさんの歴史の話は戦国時代のものが多く、仕事柄というより、Iさん自身の興味関心が歴史にむいているのだろうか、と思った。

その後雪室へ行き、カスミソウを保存しているところを見学させてもらった。今は多く出荷される時期ではないため、カスミソウは少なかったが、その時あったカスミソウと染めカスミや、カスミソウのプリザーブドフラワーも見せてもらった。染めカスミもプリザーブドフラワーもとても



きれいで、鮮やかだった。プリザーブドフラワーは多くの女性に支持を得ると思うのだが、製作コストが高く、あまり量産していないようだ。

そのあと、からむし織の里へ行き、からむし織体験をした。からむし織は足を使い、手で糸を組み編んでいった。糸はそれなりに太かったため、あまり難しくなかった。トントンと編んでいくのが楽しくて、規定の長さよりももう少し編んでいたかった。からむし織体験で織り方を教えてくれた人は織姫さんで、色々話を聞かせてもらった。また、そのからむし織の里は道の駅でもあり、お土産が売ってあった。からむし織のコースターや栞やアクセサリなどがあつた。ドライフラワーにした染めカスミのペンダントやピアスも売ってあり、私は糸巻き形のピアスを買った。また、食料品も売っていて、凍み餅揚げというお菓子を買った。凍み餅揚げは手で持った時はずっしりと重たいのだが、実際にかじってみると、サクッといい音がして軽い触感を楽しめるお菓子だった。

その後すみれ荘に行き、保健福祉課長から話を伺った。それと同時に昼食にやまか食堂のカツ丼を食べた。やまか食堂のカツ丼は一般的なカツ丼とは違い、ソースカツ丼なので卵で閉じていない。私は卵が好きなので、卵がなくてはカツ丼の楽しさが半減してしまうのではないかと不安だった。しかし、実際に食べてみるとソースはクセになる味で、カツは厚く柔らかくてとてもおいしかった。

その後はコミュニティセンターへ戻り、Yクラブの方から話を伺った。Yクラブの方の話は方言やなまりが多かった。本人達はあまり方言を出していないつもりでいるようだが、他所から来た私たちには、何を言っているのかわからないことも何度かあつた。その後、予定を数十分過ぎてしまったが少し急いで温泉へ行って来た。昨晚とは違う温泉に連れて行ってもらい、帰ってきて懇親会をした。孫ターンの方数人来てくださった。晩ご飯のたこ焼きではたこ焼きの屋台でアルバイトをしている川村さんが本領を発揮していた。たこ焼き器の窪みでアヒージョをしたときは、温度が高くて、食材がカラカラと音を立てており、周りにいた高見さんと太田さんと「これ素揚げだよ」と話しながらも食べていた。懇親会が終わり、全員で食器などを片付けた。私と川村さん以外は少し飲み会をやっていたが、睡眠大好きな私は先に寝ることにした。

## 10月31日(火)

この日も7時に起床の予定だったが、みんなは早めに起きたようで袋をガサガサする音が大きくて私も起きた。朝食や身支度を終えた後、雪囲いの手伝いをした。脚立に乗ってガラスの窓に木の板をはめていく。だが、体育館の入り口の雪囲いは立体的で、とても時間がかかった。こうすることで雪に潰されず、窓が割れないということだが、この雪囲いは高さ2mほどまで施しており、昭和村の雪の多さを物語っているようだった。雪囲いが終わっても時間があまったので、昭和村の高齢者の方々に教わりながら、ゲートボールをやった。初めはできなかったが、コツを教えてもらったらできるように、嬉しかった。試合では相手の邪魔やゲートを通ることができて楽しかった。ゲートボールは誰のせいで負けた、誰のおかげで勝った、というものがわかりやすいスポーツで問題視されていることも一般的にはあるようだが、昭和村の方々は仲良くプレイしているようだ。こうやって体と頭を働かせることでボケの防止になっているんだ、とおっしゃっていたが、私も、このゲートボールは生活の活気になっていると思った。ゲートボールを終えて、午後はお宅訪問をした。どうやら急に訪問するお宅が変わったようで、急にお宅訪問の対象になったのはSさんの家だった。いざSさんの家へ行ってみるととても「おばあちゃんち」な感じがした。みかんもから揚げも赤飯も、食べ、と言われてさらには「梅酒があるんだ」と、お酒までごちそうになった。Sさんのお宅には村の人が毎日誰かが来ておしゃべりをしていくとのことだが、その理由がわかるようだった。私たちが突然訪問したのにも関わらず、当たり前のように出迎えてくれ、「何もないけど」と言いながらもみかんやから揚げや赤飯やお酒をふるまってくれる人当たりが良く、優しいからこそ村の人々も集まってくるのだろう。Sさんとお話を2時間ほどしてから次の予定もあるため、名残惜しくも帰った。Sさんのお宅を出た時も曲がり角を曲がる

まで見送ってくれる、優しいおばあさんだった。そしてコミュニティセンターへ帰ると、先生方で夕飯の準備をすべて終わらせてくれた。夜は懇親会を開いていただいた。どうやら「村に大学生がくる。懇親会を開くからぜひ来ないか」という旨の文書を野尻の全世帯に出していただいていたのだそうだ。全く知らない人の訪問に文書を出して懇親会の参加を呼び掛けて、快く迎えてくれ、Sさんはもちろん昭和村の人々が来訪者に対してとても高齢的であることが伺えた。多くの人と話をし、僭越ながらどうすればさらに昭和村が良くなるのか、自分たちなりに考えて提案をした。懇親会には小学生の女の子とそのお母さんや、カスミソウの新規就労で移住してきた同年代の人なども来てくださった。懇親会が終わった後も、カスミソウの就労者の人と一緒に話したり飲んだりしていた。

## 11月1日(水)

この日は飛行機の時間の都合のため、早起きをして、コミュニティセンターを後にした。車で2時間ほどGさんとIさんに送っていただいた。北海道からやってきた時と大体同じ道のりだったと思うが、来たときは周りは真っ暗で何も見えなかったのだが、今日は紅葉が始まっている福島の山々を見ることができ、とてもきれいだった。会津若松のバス停でGさんとIさんと別れた。その後はひたすら爆睡して、空港についた。空港ではお土産を買ったのだが、バスの途中で立ちよったサービスステーションの方が福島のもが多く、サービスステーションで赤ベこでも買えばよかったと少し後悔しながら、買い物をした。飛行機に乗り込み、一度寝るとそこはもう我がふるさと北海道だった。飛行機を降りて、バスで到着口まで行き、そこで解散となった。バスの時間の関係上45分くらい待ったため、空港をでたのは一番遅いのではないだろうか。それでも3時間のバスに比べればとてもはやく、家の近くを通るバスに乗り、無事家に帰宅した。

高瀬優太

## 10月29日(日)

緊張して6時半に目覚める。旅行カバンの大きさに戸惑いながら家を出ると、祖母が必ず生きて帰るようにと声をかけてきた。たぶん死なないだろうと笑って家を出たが、そう言われると不安である。9時ごろに新井さんのお父さんが迎えに来てくれた。当初は新札幌まで、という予定だったが、このまま空港まで送ってくださることになった。本当にありがたい。移動中は本当に楽しく、いつもと全く変わらない話をして過ごした。途中でパーキングエリアに車を止め、新井さんがカラムシ織りの作業工程を映した動画を見せてくれた。空港につき、11時50分に飛行機に乗る。機内では耳を痛くしながら過ごした。途中から寝てしまっていたが、目を開けると雨が降っていた。窓に雨つゆが流れていくのが見えて眺めていた。13時15分、仙台空港に到着。デイリーヤマザキに行った。感動した。13時55分、バスに乗り込む。ここからが辛かった。17時を少し過ぎたころ、苧麻倶楽部の方々と初めて会った。このあたりの記憶は具合が悪くて覚えていない。みんな入れるから、ということでラーメン屋さんに入った。ラーメン屋さんを出て、新井・太田・高瀬のB班は苧麻倶楽部・Iさんの車に乗せていただいた。そしてここから完全に記憶があやふやである。

Iさんは知識たっぷりの歴女で、色んなことを話してくださった。序盤は覚えている。その後、温泉で降り、太田さんから酔い止めをもらって飲んだ。しかし完全に車に酔ってしまった。Iさんにもご迷惑をおかけしてしまって、本当に申し訳なかった。20時50分コミュニティセンターに到着。その瞬間、吐き気に襲われ焦って車を出た。荷物は新井さんと太田さんが持って行ってくれた。木戸先生に酔ったの？と言われた気がするが、満身創痍そのものだったので何も覚えていない。酔っていました。21時、スマホを車内に忘れたことに気づき、初めて通信機器のない夜を迎えた。21時41分、乾杯をし、ミーティングをした。22時から女子会をしてはしゃぎ、スマホがないことを心から悔やんだ。他愛のない話は23時半にまで続き、その日は23時40分ごろに就寝した。



10月30日（月）



6時ちょうどに目が覚める。というのも、村では何時間かに1回時間を知らせるチャイムがなるのだという。その1回目が6時だった。本来の起床時間は7時だったので、いささか早い気がした。二度寝をするには微妙なので、6時半ごろには全ての準備を終えた。先生方も起き始めたが、洗顔の効果があるパックをしたままだだったので、恥ずかしくて顔を合わせるのが非常に恥ずかしかった。この日は朝から春日神社に向かった。Iさんがお話をしてくださったが、この神社はかつて、このあたりに住む人々の共有地として機能していたそうだ。主に米を置くなどしていたという。集落単位での人助け、ということらしい。村単位での互助が成り立っていたということだろうか。自分のことより村のことを優先する精神はここでも感じられた。その後、車で数分移動し、カスミソウを主に取り扱う農協に向かった。移動中の車内で、私はIさんにいくつか質問をした。村の人は何を大事に生活しているのでしょうか、と聞くと、それは聞いて見た方が良いということ

だった。確かにそうである。

農協へ到着。ここでは、農協の方が案内してくださった。その方によると、カスミソウ栽培に従事している方は、ここに来て花を置いていくのだという。ここから全国に発送していると聞いて、地元でも取り扱っているか気になった。そして、この建物は村と生産者の方々によって建てられたものと聞き、建造物のコストに対して、村のカスミソウ栽培の新規就労者を募集しており、早期退職者などの年配が集まってきているようだ。少しずつではあるが、若い人も増えているということも話してくれた。たくさんのことを農協の方に伺い、農協を後にした。車が見えなくなるまで手を振ってくれた。ありがとうございましたカスミソウ注文します。

10時33分、からむしの里に到着。ここではからむし織の体験をした。私はカスミソウに心を奪われたので、カスミソウを使ったアクセサリーを2点買った。体験が始まると、織姫さんが織機の使い方をレクチャーしてくれた。北海道を発つ前、新井さんと動画を見ていたので何となくはイメージしていたが、実際に見てみると複雑に思えた。織機に座る際、太ももがとんでもないことになりそうだな、と思って織機を壊さないか不安だった。不安げにしていると、苧麻クラブの方が「去年来た村上くんも大丈夫だったから平気だよ」というフォローをしてくれた。とはいえ彼は細い。しかし心配していたよりもスムーズに座れて、謎の拍手が起きた。ありがとうございました。からむしを織っていると、わずか10cmほどのコースター作成ながら、とても難しかった。隣に新井さんが座っていたが、流石に綺麗に仕上がっていた。私はというと、端の部分がレースのように波打っている。やり直しはある程度きく、ということだったが、もう戻れないところまで来ていた。諦めてそのまま続行した。出来上がったコースターは、後日学校に届くということだったので、祖母にプレゼントすることにした。コースターを作り終えたが、まだ時間があった。隣のスペースを覗くと、すでに織り体験を終えていた面々が、織姫さんによる苧（お）うみという作業を見学していた。そこには、からむしが糸として出来上がっていく様子、が写真で解説されていた。その部屋に私1人になったとき、勇気を出していくつか質問を試みた。2年前神奈川から移住し、織姫さんになったAさんは、カラムシの魅力と今後の目標を話してくれた。もともとテキスタイルについて学べる学校に通い、布が好きになったAさんは、布を作る糸を知りたいと思い、独学でたくさんの資料を集めたという。その中でカラムシと出会い、

織姫募集に応募した。Aさんの思うカラムシの魅力は、全ての工程が手作業で行われていること。その中で感じる人の力強さが魅力だと言っていた。今後の目標は、カラムシの畑を作ることと、それらを自分でまかなっていくこと。畑を守っていくことが目標だと語ってくれた。私は、それを話すAさんの目こそ、とても力強く感じた。からむしの里には多くの人々が来ているようで、話を聞いた限り東京から来ていた方や、他県から遊びに来ている方も多かった。その方々から見た村の魅力聞いてみればよかったな、と少し後悔している。

その後11時50分にはからむしの里を出て、12時5分に区役所についた。区役所では、保険福祉課長さんがお話してくださいました。名物だというソースカツ丼をいただきながら、お話を聞いていたので少し行儀が悪くなっていたような気がして申し訳なく感じていた。おおよその概況をお話ししていただきましたが、ご近所づきあいのツールとして家庭栽培が役立っているというのは、アパートやマンションに住んでいる人間にはなかなか馴染みのない話で面白かった。今こうして後になって思うと、聞けばよかったなと思うことがいくつかあった。即座に言葉にして何かを訪ねるというスキルを、あと1日で身につけたいと思った瞬間でもあった。聞いていて面白かったのは、お葬式のお話である。亡くなった方の遺体はすぐ自宅へ運ばれ、親類の男性の中で今後の手続きをどうするかを決めるといふ。女性はその間、集ってくる方とのまかないに取りかかる、というものだ。親族、関係者の招集は男性が執り行う。親族と常に関係を持っているからこそ、すぐに大勢の人を集められるのだろう。つまり、自分の役割が常にあるのだ。また、村は不便だとも言っていた。不便だからこそ、互助が発生し、人と人の温かさが生まれる。普請の存在も村にとっては大きく、集落に認められるためには普請に参加することが絶対的な条件となる。昭和村でのやり方は、都会では向かないとも言っていた。そしてここで初めて、結の精神の話聞いた。

14時ころからYクラブさんのお話を聞いた。次から次へと言葉があふれ、会話が止まらなかった。こういう会話から村の今後の方針が決まっていくと言っていた。なかなか質問するタイミングが分からなかった。村を保つこと、より良いものにしていくこと、その思いと真摯さはひしひしと伝わった。17次頃、夕食の準備に取り掛かり、19時ころから夕食込みの懇談が始まった。集落の方々と、より深い質問ができた気がする。何人かの方は私の名前を覚えてくださっていて感動した。少しあとからS社の方々にも参加していただきました。村で新しいこと始める、という難しさが伺えた。懇談は22時過ぎまで続き、23時半には片づけが終わった。その後1時間ほど学生数名で話し、就寝した。

## 10月31日(火)

誰よりも早く起きて準備を済ませ、全員が揃ってからミーティングをした。B班として何をするか、何を聞くかについて確認をする。全員静かだった。朝食を食べ終わり、片付けをしたあとはYクラブの方々がみえた。8時56分までお茶を飲んですごし、10時からお手伝いを始めた。体育館で行うゲートボール場の整備、ということだったが、触ったことのない器具ばかりで楽しかった。また、少しだけゲートボールもさせてもらった。簡単そうに見えてなかなか複雑なゲームだった。私は、自分でも驚くほどスポーツが苦手だ。本当は、ややしんどい空間になると思っていた。しかし、Yクラブの方々と、そして我々学生たち、先生たちと、楽しく過ごせた。野尻マジックだと思う。

12時半ごろからお昼を食べ、13時半にSさんのお宅へお邪魔させていただいた。Sさんは、今まで出会ったことがないような優しい方だった。若いころに村から離れ、紆余曲折を経て長い人生のほとんどを、この昭和村・野



尻で過ごしていた。その貴重で、優しい時間の積み重ねが見れた気がした。私たちは、たくさんのお話しと、そして少しのお酒を頂いて泣きながら帰った。

17時ぐらいにコミュニティセンターへ帰ると、すべての準備が整っていて、先生と苧麻倶楽部のお二人に感謝しながらお風呂へ向かった。19時から宴会が始まり、たくさんの人から様々な視点のお話しが聞けた。中でも、娘さんを連れて来てくださった方のお話しは、村に住む上での新しい課題として発見となった。学生が各々発表を済ませると、Yクラブを代表して、お一人が想いを話してくれた。内心、出過ぎたことを言ってしまったような気がしていたので、申し訳ない気持ちで聞いていた。席に戻ると、皆さんが褒めてくださった。少し報われたような気がした。ほかにも、今までお話しを聞いてきた方々とは、少し違った意見も聞けた。角度が違っても、お話しの本底にあったのは野尻への想いだった。宴会が終わったのは21時半だったが、就寝したのは1時半だった。最近村に移住し始めたカスミソウに従事する女性が、非常に盛り上げてくれた。翌日、私たちがお酒が弱いなりに飲んでしまったので、何か変なことを言っていないか不安である。

## 11月1日(水)

4時に起きた。まだ暗く、誰も起きる様子がなかった。30分後にはすべての準備を終え、1人で寒さを感じていた。少しするとみんなが起き始めた。5時42分には、昨日の宴会の残った洗い物などを片付け、お借りしていた寝具も片づけた。6時にお迎えが来て、昨日の女性が本当に見送りに来てくださっていた。寒いのにありがとうございます、という気持ちで足元を見るとサンダルだった。その女性は車が見えなくなるまで手を振ってくれた。昭和村に住んでいる方は、見えなくなるまで手を振ってくれるんだなあと思った。

車酔いと戦いながら、Iさんの運転でおくっていただき、バス停へ。ここでも苧麻倶楽部のお二人は最後まで手を振ってくれた。うるっとした。PAで初めて牛タンを食べ、移動中ずっと新井さんと話していると、いつの間にか仙台空港へ着いた。本場のずんだシェイクを飲み、お土産を買うなど楽しく自由時間を過ごした。展望台に登って飛行機が飛ぶところを初めて見た。わずか十秒足らずで飛び立つ飛行機を見て、本当に帰るんだなあと思った。そういえばここでも新井さんと居た。道外に出ても一緒にいるの本当に何なんだろうと思った。その後飛行機に乗り、1時間ほどのフライトを終え、解散となった。

私にとってこのフィールドワークは、学生同士の仲が良くなった気がしたし、先生方の意外な一面を見れたことが嬉しかった。何よりも、私にとっては、大学生活における一つの挑戦だった。こうして振り返ると、失敗したと感じる場面のほうが多い気がする。しかし、過去の自分では、道外へ出て、全く知らない人たちと関わることは選択しなかっただろう。気持ちの面での成長、という意味で、このフィールドワークはおおいに意味のあるものになった。このフィールドワークで学びえたことを活かせるように努力したい。このような機会を設けてくれた先生方、協力してくださったすべての方に感謝したい。

## 高見知紗

### 10月29日(日)

10時30分に新千歳空港に集合だったため、太田さんと待ち合わせをして9時12分のバスに乗り、新札幌駅に向かった。新札幌駅に到着しJR乗り場へ移動をし、9時44分の新千歳空港の快速エアポートに乗った。10時12分ごろに新千歳空港に到着した。集合場所についた時には、すでに何人か来ており、みんな早いなと思った。全員が集合し、無事に保安検査を通過した。保安検査を通過し1時間ほど自由時間があつたので、とくにやりたいこともなかったため座ってスマートフォンを操作しながら充電をした。12時に飛行機に搭乗し、機内で配られたアンケート



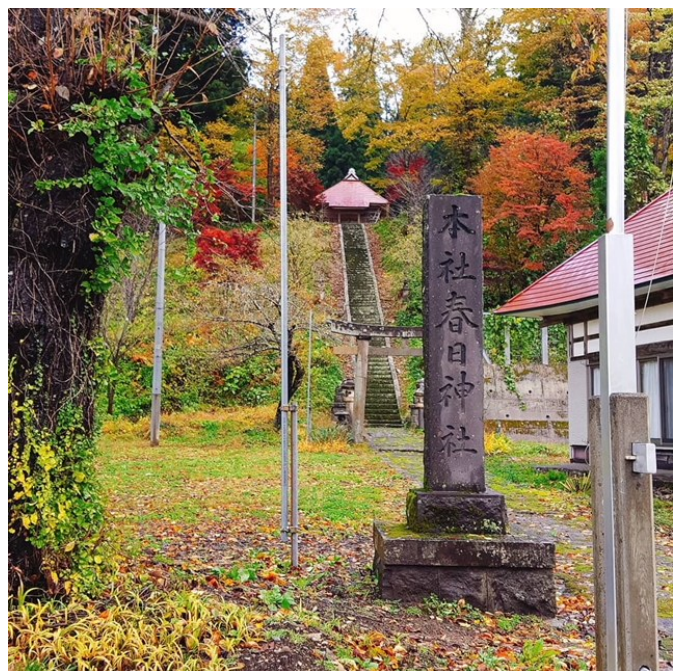
ートを記入し、仮眠をとった。13時15分に仙台国際空港に到着。バスまで時間があるのでデリーヤマザキで昼ごはんをサーティーワンのアイスクリームを購入。13時55分発の仙台国際空港から会津若松へ向かう高速バスに乗車。高速バスに乗り、昼食をとり、すぐ眠りについた。途中の国見サービスエリアにも気付かず福島県に入るまで寝ていた。福島駅でたくさんの乗客が乗り込んできて、荷物のせいで隣の席を譲ることもできず、申し訳なさからられた。その時、帰りは荷物を下に預けようと思った。また眠りにつき、17時半ごろ会津若松に到着した。

昭和村の方3人が、雨の中遠い会津若松まで来ていただき出迎えてくださった。その後、ラーメン屋さんで夕食を取り、メニューに迷いながらもつけ麺を注文した。遅めの昼食だったため、あまりお腹がすいていなかったが、餃子もたくさん注文していただいたため、ありがたさと申し訳なさで完食してしまった。夕食後、Gさんの車に乗り昭和村へ向かう。昭和村へ向かう途中、西山温泉で入浴。時間はあまりなかったが露天風呂も入ることができよかった。20時コミュニティーセンターに向かい出発し20時45分ごろコミュニティーセンターに到着。布団などを敷いて寝る準備をしてから、全員で振り返りを行った。長い時間車に乗っていたのに、あまり話を聞けてないと感じ、その時、明日はもっと聞けるようにしたいと思った。振り返り終了後、軽く学生同士で集まり食べて飲んで、すぐに解散した。去年の参加者からカメムシが多いと聞いて、不安に思っていたためなかなか寝付けなかった。

## 10月30日(月)

朝6時のチャイムで目を覚ましたが、そんなに早く起きても時間が余ると思い、二度寝をし、朝7時に起床し朝食の準備をしてサンドイッチとジュースをいただいた。8時40分ごろにコミュニティーセンターを出発した。昭和村に来て初めての朝はあまり天気も良くないせいか、寒く感じ、北海道と気温差は全く感じられなかった。むしろ昭和村の方が寒いのではないかと思った。

春日神社はコミュニティーセンターからとても近く話す暇なく到着した。春日神社を登って上から見た景色は紅葉も相まってとてもきれいだった。さいかちの木はパワースポットとも呼ばれているだけあり、見ているだけで何かパワーをもらえそうな感じがした。そこで30分ほど歴史などについてのお話を聞き、移動をした。かすみ草の出荷施設と雪室では、部屋の役割や、かすみ草について知ることができた。かすみ草の管理や、育てる環境は想像していた以上に大変だと感じた。昭和村は雪の量も多いため、その雪を利用して温度や湿度調整を行ってかすみ草の管理をしていることがわかった。自然を利用して行っているため、環境にも優しいなと感じた。



染めかすみもレインボーカラーなど30色近く染

めることができると知り驚いた。ここのかすみ草は、南は沖縄まで行くのに北は北海道までいかないということに少しショックを受けた。北海道の人にも、昭和村のかすみ草を知ってもらいたいと勝手ながら感じた。からむし織の体験は行く前から楽しみにしていたので、体験できてよかった。体験する前、ショップでアクセサリやお土産を見て、からむし織のアクセサリも、かすみ草のアクセサリもあることをここに来るまで知らなかったのが、かわいくて感動をした。せっかくだからと思い、アクセサリ2点を購入した。からむし織の体験をして、最初力



加減がわからず、織り目が粗かったが、教えてくれた人が、「終わりも織り目を同じようにしたら模様みたいでいいね」と言っていただき、このように模様のようにもできるということが分かった。また、たまたま途中で糸が終わりを迎え、新しいものを一緒に織るやり方を教わり、貴重な体験することができた。保健福祉課の方にお話を聞きながら昼食をとった。昭和村に行く前から楽しみにしていたソースカツ丼をいただいた。名物のソースカツ丼はとて肉厚でソースの濃さも程よく、とてもおいしくてお腹に余裕があれば、お代わりをしたいと思います。

コミュニティーセンターに戻り、Yクラブの方々に集まっていただき、お話を聞いた。保健福祉課の方やYクラブの方々のお話を聞いて、昭和村の人々のかかわり方や、自然についての考え方、人間関係の濃さがわかった。保健福祉課の方のお葬式の話は特に印象的で、昭和村の人々の人間関係を表していると感じた。Yクラブの方々の話を聞く前は、どのようにしてメンバーになるのか気になっていたが、生まれたらすぐメンバーとなり、区分として自治会ではないということが話を通して理解できた。

昭和村にきて初めての交流会を行った。用意していただいた夕食の数がとても多く、準備も大変だったが、みんな楽しく食べることができてよかった。交流会では、昭和村に行く前から会いたかった人にもお会いでき、お話を聞くことができた。最初は何の話も聞こう、こんな話を聞きたい、などいろいろ考えてはいたが、うまく聞けなかったことが、少し心残りとなった。明日の交流会では、もっと自分から話しかけようと思った。しかし、昭和村の皆さんが気さくに話しかけていただいたため、楽しい交流会になったと思う。以前から飲んでみたいと思っていたどぶろくもいただけて嬉しかった。思っていたよりも味がおいしくて、飲みやすいと感じた。片づけをして交流会が終わり、今日も学生で二次会を行った。昨日よりも遅くまで飲んだり話したりしていたため、次の日に響くのではないかと心配をしながら、2時半ごろに就寝した。

10月31日(火)



この日は、チャイムの音が全く聞こえず、この日もきっちり7時に起床し、朝食の準備をし、7時半に朝食をいただいた。連日の早起きと、夜更かしのせいで、この日の朝は一段と辛かった。8時40分ごろYクラブの方々などが集まってきて少しお話を聞かせていただいた。9時からコミュニティーセンターの横の体育館に集まり、体育館のライン交換などをさせていただいた。釘を抜いて新しい線に交換するのは想像以上に力仕事だったが、楽しいと感じた。その後、A班とB班に分かれて雪囲いと体育館の整備に分かれて活動した。私は雪囲いの仕事をさせて

いただいた。雪囲いは何度かやったことがあったが、脚立に乗って、高いところをやるのは初めてだったため、新鮮味があって楽しかった。みんなで体育館の雪囲いをして、完成した時は達成感も得られた。雪囲いが終わりゲートボールを楽しんだ。ゲートボールは今回が2回目だったが、ルールを把握しておらず、ルールややり方を聞き、ただゲートに通せばいいというわけじゃないとわかり、奥深い競技だと感じた。練習では高確率で1番のゲートを通し、本番もうまくいくと思っていたが、本番では、30分間1度もゲートを通らずに終了してしまった。そのため、もう一度やりたいと思ってしまった。昼食の時間になり、コミュニティーセンターに戻った。長時間寒いところにいたためかお腹の調子が悪くなってしまったが、昼食のお弁当はおいしくてしっかりといただいた。

13時40分ごろ女性の方にインタビューを行うため、その方のご自宅に伺った。コミュニティーセンターからとても近く、家まで先導してくれた男性の後を追って走りながら伺った。伺った先は商店であった。先ほど先導していただいた方の話も聞いて、やはり村人同士の繋がりの深さを実感した。他人でも、その人の家族関係や今何をしているかなども把握していることが感じられた。インタビューをし、大人数で家まで行ってしまったのに、家にあるものを出してくれて「食べる～」と言っていたいたり、「もっと早く来ること知っていたら、おもてなしできたのに」などと言っていたり、とても暖かい気持ちになった。この方は、子どものころから、人の出入りが多い家で育ってきたため、今でも人が来ることに抵抗がなく、村人以外の人に来て、むしろ嬉しいと感じていることがわかった。また、一度知り合ったらその関係がずっと続いていくという話を聞き、話す言葉に嘘がなく、嘘をつかずに心から歓迎をしているから、人間関係も続いていくのだろうと感じ、私もそのような人になりたいと思った。インタビューが終わり帰る時、外に出て、私たちが曲がり角を曲がり見えなくなるまで、ずっと手を振り続けてくれており、みんなで、「今別れたばかりなのにもはや会いたくなった」などと話しながらコミュニティーセンターに戻った。

コミュニティーセンターに戻ると、すでに夕食の準備をさせていただいており、ありがたさと申し訳なさでいっぱいになった。班ごとに分かれ、「昭和村に来てどんな発見があったのか」、「野尻地区がどういう風に見えたか」、「後どのようにすればいいのか」について話し合った。話し合いの中で、思いやりや繋がりが強く、おもてなし精神が強いこと、会話が多く人見知りをしないということがわかった。何よりも村が好きという思いが伝わってくるということを改めて感じる事ができた。

温泉から帰ってきて、18時ごろ昭和村の方々コミュニティーセンターに来ていただき最後の交流会が始まった。交流会が始まり、少し時間がたったところで、プレゼンテーションが始まった。プレゼンテーションでは、私たち

の班はメンバーが5人いたため、2人役割がなくその中の一人が私だった。私は人と話すのは好きだが、人前で話すのはあまり得意ではないため、その時は役割がなくて嬉しいと感じたが、発表中や他の班の発表を聞いて、せっかくの機会だったから少しでも発表すればよかったと感じ、少し後悔をした。プレゼンテーションが終わり、本格的に交流会に入り、交流会では、おもに3人の方とお話をさせていただいた。そこで、私がゼミで扱っているテーマについても聞くことができた。昭和村の人はほぼ農家に携わっている人が多く、農業の人の年金は国民年金保険だが、周りからものをもらったり、自給自足で食べ物をまかなったりできるため、国民年金でも生活できるということがわかった。また、昭和村は最上流に住んでいるため、水を汚したり、無駄にしたりしないということがわかった。この水は新潟県にまでつながっているため、きれいな水を下の集落の人に渡せるようにという責任があるということがわかった。雪や雨が少ない時でも、下の集落のことを考えて、水を使いすぎたりしないなど、自分たちさえ良ければいいという考えはなく、このことから昭和村の人たちは他県のことまで考え、思いやりや譲り合いの精神が強いということが改めて感じられた。

二次会では、村の方2人が残っていただき、歳が近かったため話が盛り上がり、交流会の続きを楽しんだ。2次会が終わって寝る時、「これで最後だ…」「楽しかったな〜！」などいろいろ考えていたせいで3時ごろまで寝つけなかった。しかし、3日目にもなるとカメムシのことをまったく気にせず、眠りにつけたことに驚いた。

## 11月1日(水)

朝5時に起床し、部屋の片づけをし、帰る準備をし、6時に昭和村を出発した。最終日は昭和村に来て初めて天気が良かった日だった。6時に出発し、景色を見たり写真を撮ったりして昭和村や周辺の景色を楽しんだ。途中コンビニに寄り朝食を買っていただき、車の中でいただいた。7時45分バス乗り場に到着し、バスの到着まで25分ほど待った。バスが来て、行き反省を活かし荷物を下に預けることができた。バス乗車前に昭和村の方々に別れを告げ、本気でまた昭和村に行きたいと思った。バスが出発してもずっと手を振っている姿が印象的だった。帰りのバスも国見サービスエリアで休憩があり、有名な凍天と肉まんを買って食べた。凍天は、北海道の中山峠の揚げ芋によもぎ餅が入った感じだと食べていて思った。その後、仙台国際空港まで仮眠をとった。11時30分ごろ仙台国際空港に到着し、14時まで自由時間を過ごした。お昼は牛タンが食べたいとなり、6人で牛タンのお店を探し回ったが、どこも価格が高かったため、諦めて北海道でも食べられるレストランに入り昼食を取った。昼食後は、お土産を購入したり、スカイテラスで飛行機を見たりして過ごした。仙台国際空港駅で、目的を果たそうとしたが、できずに少し残念だった。待ち合わせ場所に集合し、木戸先生から萩の月をいただいた。萩の月を家族へのお土産として購入したが、私は食べられないと思っていたので、うれしい気持ちになった。14時に保安検査を通過したが、14時25分までは自由だったため、スマートフォンの充電をしながら搭乗時間まで過ごした。14時40分に出発し、4日間の疲れのせいか、離陸後すぐに眠りについてしまった。15時55分に新千歳空港に到着し、預けた荷物を受け取り16時15分に空港で解散となった。帰りも太田さんと帰り、17時半ごろに自宅に到着した。

**松田みなみ**

## 10月29日(日)

9時半過ぎに父の車で恵庭駅まで送ってもらい、JRで新千歳空港に向かった。1階のローソンをすぐに見つけられるか不安だったが、すぐに見つけられた。早く着きすぎて誰もいなかったのしばらく待っていると、佐藤さんと由良さんに会って安心した。集合時間までに全員が集合場所に到着し、10時半にチェックインした。11時40分まで自由時間になり、暇だったので由良さんと空港内を歩いていると、カフェを見つけソフトクリームが気になっ

た。佐藤さんと川村さんに会い、4人でソフトクリームを食べた。搭乗場所の近くに戻って何人かで話しているうちに搭乗時間になり、飛行機に乗った。これからの実習に不安を覚えながら音楽を聴いていると13時頃に仙台空港に着き、ソースかつおにぎりや塩焼きそばを買った。2時ごろ会津アピオへ向かう高速バスに乗ると、5時に到着すると言われ、あまりの長さに驚いた。仙台の風景を見ながらバスは進み、15時頃休憩でパーキングエリアに寄った。本当にあと2時間もかかるのかと思い、ついつい時計を見てしまった。バスの中では隣の席の由良さんと話したり、携帯をいじったりしていた。17時15分、到着地のバス停で降りると、外では雨が降っていた。

バス停で苧麻倶楽部の方が待っていてくださり、近くのラーメン屋に入った。煮干し醤油ラーメンの他、先生方が餃子を頼んでいいよと行ってくださったので餃子を食べた。余っている餃子も食べたので満腹になった。温泉までは苧麻倶楽部のGさんが送ってくださった。車内ではその日に村でバレーボール大会が行われていたことを教えてもらった。中学校には昔バレーボール部と卓球部があったそうだが、人数が減り今では卓球部しかないそうだ。Gさんにもっと深く話を掘り下げて聞きたかったが、人見知りを発揮して全然質問できなかった。車内が沈黙する中、19時温泉に到着した。温泉の営業時間が8時までらしく、大慌てで入浴した。急ぎながらも温泉につかっていると、移動の疲れが癒された気がした。温泉やコミセンに向かう道はカーブが多く、酔わないように気を張っていた。

9時前にコミセンに着くと、区長さんがわざわざコミセンに挨拶に来てくださっていて、村の人の優しさを感じた。荷物整理を軽くしてから、軽くミーティングしてどんな話を聞いたか話した。ミーティング後、何人かでお菓子を食べながら他愛もない話をして、11時半ごろ就寝準備をして布団に入った。台風の影響で雨風が強く、なかなか寝つけず1時頃にやっと眠りについた。しかし、寝坊したらどうしよう、など不安も強く何度か目が覚めてしまった。

## 10月30日(月)

6時に鐘の音で目が覚めたが、携帯のアラームまで時間があつたのでとうとうとしていた。アラームが鳴り、身支度をして7時半に村の人が用意してくれたパンとジュースで朝ごはんを食べた。布団を片づけたり、今日の予定を確認しているうちにGさんとIさんが迎えに来てくださった。



8時40分にコミセンを出発し、コミセン近くの春日神社に向かった。階段が長く、上まで行くのに息が上がってしまった。小さな鳥居が奥にあり、昔は何かを祀っていたそうだ。そこで水たまりにはまり、靴下と靴が泥で汚れてしまった。春日神社の階段を降りるとき、景色がとても綺麗で写真を撮った。春日神社を出たあとは、雪室に連れて行ってもらった。雪室とは、カスミソウを冷やすために雪をいれる施設である。そこで、JAの斎藤さんにJAの施設を見学させてもらいながら話を伺った。実際に出荷予定の染めカスミを見せていただき、普段見るカスミソウよりも一つ一つの花が大きく、綺麗で感動した。また、雪室を村の方たちに開けていただき、中に入った。カスミソウを雪で直接冷やすとおれてしまうが、隣に部屋があり外気

と混ぜてカスミソウを冷やしているという。雪室の高さは15mぐらいで、冬は雪室いっぱい雪を入れると聞き驚いた。さらに、雪室に運ぶ雪が足りなくなったことが1回しかないというお話から、昭和村の雪の多さを想像させ

られた。雪室を出たあとは、道の駅からむしの里へ向かった。軽くおみやげを見たあと、コースター作りを体験した。説明を受けた際、織るとき手と足の動きが違うので難しそうに感じた。コースターを作り始めた最初は手と足がうまく動かず混乱したが、指導して下さった元織姫の方にアドバイスをもらい、慣れてからはミス無く完成させることができた。コースターが完成したあとはおみやげを見て、母がからむし織がどういうものか気になっていたことを思い出し、母にからむし織のキーホルダーを買い、新井さんと梅のお酒が気になると話し、半額ずつ出して梅のお酒も買った。カスミソウやからむしのアクセサリーも売っていて、とても可愛かったのもっと広めれば昭和村の知名度も上がるのに、と感じた。

道の駅を出たあとは保健センターへ向かった。保健福祉課長と役所に勤めている I g さんに昭和村での高齢者福祉の話の伺った。昭和村での生活は、隣に住む人に一緒に病院まで乗せてもらい、乗せてもらった人が夕飯のおかずをおすそ分けしてあげるなど不便だからこそ近所づきあいが多いという。また、「お茶飲み」という習慣がついて、村の人が気軽に集まれる機会が多いという話を伺った。お話を伺っている途中に「やまか食堂」のソースカツ丼が届いて食べながら本名さんに質問した。初めてソースカツ丼を食べたが、とてもおいしかった。量がとても多いと聞いていたが、お腹がすいていたせいか思ったより多いと感じなかった。

お礼を言って保健センターを出たあとはコミセンに戻り、Yクラブの方々を迎えるためにお茶や茶菓子の準備をした。普段からお茶をいれられるようにしないと、いざというときに困るなど感じた。Yクラブの方が来てくださり、使わなくなって荒れた田んぼを整備して景観を維持したり、生きるものたちのすみかや昔のものを残そうというビオトープという活動のことを伺った。昭和村の方たちは、自分たちで何かをやろう、という意識や村を自分たちで守ろうという意識が強いと感じた。ご飯を食べた後ということもあり、制度や産業の話は難しく、話についていくのが大変だった。4時までの予定が大き過ぎてしまい、大慌てで温泉へ向かった。前日とは違う温泉で、急ぎながらも露天風呂に浸かりながらフィールドワークのメンバーとゆっくりと話す時間が楽しかった。

6時ごろコミセンに戻ったあと、夜の宴会の準備をした。ミルフィーユ鍋、たこ焼き、アヒージョ、炊き込みご飯に役割分担をして作業をした。自分は人見知りで初対面の方とご飯を食べるのが苦手なので、作業しながら緊張していた。7時に宴会が始まり、自分はS社の方の隣に座った。学生時代の話などをしたが、最初は緊張や人見知りで移住のことについてなかなか深く聞けなかった。宴会が進んで、村での生活のことを伺った。村の方から野菜の保存の仕方や知恵を教えてもらっているという。野菜を売っているところは知っているも、作っている過程を知らない人が多い、という話を聞き納得した。宴会が終わったあとは、みんなで片づけをした。8人もいたのできばきと進み、お酒も入っているのでみんなテンションが高かった。ある程度明日の準備を済ませたあと、何人かでお酒やジュース、お菓子を食べながら今日のことや普段のことなどいろいろな話をした。12時半を目安に、と言っていたのに少し過ぎてしまい、大慌てで片づけて布団に入った。

## 10月31日(火)

前日遅くまで起きていたので、前日ほどすっきり起きられなかった。何人かが身支度が終わっている中、ゆっくり起きて身支度をし、昨日の宴会の残りを朝ごはんとして食べた。先生方が朝ごはんの準備をしてくださっていて、申し訳なくなった。みんな昨日の疲れが取れていないのか、前日の夜と大きく違いとても静かだった。

8時半ごろ身支度を済ませ、作業をするためコミセンの隣にある体育館に歩いて行った。体育館は中に土が入っていて、ゲートボールや冬でもソフトボールの練習ができるようになっていて、いろんな利用価値があると伺った。最初はゲートボールをするために線を引き直す手伝いをした。途中からコミセンの窓の冬囲いをする事になり、体育館を担当するグループと冬囲いをする班に別れた。冬囲いは昔父がやっていたのを見ていたので、懐かしくなり楽しく作業した。体育館の玄関の冬囲いは複雑で時間がかかり、Yクラブの会長さんがアドバイスしてくださり



なんとか完成した。昔の知恵が若い人に受け継がれているのを感じた瞬間だった。11時頃作業が終わった後、体育館でゲートボールをした。全員がゲートボールをするのは初めてで、練習で第一ゲートをくぐるのすら時間がかかった。試合は負けてしまったが、Yクラブの方々が熱心に教えてくださったおかげで楽しい時間を過ごした。ゲートボールのルールは思っていたよりも複雑で、自分のことだけではなくチームメイトのことや相手チームのことも考えるため頭を使うので、ゲートボールをしていたらボケないと感じた。

試合が終わった後は12時半頃コミセンに戻り、「やまか食堂」のお弁当を食べた。村の食材を使っているようで、おいしいお弁当だった。Iさんが「学生が多いから揚げ物を多めにしてほしい」と伝えてくださったそうで、「やまか食堂」の方は村の誰が何を食べられないかまで把握している話をしてくださった。

お昼を食べたあと、予定では昭和村の方のお宅を訪問し、お話を聞くグループと夜の宴会の準備をするグループに分かれ、交代で役割分担することになっていた。しかし、お話をしてくださる方が二回も同じ話をするのは疲れてしまうのでは、ということになり、8人全員でお宅訪問してお話を聞くことになった。Tさんがその方に連絡をとって許可を取ってくださり、13時40分頃家まで連れて行ってくださった。どんな人なのだろうと緊張しながらお家に上がった。お話をしてくださったのはW商店（Sさんの苗字）という商店を開いているSさんという方で、突然訪問したにも関わらずとても気を遣ってくださった。私たちが足を崩さずに座っていると、そんなに硬くならなくていいよ、とこたつに足をいれていいよと言ってくださった。さらに、お茶を出してくれたり、みかんやお菓子を話しながら食べて、と出してくださった。Sさんの生まれ、お子さんの話、日々の生活、昭和村の仕事や子育てのことなど様々なことを聞いた。途中で赤飯とからあげとぜんまいの煮物を出して食べてと言ってくださり、あまりの優しさに学生みんな感激した。Sさんの手料理はとてもおいしく、とても温かい方で毎日人がお家にやってくる理由が分かった気がした。さらに、とても美味しいマルメロ酒や梅酒もいただいてしまった。気がつくや二時間半ほどSさんのお宅にお邪魔していて、別れ惜しかったが挨拶をした。帰り際、W商店で売っていたチョコを購入した。私達がコミセンに帰るときもずっと手を振ってくださり、あまりの優しさに本当に泣きそうになった。

16時頃コミセンへも戻ると、宴会の料理の準備はIさん、Gさん、先生方がやってくださっていた。少し落ち着いたところで、ミーティングをして、来週までの宿題と宴会で昭和村に来て気づいたこととこれからの昭和村をより良くする提案をチームごとに発表する、という連絡があった。お風呂に行くまでにチームごとに話し合い、私たちのチームは村の人同士の繋がりや感謝の気持ちが強い、高齢の方が若々しく、活気があるなどの意見が出た。そして、道の駅で見たカスミソウのアクセサリーがとても綺麗だったので、ホームページに載せたらそこから昭和村を知るきっかけになるのではないかと、地元の人が案内してくれるツアー、多くの人が目にするとことに広告をするのはどうかという意見が出た。

17時頃温泉へ向かい、昨日よりも時間があつたのでゆっくりすることができた。温泉につかりながらみんなと他愛もない話をして、あつという間の3日間だったとしみじみした。ロビーでも時間があつたためテレビを見ながらココアを飲みながらのんびりして、少し疲れが取れた気がした。18時頃コミセンへ戻って軽く発表の打ち合わせをして、18時半頃宴会が始まった。鍋を食べながら村長さんから今までの昭和村の産業などの話を聞いた。発表は宴会の途中と聞いていたので、食事をしながらも緊張していた。Aチームの発表の時間になり、村の方の前に立つのはとても緊張してあがりそうになったが、チームのメンバーみんなで発表したことで落ち着いて昭和村に来て気づいたことを発表することができた。無事発表が終わり、Yクラブの会長さんや村長さん、昭和村の方々がとても喜んでくださっていてほっとした。発表が終わってから村長さんや他のYクラブの方に話を聞いていて、少し落ち着いたころ、宴会が始まる前私達と同世代と思われる女性がいることに少し驚いたので、話を聞いてみたいとすごく思った。その話を同じテーブルにいた太田さんと由良さんとしていると、その方から私達がいたテーブルに来てくださって話を聞くことができた。その方はMさんという名前でも22歳で私達ととても年が近く、さらに村に引っ越

してきたばかりとのことで驚いた。その方がなぜ昭和村に来たのか、昭和村に来る前は何をしていたのか、村に来て感じたことなどを質問した。途中で宴会の終わりの時間が来てしまい、MさんやMさんと一緒に来ていた方が片づけを手伝ってくれたこともあり、あっという間に片づけが終わった。布団を敷いたりある程度片づけたあと、先生方と学生とMさん、Mさんと一緒に来ていた方で二次会をした。とても盛り上がったが次の日の朝が早いので、12時半ごろ切り上げた。Mさんはとてもフレンドリーな方で、次の日の朝見送りに来るよと言ってくれた。布団の中で明日で昭和村を離れるのかと思うととても寂しくなり、なんとなく寝たくなかった。

## 11月1日(水)

5時に先に準備をしていた人たちが電気をつけてくれて目が覚めた。お酒が抜けていないのと寝不足でとても眠かったが、眠たさをこらえて準備した。自分が準備をしている間にみんなが部屋の片づけをしてくれていて申し訳なかった。片づけがだいたい終わり、GさんとIさんを待っているとMさんが来てくれた。本当に来てくれて驚いたし、朝早くから見送りに来てくれた優しさに感激した。GさんとIさんが到着し、コミセンの前で写真を撮ってみらいさんにお礼を言って車に乗り込み、6時頃村を出発した。昭和村の風景を見ながら、3日間の実習を思い出してとても寂しくなった。その日の朝の昭和村は霧がすごくて、紅葉も色づき始めていたので窓から見える風景がとても綺麗で写真を撮りたくさん撮った。お酒が抜けきっていないことや寝不足が重なり、村に行くときには急カーブでも全く酔わなかったのにだんだんと気持ち悪くなってしまい、アピオまではまだまだなのに酔いたくないなど思っていた。一時間ほどしたころコンビニに寄り、朝ごはんにおにぎりを買ってもらった。空腹も車酔いに関係していたのか、おにぎりを食べると気持ち悪さは治まった。7時45分に会津アピオに到着し、写真を撮ってバスが来るまで寒い外で15分ほど待った。



バスに乗り込むとき、お世話になったIさんとGさんにお礼を言うと本当に寂しくなり悲しくなった。2人はバスが出発するまで見送ってくださった。バスに乗り込んで3日間のことを思い出しながらぼーっとしているうちに寝ていて、あっという間に空港に到着した。3時間ほど自由時間があつたので、お昼を食べ、お土産を見て、屋上にも登ってみたいと空港内を散策した。集合時間になったので場所へ向かうと、木戸先生が1人に1個ずつ萩の月を渡してくださいました。保安検査場を抜けて少し飛行機に搭乗し、14時半に離陸して20分ほど寝たので新千歳空港までがあっという間に感じた。飛行機から空港まではバスに乗り、夕焼けがとても綺麗だった。4時半ごろ空港内に入って解散した。

由良綾音

## 10月29日(日)

10時30分に新千歳空港1階のコンビニ前で集合であった。今回は飛行機での移動である。私は、集合時間の1時間前に到着していた。時間をつぶすため、空港内をふらふらと散策したが、1番の目当てのお店は開店前で、残

念な気持ちであった。そうこうしている間に、集合時間が近くなったので、1階のコンビニに向かい、みんなを待っていた。徐々に集まりはじめ、時間ぴったりに全員が集合をした。予定通りに行動ができ、これからの4日間は安心だと思った。

保安検査を通過した後、1時間ほど時間があつたので、待合所の中を歩いていた。想像していたよりも中は広く、フードコートやお土産屋、カフェなどがあり、驚いた。少し気になったカフェに入ってソフトクリームを食べた。コーヒー味とミルク味のミックスのものを食べた。建物内が少し暑かったのもあって、よりおいしく感じられた。食べ終わって少ししてから、搭乗の案内がわかり、我々は飛行機に乗り込み、定刻通りに北海道を出た。自分がプライベートで同じ会社の飛行機に乗ったときはトラブルがあり、定刻に出発しなかったことがあったため、心配していたが、今回はそんなことがなく出発できたことに心底安心した。

フライトの時間は1時間と短く、13時15分には仙台空港に降り立っていた。空港内には、ゲートを出て1番最初に目につくところに、東北地方の地図の看板が立っていた。それに感動し、写真を撮っていると、みんなの興奮する声が聞こえてきた。みんなの向いている方向に目をやると、どうやら北海道にはないコンビニに感動しているようだった。私もメディア以外で見るのは初めてだった。昼食を買っていなかった私は、みんなの後について行って、そのコンビニに入った。コンビニには、仙台ならではの商品がいくつも陳列してあつた。私はその中でも、味噌カツが乗ったおにぎり、コンビニに売っているのが新鮮だと感じるメーカーのアイスクリームを購入した。

13時55分、会津若松行のバスに乗車した。そして、先ほど買ったアイスクリームを食べた。食べながら聞いたバスのアナウンスに驚いた。なんと、我々の目的地である、会津若松には、17時18分頃に到着予定だと言う。来る前の講義内で予定は把握していたが、それでも驚いてしまうほど衝撃は大きかった。北海道でも目にする機会はあるような、いわゆる、田舎の道をしばらく進み続け、15時05分頃、途中休憩所である国見SAに到着した。雨は降っていたが、外の空気を吸うため下車し、お土産コーナーをのぞいた。時間の関係で買い物はできなかったが、様々なお土産が売っていて、楽しかった。10分の休憩を終え、またバスは走り出した。だんだんと辺りが暗くなりはじめ、隣に座った友人との会話もなくなった頃、目的地に到着した。17時10分と予定よりは早く着いたが、もうすでにへとへとであった。気温は北海道と比べると暖かかった。天気は雨であった。バス停からすぐのところにあるショッピングセンターの駐車場で芋麻倶楽部方々と落ち合い、17時15分頃、ラーメン屋で夕食をとった。

18時30分頃、夕食を食べ終えた我々は三手に分かれ、車に乗り、入浴施設に向かった。景色はだいぶ暗くなっていた。街灯と街灯の間隔が徐々に広がり、しだいに、灯りは車のヘッドライトのみになった。きっと晴れていたら満点の星空が広がっているのだろう、と予想できるほど辺りは真っ暗であった。1時間ほど走って(体感ではもう少し走ったように思ったが)、目的の入浴施設に到着した。20時に閉店する予定だと聞いて、残された30分でどうにか入浴を終わらせた。予定通り入浴施設を出て、宿泊するコミュニティセンター(以後コミセンと表記する。)に到着したのは20時40分頃だった。到着して施設利用にあたっての諸注意事項を受け、21時30分から22時頃までミーティングと反省会を行い、2時間後の24時頃に就寝した。移動の疲れのため、すんなりと眠りに就いた。

## 10月30日(月)

キーンコーンカーン…!という大きめのチャイムの音で目が覚めた。寝てから数分しか経っていないと思っていたが、6時間ほど経過していたことに驚いた。7時30分の朝食に向け身支度を終わらせた。朝食は用意していたサンドイッチとジュースを食べた。朝食後、9時頃から春日神社を参拝し、昭和村の歴史について学んだ。1時間ほどお話を伺いながら風景を眺め、そこにあつたドラマを感じた。





その後、現地の名産品の1つである、カスミソウを保管してある倉庫へと向かった。そこでは、カスミソウ農家から運ばれたカスミソウを、販売する長さに切ったり、花の大きさに選別する工程を行っているようだ。ここで仕分けられたカスミソウが全国へと発送されるという。カスミソウをきれいに保つためには、温度と湿度の管理が欠かせないらしい。温度の管理のために、冬の間に降った雪を特殊な倉庫で保管し、冷気と外気を混ぜて、丁度いい温度、湿度に倉庫内を保っているようだ。花に直接風が当たらないように、冷気は、布の筒の中を通す工夫がなされていた。実際に使っている雪も見せてもらったが、想像を超える程の量で、遠くから運んだものではなく、その場に降り積もった雪を使っているそうだ。昭和村の雪の多さを思い知った。カスミソウといえば、小さめのかわいらしい白い花を想像するが、ここで扱っているカスミソウ

は、白だけではなく、赤や青、ピンク、紫などのような色を付けた大粒のものだった。特殊な色水にカスミソウをいけることできれいに染めることができるようだ。ぜひ結婚式で染めたカスミソウを使いたい、と思うくらい美しかった。

10時30分。カスミソウ倉庫を離れ、やってきたのは道の駅「からむし織の里 しょうわ」。現地のもう1つの名産品である、からむし織。からむし織体験がここではできる。織姫さんという、からむし織を学びに来ている女性に織り方を教わり、体験した。布を織ったことはなく、私は不器用なので、形になるものなのか、と心配していたが、ゆっくりであれば織ることができた。予想以上にすんなりとできたので、嬉しく思った。この織り機の音は日本の音100選にも選ばれているらしい。確かに、カタン、カタンとリズムよくなる音に私の心は安らいだ。からむしを織った隣の部屋には、違う織姫さんが実演で繊維を紡いでいた。短い1本1本を静かに紡いでいく様子は、美しく見えた。人が手作業で紡いだ繊維を、また手作業で織っていく。人と人がつながっている様子が素敵であると思った。

11時50分頃道の駅を出て10分後、村にある保健福祉協会に到着した。昼食の味噌カツ丼を食べながら村のことについてお話を聞いた。そこで、村についての1つの疑問であった、「買い物の行き方」について聞くことができた。買い物は、車で行くことになるらしいのだが、車を運転できない状態にある人は、車を運転できる人が買い物に行くときに一緒に行くのだという。代金をその場で支払わないタクシーの様になる。しかし、お返しをしないわけではない。お金で渡すのではなく、おかずや野菜などのおすそ分けや、家の仕事の手伝いをしてお返しするらしい。こうして、近所同士で自分のできることで相互に助け合って生活しているようだ。これが、この村でのコミュニケーションの形だという。1人暮らしをしていても独りではない。現在都会に暮らす人々の中には、同じマンションに暮らす住民ですら全員のことをよく知らない、という人々が増加している。しかし、昭和村は、村人全員が顔見知りだ。心を開き、素直な態度を示せば、孤独を感じることは少ないだろう、と感じた1時間半であった。

14時にコミセンに帰ってきた。14時30分から昭和村の結の精神というものを大切にしている団体の方々がいらっしやっ、お話をしてくれることになっているため、お茶の準備をすぐに開始した。数分後、お湯が沸き始めた頃、団体の方が予定よりずいぶん早く到着した。昭和村ではよくあることであるようだ。14時30分には、用事で

送れる、と連絡があった方以外の全員が集合していた。お茶の用意が完了してから本格的に懇談が始まった。「結」とはなにか、どのような活動をしているのか、昭和村に対する思いなど、様々なお話をしていただいた。中でも結についてのお話しが印象強く残っている。結とは、お互いに助け合う精神を持ち接している、という意味があるようだ。昭和村に来て、結という言葉を知らない時からそのような態度を感じていた。素敵な関係だと思った。

懇談が終了し、17時頃に、入浴施設であるしらかば荘へと向かった。昨日の施設とは別の施設だ。18時に施設を出るので、その時間までゆったりと過ごすことができた。18時10分。コミセンに帰ってきた我々は夕食の準備を始めた。メニューは豚肉と白菜を使ったミルフィーユ鍋、たこ焼き、2種類の炊き込みご飯、時間があればアヒージョ、そして、近所の方が持ってきてくださった煮物と漬物であった。ここにも昭和村の結の精神を感じた。

徐々に人が集まって来て、料理も完成したので食事と懇談がスタートした。私は、昭和村出身で、数年の村外生活を経て、また昭和村に帰ってきた男性に話を聞いていた。男性は昭和村の魅力について誇らしげに話していた。このとき、私は、村民のほとんどがこの村に深い愛を抱いているのだ、と感じた。自分も自分の地元は好きだが、この村の人々ほどではない。村の人からすれば当たり前前の感情かもしれないが、私は尊敬した。懇談会には、私が事前学習段階でとても気になっていた団体のメンバーも参加してくれていた。メンバーの1人がこちらの席まで来てくれ、話をすることができた。その人は祖父母の家が昭和村にあり、関東で仕事をしながら準備をし、こちらに引っ越してきたという。いわゆる、「孫ターン」というやつだ。少し話をしたところで食事会がお開きとなってしまい、深く聞くことができなかった。残念であったが、次の日、自分たちが帰る前日の晩にも機会があると思い、見送った。22時30分頃であった。

1時間後、片づけや寝る準備を終え、数人は先ほどまで食事会が行われていた部屋に残り、感想を言い合っていた。しかし、それはだんだんと、雑談へと変化していった。楽しく話していて、気が付いたら1時間ほど経過していた。明日の朝も早いということで、早めに切り上げるはずが24時30分まで話していた。慌てて就寝準備をし、25時に眠りについた。

## 10月31日(火)

6時の大きなチャイムの音で起きたものの、起き上がることができず、6時55分に起床した。慌てて身支度をした。朝食の準備は先に起きていた人たちが終わらせてくれていた。7時30分に朝食を食べ始め、8時20分に外に出る準備を始めた。この日は村の人たちと共に作業をする予定になっていた。予定の作業内容は、雪囲い。作業の説明があるまで私は木樹にロープを巻く作業とばかり思っていた。

9時30分。体育館の整備と冬囲いを行うために外へ出た。天気は雨で、冬囲いをできそうになかったため、体育館の整備に全員で取り掛かった。体育館の中はフローリングではなく、土のグラウンドのようであった。昔、床が抜けた時、思い切って土を入れたらしい。おかげで、体育館を取り壊すことなく使い続けることができるようになったという。さらに、室内で外のスポーツができるのでまさに一石二鳥であるとお話して



いた。体育館内ではいつもゲートボールを行っているという。そのゲートボールのラインを引きなおす手伝いを行った。

土で隠れてしまったラインをホウキで掃いて見える状態にし、1度ラインを剥がす。土をならして、もう一度ラインを引きなおす。そこまでやって、私たちに声がかかった。外が晴れたらしい。二手に分かれ、作業を行うこととなった。私は冬囲いの作業の方に回ることとなった。外に出ると村の皆さんが準備を始めていた。なにやら、長さが1mほどで幅が15cmほど、2cmくらいの厚さの板が4枚1組になったものを倉庫から取り出していた。私が想像していた形とは大きく異なっていて、戸惑った。どうやら、この板を窓枠にはめ込んでいく作業のことを冬囲いというらしい。雪の多い地域はこの作業が必要だという。友人によれば、北海道でもこの作業を行っている地域はあるみたいだ。私が住んでいる地域では行っていないため、新鮮であった。作業の様子を観察して実際にやってみた。1枚ずつ板をはめていく作業は思っていたよりも重労働だと感じた。建物の1階部分の窓全てに板をはめ終わると1時間ほど経過していた。一息ついて、体育館の冬囲いを終え、体育館の中に戻ると、グラウンドは綺麗に整備されていた。ローラーがけが最後の1周を終えたのを見届け、全員が拍手でローラーがけを終えた彼女を迎えた。

綺麗に整備された体育館で早速ゲートボールをしてみることになった。もちろん、私を含め大学のメンバーは初めてのゲートボールである。ルールや道具の使い方など一通りレクチャーを受け、ボールを打ってみた。私は運動が苦手であることも要因あると思うが、第1ゲートを通すことすら時間がかかってしまった。第1ゲートを通さなければゲームに参加できないらしい。しばらく練習して、ようやく第1ゲートをボールが通過した。順番にゲートを通し、相手のボールを邪魔したり、相手に邪魔されたりを繰り返してゲームは進んでいくのだという。説明を受けた後で我々は実際に試合をしてみることとなった。

くじでチームを5人ずつに分け、ゲームは始まった。試合時間は30分。背番号の順にボールを打っていく。第1ゲートを通ることが最初の課題である。15分後、みんながゲートを通し、第2ゲートをどのように通したら得点をとれるかレクチャーを受けながらゲームを楽しんでいた。私はというと、未だ第1ゲートを通せずいた。私と、先生を含む3人だけがゲートを通せないまま、みんなが楽しむ様子を見ながらボールを打つ順番を待っていた。残り2分。状態は変わっていなかった。私たち3人以外が得点を追加していた。私たちはこのときすでに、楽しかったね、とゲームの感想を言い合っていた。そして、試合が終了した。結局、1度もゲートを通すことができずに。私の所属していたチームが数点差で勝利したらしい。

13時10分頃、一緒に作業をした方々と共にお昼の弁当を食べた。20分ほどでおいしい弁当を食べ終え、お宅訪問に行く準備をした。A班、B班にわかれ、2軒のお宅にそれぞれ伺い、交替で夕飯づくりをする、という予定だった。しかし、1軒のお宅に訪問する、ということに変わった。なので、学生全員が一気に訪問し、夕飯づくりは先生方に任せることにした。

男性の運転する軽トラックの後を駆け足でついていく。運動不足の解消になるな、などと考えていたら、あっという間にお宅に到着した。そこは小さな商店だった。奥に1人の女性がいた。お家の主である。彼女は昭和村出身で、同じ村の男性と結婚したという。彼女には息子が2人いて、2人とも関東で暮らしているようだ。夫は他界し、現在は1人暮らしだが、息子と頻繁に連絡を取っていることと、村の人たちとの交流があるため寂しくないらしい。80分の訪問の予定が、居心地の良さで彼女のやさしさに甘えてしまい、気が付くと2時間を超えて話し込んでいた。このままここにいたい、という気持ちをぐっところえて、彼女のお家を後にした。

15時45分、コミセンに帰ると夕食の準備が終わっていた。1時間ほどミーティングをした。宴会の途中で我々から村に対してもっと良い村にするための提案を行う。ミーティング後、入浴施設に向かった。入浴を終え、コミセンに到着し、若干の時間的余裕があったので発表の最終チェックを各班で行った。その間に、村民の方々が徐々



に集まり始めた。18時30分。宴会が始まった。先生の忠告通り、我々は発表までの間、アルコールの量を抑えつつ食事を楽しんでいた。しばらくして、1人の男性が声をかけた。いよいよ我々の発表が始まる。その場にいた全員が、発表者の方を向き、真剣に話を聞いている。10分ほどの我々の発表が終わり、村野代表の男性にバトンタッチした。彼は真剣に、そして悔しそうに話し始めた。学生が指摘したことは最もである、もっとこの懇談会にも多くの参加者が来るべきだ。自分たちの村は自分たちで変えなくてははいけない。そのように話した。彼の眼にはうっすらと涙が浮かんでいるように私には見えた。

彼が自分の座っていた席へと戻り、一瞬の間の後また賑やかな宴会に戻った。発表が終わった私はホッと息をつき、アルコールを手を取った。それから、前日の夜詳しく話を聞くことができなかつたみなさんに話を聞きに行くため、タイミングをうかがいながら楽しく話していた。気が付くと、私の腕時計の針は10時を指そうとしているところだった。私は目を疑った。また不具合ではないのか？と腕時計の不具合を願ってスマートフォンの時計をさりげなさを装って確認した。そして、ため息をついた。そのとき、1人の男性が宴会の終わりを告げた。私は、がっかりした。先生方の挨拶を終え、全員の3・3・7拍子で宴会は終わった。

来てくださった皆様のお見送りをして片づけに移行した。明日の朝は早いから早く寝なくては、そういいながらもみんな名残惜しそうであった。1時間後片付けが終わった。結局、お客さん側であったカスミソウ栽培の若いペアも、ありがたいことに最後まで手伝ってくれた。それから、寝る準備をしていると、2次会の話が出ていた。そもそも、宴会で口を開けた缶のアルコール類は飲み干さなければいけない、という話をしていたのだが、それが発展したらしい。そして、1番乗り気なのが、カスミソウ栽培の女性だった。年齢が我々と近いということで意気投合したカスミソウ栽培の2人を含め、我々は2次会に踏み込んだ。1時間ほど飲んで騒ぎ、そろそろ我々学生の睡眠時間が心配になってきたのでお開きとなった。カスミソウの女性は我々が出発する朝、見送りに来てくれると酔った勢いで約束してから帰っていった。

寝る準備を終え、布団に入ろうとした。しかし、違和感があり、辺りを見回した。私がすぐに寝られるように、と2次会前に用意しておいた寝具がそこにはなかった。やられた。カスミソウのお姉さんだよ、という友人たちからの告げ口により、犯人が明らかになった。学習発表会の小道具のようにステージに上げられた寝具をもとの場所に戻してから私は布団に入った。25時くらいになっていた。ああ、ハロウィンだったのか…などと考えているうちに眠りに就いた。

## 11月1日(水)

ガサガサ…などという音が聞こえる。すると突然電気が点いた。突然の明るさに困惑していると、友人が寝ている数人に向かって大きな声で朝を知らせる。そうだ、いつもより1時間早く起きなければいけなかったのだ。急いで身支度をする。

身支度と公民館の片付けが完了したころ、我々をバス停まで送ってくれる2人が到着した。挨拶をしていると、もう1人の人影があった。カスミソウ栽培の女性だった。私は驚いた。冗談だと思っていたので、本当に来てくれるとは思っていなかったのだ。とても嬉しかった。

いよいよ出発だ。外は霧がかかっていた。美しいと思った。朝早くに来てくれた彼女にお礼と別れを告げ車に乗り込む。発車と同時にいつものチャイムの音が鳴り響いた。長い峠道を下る。朝日が照らす川や山はとても美しかった。1時間ほど走り、コンビニに到着した。朝ごはんを購入し、すぐに出た。もうすっかり日が昇っていた。7時45分。バス停近くのショッピングセンターに到着した。8時08分のバスが来ればお別れとなる。集合写真を撮り、15分ほど待つ。寒いなか待っていると、1台のバスが到着した。2人に感謝と別れを告げバスに乗り込んだ。見えなくなるまで見送ってくれた。バスは3時間の道に行く。

人の乗り降りの音で目が覚めた。途中休憩の国見 SA に到着したようだった。トイレを済ませて出てくると、友人が心配したようにジェラートを分けてくれた。体にすうっと染み入り、疲れが和らぐのを感じた。そして、そんなにひどい顔をしていただろうか、と思いながらバスに戻り、もう 1 度眠った。11 時 30 分頃、仙台空港に到着した。集合は 14 時だったので、それまで自由時間である。我々はまず、昼食をとることにした。仙台といえば牛タンだと思い、様々なお店をのぞいてみたが、どこも予算オーバーしており、諦めることにした。お店を探していると、展示スペースの様な場所を見つけた。そこには、飛行機のコックピットが展示してあった。その珍しさに感動し、写真に収め、その場を離れた。1 階に下り、昼食をとることにした。今回はパスタのチェーン店に入店し、パスタを注文した。1 時間ほどかけてゆっくり食事した後、お土産をみた。以前から知っていた仙台のキャラクターの柄が入ったクッキーと、仙台の有名なお菓子を購入した。待ち合わせまでの残りの時間 30 分ほどあったので、屋上に行ってみることにした。屋上に出ると、すでに友人が数名いて、合流することができた。外は天気良く、風が心地よかった。あつという間に集合時間間近になったため、集合場所へと向かった。

14 時、保安検査所に入った。何回か止められたが、抜けることができた。通り抜けると、以前にテレビのニュースで見たことがあるテレフォンがあった。それは、保安検査所を抜けた側と抜けてない見送りの人とがガラス越しに話すことができる。そのテレフォンで話している 1 組の親子がいた。小さい女の子 2 人が祖父母と話していた。その姿は、とても感動的で、このシステムを考えた人は素敵な発想を持っている、とすら思ってしまった。そんなシーンに感動している間に、搭乗の案内がかかった。14 時 50 分、飛行機は離陸した。1 時間のフライトは、とても短く感じた。少し現地でのことを振り返ってノートに記録している間に、北海道に到着しており、着陸態勢に入ろうとしていた。

16 時 09 分。着陸。10 分後、我々は解散となった。16 時 30 分発の札幌行きの JR に乗車。現地に行く前は 3 泊 4 日もやっていけるのだろうか、と心配していたことを思い出した。しかし、実際の 3 泊 4 日はとても短く感じた。もっと上手にできたところもある。ああ、あの村はいいところだった…。様々な感情が溢れ出てきた。そのとき、札幌に到着することを知らせる車内アナウンスが放送された。下車の準備をする。17 時 09 分、札幌に到着した。家に帰るまでがフィールドワーク。先生が 1 時間ほど前に言っていた言葉を思い出しながら、家に向かってまた歩き出した。



2017年度 「フィールドワーク」参加者名簿

札幌学院大学教員

木戸功（家族社会学、社会調査法）

内田司（地域社会学、生活構造論）

人文学部人間科学科 学生 8名

新井 緋香利・川村 亜季・佐藤 楓・高瀬 優太

高見 知紗・由良 綾音・太田 早紀・松田 みなみ

2017年度「フィールドワーク」報告書

札幌学院大学人文学部社会調査室研究基礎資料報告書 39

タイトル

発行日 2018年3月30日

編集・発行 札幌学院大学人文学部社会調査室  
江別市文京台 11 011-386-8111 (4702)

印刷 札幌学院大学